
ツギハギ

ふあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツギハギ

【Nコード】

N8231C

【作者名】

ふあ

【あらすじ】

特異な能力を持つ者たち、「odd capacity」通常OC。彼らによって構成された犯罪者組織、「フリークス」。失い、傷つけあいながら彼らを追う政府組織。このいちたちごっこに終わりはあるのだろうか。どこまで失えば、終わりは来るのだろうか。

1 - 1 睡魔の払いかた

ザラついた温かいものが何度か頬に触れ、反対側に寝返りを打った。追うように、背を向けた首筋を小さな柔らかいものに押され、ようやく少年は目を開けた。ぼん、と、先程彼の頬をなめて首を頭で押していたものが目の前に降り立つ。

少年の黒い瞳に、真っ黒な身体に深い緑色の眼をもち、首に細い青色のリボンを巻いた小さな猫が映った。

「ああ……。おはよう、クロ」

寝惚け眼のまま彼が言っていると、クロは投げ出されたその左腕に、濡れた鼻を押し付けた。右手でその小さな体を軽く撫でて、起き上がるベッドの足元にある靴をひっかけて、反対側の壁にある窓へ歩く。あとは椅子が一つしかない小さな部屋なので、数歩で窓の鍵に触れられた。鍵を回して窓ガラスを横へスライドさせると、冷たい空気が流れ込む。半袖半ズボンの薄い生地の間隙をぬって、透明な風が体温を奪う。

「さむっ」

と、思わず彼は身震いした。しかしそう言いながらも、ぼんやりと外を眺める。朝を迎えたばかりの街はまだ静かで、どこか遠くで雀の鳴く声しか聞こえず、アスファルトの道には、ゴミ捨てに行ったり早くからジヨギングをする人たちしか見られない。遠くの靄の中に、立ち並ぶ高層ビルの巨大な影が見える。

どうかするとそこで再び意識を失いそうになったが、猫の鳴き声ではっと顔を上げた。見下ろすと、クロが自分の左足をしきりに頭で押して見上げては、

「こゃあ」

と鳴いている。「わかったわかった」と、少年が反対の足を一歩踏み出すと、クロは先に立って駆けて行った。

びっくりするほど冷たい水で顔を洗い、茶色がかった黒髪はほっ

といたまま、隣の部屋の隅にある流しの下に膝をついた。床が冷たい。流しの下の方に頭を突っ込み、さらに半身まで入れてから、小さな缶詰を取り出す。俗に言う猫缶。その中身を美味しそうに食べるクロを眺めながら、

「クロ、猫缶ってそんなにうまいか？」

と少年が聞くと、猫は一度顔を上げて数度瞬きをした。再び俯いたその頭を撫で、彼は立ち上がった。

十五、六程の彼には不自然だと言われる、薄茶色の大きめのコート。その下は、指先や足首まで届くほどの丈の服で、手袋までする。その上小柄だから、絶対寒がりだとよく言われるが、別にそうでもない。秋生まれで夏の方が好きだが、自分が寒がりだと思ったことはない。

目が覚めて三十分もした頃、少年と黒猫は部屋を出た。外の冷え切ったコンクリートは、少しずつ温まりだしていた。

1 - 2 睡魔の払いかた

軽々と塀に飛び乗ったクロは、いつの間にかどこかへ消えてしまっていた。日本の首都、東京の隣に位置する千葉県。背の高いビル
の立ち並ぶ街を、少年は一人で歩く。数年間通い続けた道なので、
目をつぶってでも行けそうな気がするが、いくらなんでもそんな事
はしない。

通りに面した場所にある一際高いビルの中へ向かう。「OC研究
対策本部」、政府の機関だ。

OCとはodd capacityの略称で、人間の限界を超え
た非凡な能力を持った者のことを示している。彼らの能力は、職人
だとかオリンピック選手だとか、そういう非凡さとは根本的に違う、
先天性の非常に特異なものだ。ここは、その能力の開発や研究から
彼らによる犯罪の対策までを行う政府機関の本部だ。東京ではなく
そのお隣の千葉に本部が置かれており、全国に八箇所しかない支部
の統制もここで行われていて、職員の数もかなり多い。

急に暖かい所に入ったせいか、再度眠気に襲われながら二階に上
がり、複数ある扉の一つに向かう。一階は一般人の案内用のホール
なので、特に何の部署もない。

壁に、縦横十数センチ程度のパネルが張り付いていて、その横に
扉のあるところで立ち止まった。そのパネルはさらに等分に分割さ
れており、テンキーになっている。左手の手袋を外して、覚えこん
でいる十四桁の数字を指で押して入力した。始めは覚えるのに苦労
したが、電話番号と同じで、使っているうちにいつの間にか覚えて
いた。

照合が終わり、小さなカードが出てきた。それを取って自分のも
のかどうか確かめる。違うはずがないが、決まりみたいなものだ。

片岡愁。同姓同名がいるかもしれないが、その隣にある年齢の二
桁目に一がつく者は殆どいないから、間違いない。

そのカードを、今度は扉の横にある、横長の小さな穴に通す。二度目の照合が終わり、カードが出てくると同時に扉が開いた。毎度毎度回りくどい作業だが、これが毎日だとたとえ無意識下であっても、今の愁のように脳が半分眠っている状態でも、出来るようになる。

入るとすぐ横に受付があり、奥には幾つか部屋が並んでいる。背後の扉はすぐに閉まり、愁と、受付のお姉さんしかいないその場所は、外に比べて不思議なほど静かだった。

「おはようございます」

そう頭を下げた通り過ぎる愁に、彼女は挨拶を返して可笑しそうに言う。

「大丈夫？片岡君すごく眠そうだけど」

「……わかります？」

とは言ったものの、実際眠いのだから仕方ない。しかしそんなに分かりやすい顔をしているのだろうか。

「だって、目が半分しか開いてないもん」

「もてからこんなんです」

「嘘ばっか。眠いつて顔にかいてる」

そうか、それなら仕方ない。だが見た目だけならともかく、この眠気自体はどうにかしないとならない。

小さくうめき声を洩らした。数秒後、眠気覚ましプラス見た目もごまかせる方法を思いついて、愁は右手で片頬をつまんで指で握った。痛い。が、臨時的にはいいような気がしないでもない。

「まだ目は開いてないけど」

「痛くて寝れないから、多分大丈夫です」

頬をつまんだまま笑って、後ろを向いた。ああ、こうしておけば寝ないですむかもしれない。そう思いながら、「2」のプレートがついたドアの取っ手を下げた。

部屋の中には、三十台ほどの事務机が並んでいる。実際フルに使われているのは二十五台だけだが。

列の一番端の席に着くと、先に隣の席に着いていた男が顔を上げた。

「あ、おはよう、愁」

二十代後半ほどで、スーツをきちんと着て眼鏡をかけている。真面目なその身からは爽やかさがにじみ出ていた。OC犯罪対策部の、「ザ・ベスト・オブ眼鏡」とは彼のことである。

「おはようございます、高梨さん」

一度頭を下げて言った愁に、彼はこの部屋の誰もが疑問に思っているであろうことを告げた。

「……虫歯でもできた？」

「いや、こうしてたら眠くても寝られないから」

「眠いのか」

なんか最近眠いんですよと、痛い頬を擦る愁の肩が、突然背後から結構な力で叩かれた。「お前来るの遅いぞ。何時だと思ってるんだよ」そんな言葉が聞こえてきたが、別に遅刻したわけでもないし、普段どおりのはずだ。

「ああ四万さん、おはようございました」

「何で過去形なんだよ」

短い黒髪に、あまり眼つきの良くない四万というその男は呆れたように言った。数年前はまだ大学生だったという程の外見で、学生時代は運動部が不良、もしくはその両方かといった雰囲気をかもし出している。

「お前遅いんだよ。俺なんか二十四時間前からずっと出てないんだぜ」

「四万はただ泊り込みだったんだろ」

高梨の言葉に、

「まあな」

と四万は答え、首を曲げて鳴らした。

「それより愁、眠いときはボールペン使えばいいよ。顔引つ張るより手に突いた方が目が覚める」

「もう寝てるけど」

代わりに四万が呟いた。

ペンをノックして高梨が振り向いたときには、既に愁は机に突っ伏していた。背中が僅かに動いていて、一定の間隔で呼吸をしているのが分かる。一番長いところで肩辺りまである髪がかかっている顔はよく見えないが、寝ているのは明らかだった。

「一瞬だな……」

「こんぐらいの時は俺もよく寝てたな。学校で」

「学校で寝たら駄目だろ」

「なんだよ。まさか、学校で居眠りしたことなんてないとか言うのか」

「そりゃあるけど、シャーペン腕にさして頑張ってたよ」

苦笑する高梨に、ボールペンを指で廻しながら四万が口を開く。

「すごいな。俺なんか刺しすぎて芯が折れて手ん中に残っちゃったときから諦めた」

「なんだよそれ」

「ほんとだって。日曜なんかもつとひどかった。三度寝して起きたら夕方だもんな」

「何に疲れてたんだ」

四万はペン回しの手を止め、遠くを見る目になり、

「日々生きることに疲れてたんだな」
しみじみとそう言った。

一瞬以上の間があり、やがて高梨がそつと視線をそらした。

「お前今笑っただろ」

「笑ってないよ」

「その目は笑ってる。俺を馬鹿にしてる目だろ！」

「だから違っつて。自意識過剰だよ、四万準一くん」

「いや、だから」

声を荒げて立ち上がりかけた四万の頭が、突然何かに高速ではたかれた。テニスのスマッシュ時によく似た音が響き渡る。

「うるっさい！朝から何騒いでんの」

そう怒鳴られたが、四万はあまりの衝撃にしばらく返事が出来なかった。ようやく、

「ちよつと騒いでただけじゃないすか……」

と相手の方に視線を向けたが、語尾はしぼんでいく。

「そんなに騒ぎたいなら外に行つて好きなだけ叫んできなさい」

先程彼をはいたいた、丸めた紙束で扉の方を示し、彼女は告げた。

長谷川明日香、OC犯罪対策部長兼二班班長。茶色の髪を背中まで伸ばし、常識で分けると美人の部類に入りそうな容姿だが、いかんせん女性とは思えない威厳やなんやらがにじみ出ている、元不良だと言われる四万でも紙束だけで黙らせてしまう。

「いきなりそんなことしたら、捕まるじゃないすか」
すねたようにぼやく。

「仕事中に騒ぐ人間はここにはいらぬの。分かる？」
半眼が冷たい。

大人しく椅子に座る四万を見下ろし、明日香は彼の向かいに視線をスライドさせた。

「机によだれ食つて寝てる奴なんかは論外だけどね」

次の犠牲者へ高梨が警告を発するより速く、愁のこめかみを紙束がひっぱたいた。一方通行のスマッシュの音が響く。

顔も上げられず、痛そうなお呻き声だけを上げて愁は頭を抱えた。

こめかみを擦りながら上げた視線は焦点が定まっておらず、本気で寝ていたらしい。

「あんたねえ、これで居眠り何度目だと思つてんの。うとうとする人間はいても、ここまで寝る人間はこの建物にはまずいない。しかもそれを何度も繰り返すやつがいるっていうのは、結構な問題なんだけど」

これは結構にまずい状況だと高梨は思うのだが、見事に寝起きな愁にはまだよく分かっていないらしい。

「明日香さん……」

「なに」

しかも説教の最中に口出しだ。完全に寝惚けている。自分が怒られてるわけじゃないのに、彼は緊張して二人を見ていた。

「あんまり怒るとしわが増えるって、この前誰かが言っていましたよ……」

そう眠たげに呟いた。

寝惚けるにもほどがある。他の人ならまだしも、長谷川明日香という人に使っていい台詞ではない。いや、使ってはいけない。

高梨は、タイミングがあれば助け舟を出そうと思っていたが、完全に諦めた。四方は「おいつ！」と思わず声を出したが、それ以上介入する勇気は出なかった。反対に、それまで「触らぬ神にたたりなし」の掟に従っていた周囲の無数の職員が振り返ったが、だれもなにも言わない。というより、言えない。

明らかに異常な空気に、ようやく愁も正常な判断力を取り戻し始めた。と同時に、激しい後悔に襲われる前に慌てて言葉を繋げる。

「あ、いや、そういうことじゃなくて……えっと、増えるじゃなくて出来るって言って……あれ、そういう問題じゃない？」
救いようがなかった。しかたなく、みんな目をそらした。

それから一週間、愁は睡眠恐怖症に悩まされ、職場でうとうとする者はOC犯罪対策部二班では一人として出現しなかった。

十二月に入ったばかりの、寒い日の出来事だった。

身を切られるように寒い、冬の暗い夜。空には上弦の月と数えるほどの星が輝いているが、行く手を照らしてくれるほどの光にはならず、暗い道を一定の間隔を置いて並ぶ街灯が浮かび上がる。すれ違う者は一人もない。歩道と平行に並ぶ道路でも、ときどき思い出したように自動車が疾走していく程度だ。冷え切った空気の向こうに、意味もなく赤と青に切り替わる信号が見える。動くものはその明かりと自分の長く伸びた影しかなく、全てが死んでしまったかのように静かだ。仕事でなければ、愁だってこんな夜中に出歩いたりはしない。

OC犯罪対策部は普段は事務ばかりしているが、あくまでも、直接的な犯罪対策、外に出て活動するのが正しい姿だ。事務ばかりというのは犯罪が少ないという証拠で、つまりはいいことなのだが、本当はそのためにつくられた部署ではない。OCによる犯罪、もしくは警察の手に余る凶悪犯罪の対策が目的なのだが、あまり派手な活動は出来ないので、部署外の人にはその目的を忘れられていたりする。

寒い。外気に触れる頬がぴりぴりする。こんなに寒いのに、吐く息が白く空中に溶け込んでいくのを見ると、自分の体の温かさが実感できる。

「最低気温何度だっけ……」
街中の巨大スクリーンでは、今年一番の寒さだと天気予報士が言っていた。予想最低気温の数字の前に横棒がついていたのを思い出し、ついでに、今年一番の寒さだと断言していたのも記憶からよみがえり、溜め息をつく。

ガードレールの横を、明らかに違反速度で去っていった車を眺めながら、寒さで強張った左手を閉じたり開いたりして動かす。こんな薄い手袋なんて気休めにもならない。肝心なときに指が動きませ

んでしたじゃ、話にならない。

左手をぎゅっと握り締め、くるりと愁は振り返った。頭上から真っ直ぐ振り下ろされたバットに手を伸ばし、右側へはたく。軌道を反れたそれがコンクリートを叩き、金属特有の澄んだ音が響き渡った。驚愕に引きつった相手の顔を確認する。間違いない、こいつだ。「待て！」

金属バットから手を離し、路地裏へ駆けて行く男を追う。単純な足の速さで大差をつけられるとは思えないが、狭い路地裏は入り組んでいて、見失ってから再び見つけるのは面倒だった。残念ながら、この辺りの土地勘はない。

猫の子一匹いない狭い路地裏を、相手は右へ左へと疾走して撒こうとしている。流石通り魔、逃げ足は速い。しかしその距離も少しずつ縮まっていく。

もう一息だというところで、男は右へと急カーブを切った。すぐさま進行方向を変え、右の細道へと足を踏み入れる。と、何かが視界の大半を占めて飛んできた。

咄嗟に首を傾げる。握りこぶしより一回りほど大きな石が、髪をかすめてそのまま背後の壁に叩きつけられた。石がいくつもの小さな塊に分かれて地面に落下する。

手を使わずに物を動かせるというポルターガイスト現象のようなOCに最も多い能力だ。情報部によると、彼は犯行後の逃走時にその能力を使って、今まで逃げ延びてきたらしい。夜中に一人で歩いていた市民が、彼によって三人ほど殺害されている。あるときには狙われていた被害者は助かったが警官一人が大腿骨折の重症を負わされた。証言によると、工事現場にのトラックに積まれていた鉄骨が急に弾け飛んだらしい。厄介な能力だ。

基本的に一人で行動する愁は自分がおとりになるしかなく、犯人の確認も一人でやるしかなかった。しかも証言やら何やらから特定された外見の特徴は極めて曖昧だったのだが、それでも暗がりで見ただけの姿格好は、見事にそれと一致している。今となっては、犯人

であるかどうかなんて疑いようもない。

一息つく間もなく、再び空いた距離を愁は駆ける。疲れたのかそれとも無駄だと思ったのか、男の走る速度はさっきよりも落ちていた。向こうで振り返るのが見えるが、表情はよく分からない。

自分の前にある影が僅かに濃くなるのに気付き、愁は急ブレーキをかけて数歩下がる。さっきまで自分の影があつた場所に、砕けた植木鉢と少量の土が散らばつた。

思わず舌打ちをして上を見上げると、右手にある建物の屋上の縁に何かが並んでいるのが見える。春や夏には花々があそこで光合成をしていたのだろうが、植物の枯れ果てた寒い冬には、ただの危険物にしかならない。子供の力でも落とす事が出来そうだが、こんな狭い路地裏では、わざわざ苦情を言う者もいなかったのだろう。月の光を受けて、植木鉢やプランターが整然と並んでいる。

このままでは、逃げられる。しかし、闇雲に追つても追いつくまでに頭を割られる危険性は限りなく大きい。かといって引くことなんか出来ない。ここなら、ぎりぎり射程距離内だ。

短く息を吸つて、愁は右足で地面を蹴つた。落下する鉢の下をくぐり、ほんの少し縮まつた相手との距離を目で計りながら右手をコートの内側へ滑らせると同時に、背後で固いものが碎ける音がする。すぐに引き抜いた右手こぶしの指の間で、三本の鋭利な刃物が月光を反射する。中指の長さほどの刃。細長い菱形形状で、先は刃物らしく恐ろしいほど尖っている。それを三本とも一気に投げた直後、足を一步引く。鼻先をかすめて、土の詰まつたプランターが鈍い音を立てて地面に激突し、中身をぶちまけた。

闇を裂いたそれらの一つは男の足元に突き刺さり、それにバランスを崩した身体の脇腹部分の生地を、別の一つが壁に縫いとめた。最後の一つは肩をかすめて、服を固いコンクリートの壁につなげる。うっすらと血がにじんだ。

注意がこちらから外れているうちに、地面を埋めた土や破片を踏みしめて、愁は早足で彼の方へ向かう。そして、長く白い息を吐い

て抵抗する事を諦めたような男に、ゆっくり近付く。

すると突然、男は視線を上げて愁の方を向いた。地面に突き刺さったままの刃が抜け、コンクリートに食い込んでいたのと反対側の切っ先を向けて、真っ直ぐ愁の首元へ飛ぶ。空気の裂ける音が聞こえてきそうだった。

しかし、その刃が血を被る事はなかった。ただ彼が正面にかざした右手のひらに突き刺さり、白い手袋をしている手がそれを握りしめる。一滴の血も、地面に落ちる事も手袋に染み出る事もなく。

は、と思わず気の抜けた声を出した男に、右手にある刃を握り直して刃先を男の方へ向け、その目を見据えながら愁は口を開いた。

「お前は、フリークスか？」

瞬きを繰り返して、男は少年の右手と、その手が握りしめている刃を眺めてやつと声を出した。

「まさか……、君もOCなのか？」

「そんな事は関係ない」

淡々と、冷たい声が空気を震わせる。男は、先程より近づけられた刃に目を細めて、

「フリークス……。いや、そんなものは知らない」

そう言ったその額に、冷たい刃の腹があてられる。この冬の空気よりも冷たく、愁の声は響く。

「とぼけるな。さっさと答えろ」

「……名前ぐらいは聞いたことがある。だが、それとは何の関係もない」

搾り出すようにそれだけを言った男の目を、愁は見下ろす。

まずフリークスが、通り魔なんていう中途半端で馬鹿げた事をやる筈がない。もしそんな事業があったとしても、彼らなら、警官が入ってきたから諦めるなんて事はしない。殺す対象が増えたというだけだろう。

それに、まず目が違う。何を思って人殺しなんかしたのかは知らないが、突発的なものだろう。一般人とは呼べないかもしれないが、

まだフリークスの奴らとは明らかに異なつた、常人の雰囲気を保っている。

そう最終結論を下したとき、愁の後ろから小さな影が躍り出た。首に細い青色のリボンを結んだ、小さな黒猫に男が意識を向けた瞬間、愁の左手の拳が思いつきりそのこめかみを殴りつけた。

やっぱり人を殴る感触というのは、いいものではない。改めてそう思いながら、彼が完全に意識を失つたのを確認し、愁は大きく息を吐いた。相変わらず、白い空気が立ち上って消えていく。警察ではない彼には逮捕権がなく、近くの警官が到着するまでに逃げられては意味がないのでこうしておくことしか手がないのだ。同年代の平均よりも全体的に身体が小さくできているので、大の大人を運ぶ事なんて当然出来やしない。同業者には連行したりする者もいるそうだが、見た目からなめられ易い愁は、それまでに逃走を企てられる事が多く、逆に非常に厄介だ。往生際のいい奴が、こんな事をするわけではないのだから仕方ないのかもしれないが、ただの二度手間にしかならない。

不思議そうに、失神した人間を見上げるクロの横に片膝をついて、男を壁に縫いとめている刃を引き抜いた。

その刃が夜空を映し、隅に月が覗いた。暗い夜は、まだ明けそうになかった。

3 - 1 そして黒猫はかく語る

師走と呼ばれる月は、文字通り走るように早く過ぎる。師があたふたと走り回る月だ。例年のようにいつの間にか通り過ぎていた。

ついこの間まで、ばかでかい緑の木を夜に光らせたり、三角帽子を被った熊のぬいぐるみを並べたりしていた百貨店の出入り口からは、そんなものは始めからなかったかのようきれいさっぱり姿を消していた。代わりに斜めに切った竹を並べたものが表においてあったり、数段重ねにした餅の上に葉のついたみかんをちょこんとのせた鏡餅が中に並べられているのが見える。

開店前のその入り口にすでに幾人かの人が並んでいるのを見て、日本人の祭り好きさに感心した。自分もその一人であるはずなのだが、なんと彼らの気持ちが分からないというのは変わっているのだろうか。

そんなどうでもいいことを考えていると、どこからか自分の名前が聞こえてきた。振り返ると、自転車に乗った同い年ぐらいの学生服の少年がそこにいた。きちんと並べば愁より少しだけ身長は高そうだが、それでもたいした差はない。いたずらっ子のような笑顔で自転車の上から見下ろす。

「あれ、佑輔？」

「お、やっぱり愁だった」

久しぶりに会った友人を眺めた。自転車の荷台に鞆が載っているし、時間帯的にみても学校へ行く途中だったのだろう。

「なにしてんの、こんなところで」

「こっちの台詞だって。お前こそ何してんだよ」

そう彼は訝しげに聞いた。

「ちよつと用事があつただけだよ。佑輔こそ、冬休みじゃないのか？」

「俺は今日から補習。冬休み終わり」

めんどくせえとぼやく佑輔の鞆についている小さなイノシシのストラップをいじりながら、愁は「はあ」と気のない声を洩らした。そういえば今年は亥年だったな。

「まあ、赤点だったんならしょうがないよ」

「違えよ、赤点だから補習になったんじゃねえよ」

佑輔は少し声を荒げた。

「俺は、もうすぐ、受験なんですよ」

台詞を区切りながら言われ、「ああ」と納得した。

「そっか、中三の三学期ってそんなもんがあっただ」

「そんなもん言うな」

同年齢のくせにそんなことを言う愁に呆れながら、彼はペダルに足を乗せる。

「俺そろそろ行くわ。……あ、これやるよ」

思いついた表情をして、ポケットから折りたたまれた紙を取り出して愁に手渡した。

「なにこれ」

「さっきもらった」

「いや、こんなのいらねえって……」

「じゃあな」

顔を上げたときにはすでに自転車は走り出していて、片手を振るその背中はずぐに見えなくなった。

「これもってんだけど」

そう一人ごちた。信号前に待ち伏せていたチラシ配りのバイトに、つい数十分ほど前に同じものを手渡されたばかりだった。「選挙に行こう」のチラシなど二枚どころか一枚もいらぬ。しかも同時に配られたはずのポケットティッシュは要領よくとってある。

立ちっぱなしで冷えた為か、くしゃみがでた。どうしようもないので、とりあえずたたんで、もう一枚と一緒にポケットにしまった。

「っくし」

くしゃみがでた。本日三十八回目。窓の外は既に暗く、これ以上はあまり記録更新されなさそうだ。

「おい、片岡」

四万は、時折自分のことを苗字で呼ぶ。たいてい苛立っているときが多いのだが、怒らせるような事をした覚えはないので、きつと気まぐれだろう。

「はい？」

「お前、風邪引いたのか？」

「……じゃなかったらいいんですけど」

事務よりも外回りの方が好きだという思考を持った四万と、他の部署に行った帰りのこと。帰宅ラッシュの時間を少し過ぎていて、廊下を歩いている人はあまりいない。

「風邪ですかね」

「さあな。初期症状かもな」

前聞いた話によると、風邪の初期症状は人によって違うらしい。愁は四万を見上げた。

「四万さんって初期症状はどんなんですか」

「俺？おれは……」

言葉に詰まって四万は頭を掻いた。

「わかんねえ。ここ何年か風邪なんて引いてないし」

「そうなんですか」

「俺、生まれが東北だから寒さには強えし。中学んときには引っ越したけど」

「どこらへんでしたっけ」

「秋田」

あきた。秋田といえば何かあったような……。

「秋田ってなんか出るんですよね」

「なんかってなんだよ」

「あれ、えつと。えー、なんとか……なんとかはげってやつ」

「なんとかはげ。……お前、俺の親父見たことあんのか」

「あるわけないですよ」

なんだっけ。と、愁は眉間にしわを寄せて考える。

「包丁もって人の家に押し入って脅して子供さらっていくやつ」

「……なまはげ、な」

「それだ！」

わだかまりがなくなつて、嬉しそうに愁は声を上げた。

「因みに子供拉致したりしねえから。てゆうか流石にそこまでしたら捕まるから」

そう付け足したが唐突なくしゃみの音に被ってしまい、ちゃんと伝わったのかは定かではない。

「お前は絶対東北じゃないだろ」

「残念ながら生まれも育ちも千葉です、覚えてる限りだけど」

二人は足を止めた。ここを真つ直ぐ進めば犯罪対策部で、右に曲がれば出入り口に向かう。元は帰るつもりだったのを、四万によつて半強制的に能力開発部まで引つ張られたのだ。それが終わった今はもう、犯罪対策部に戻る必要はない。

「あ、そうだ、これいりますか」

そう言つて愁はポケットから紙を取り出す。

それを受け取つて少し眺めてから、四万はそれを突きかえした。

「いらねえつて。大体俺は、言われんでもちゃんと行つてるから」

「裏紙使えるのに」

「いや、表も裏も印刷してあるじゃねえか」

やつぱ駄目かと笑いながらそれを再びしまい、

「じゃあ、僕先に帰ります」

そう言つて頭を下げた。

「ああ、またな」

少しの間四万は、その背中が小さくなつていくのを眺めた。一度だけくしゃみが聞こえた。

3 - 2 そして黒猫はかく語る

やっぱり、建物の外は寒い。雪が降らないのが不思議なくらいだ。明るい大通りを一本だけそれると、だれもない暗い住宅街に入った。明るい光が漏れる家から、子供の笑い声が聞こえる。まだそんな時間か。夜の長いこの季節は、時間の感覚が少しおかしくなってしまう。

堪えきれずにくしゃみをして両手で腕をさすった。熱はなさそうだが、本格的に風邪なのだろうか。

「あ、クロ」

向こうの電柱の、更に向こうに小さな黒い影がある。月明かりの下で、その影からはみ出る青いリボンが見えた。

愁は目を細めてそれをよく眺めた。その影の横に、ひとまわり程大きなもう一つの影がある。その側まで来て、それも黒猫であることに気付いて更に目を凝らす。にやおうと横のクロが鳴いた。

「おかしい……。クロが二匹いるように見える」

その正面にしゃがみ込んで目をこすってみたが、それは消えない。風邪の初期症状に幻覚ってあっただろうか。きつそうに青い首輪をしている透き通った青い目の猫が、クロと一緒にきちんとお座りをしてこつちを見ている。

手を伸ばしてその猫に触れ、実体であることを確かめた途端、

「きみがこの子の飼い主か」

男の声がした。驚いて辺りを見回したが、周囲には人どころかネズミ一匹いない。振り返ってもう一度正面を向いたが、そこにはさっきと同じ二匹の黒猫しかない。

「驚かずに、わしの姿を認めてほしい」

言葉の調子に合わせて猫の口が動いているのは、偶然だろうか。

「きみに二つほど頼みたいことがある。まずは話を聞いてもらいたい」

声と口の動きはぴったり合っていて、偶然だとはとても思えない。

「猫がしゃべった!」

愁が声を上げると、

「世界は広い。猫がしゃべることぐらいあったっていいだろう」

返事までしてくる。

「……これは夢だこれは夢だ早く覚めるもう朝だぞ起きろって」

嘘だ。長い夢だ。だって、猫が喋るはずなんてない。そう、猫が喋るなんてそんなこと。

「おい、人の話はちゃんときけって。人の性分を見た目で判断するのは間違ってるだろう」

いや、人じゃない。

横を向いて頭を抱えた愁に、追い討ちをかけるように声がかかった。

ああ、自分はずいに頭までやられてしまったのだろうか。風邪とは恐ろしい。

「幻聴が、とうとう幻聴まで……」

「幻聴じゃない、耳を塞ぐな」

怒られた。なんで猫に怒られてるんだろうか。

「落ち着いてくれ。OCだと言えば納得してくれるか」

「え?」

ようやく、愁は顔を上げて猫を見た。

「わしは猫に憑依している人間だ」

「ひょうい?」

意味通り、とり憑くことなんだろうが、そんな力を持っている人間は見たことも聞いたこともなかった。だが、そうだと知って改めてまじまじと猫の姿を眺める。……どう見ても猫だ。

「ああ。それで、猫に取り付いている身の上で頼まれてほしいことがあるのだが」

「……僕にですか」

あれ、猫に敬語を使うべきなのだろうか。

「この姿で下手に専門機関に行けば、必要以上に騒がれるだろう。事態は一刻を争うのだ」

「はあ」

一刻を争うといわれても、なかなか実感がわかない。

「偶然出会ったこの子に相談したところ、きみなら何とかしてくれるのではないかということだな」

「じゃあと、クロが瞬きをしながら鳴く。人が動物にとり憑くと、人じゃないものでも話せるようになるらしい。」

「あー……、そうですね。……僕は何をしたらいいんですか」

街中で無差別にくぼられるチラシだって、差し出されれば拒絶できない性格だ。頼まれてくれとまで言われたら、相手が猫の姿をしていても、話も聞かずに断れない。

「話せば長くなるのだが……まず一つ」

猫は首を前足で掻いて続けた。

「この首輪を少し緩めてくれんか。苦しくて窒息しそうだが毛皮に食い込んだ首輪は、確かに必要以上にきつそうだった。」

3 - 3 そして黒猫はかく語る

その猫は、志田と名乗った。後数年で定年というときに病に倒れ、余命いくばくもなかったそうだ。すでに体中にがんが転移していて、自宅療養という名で死を待っただけの日々を送っていた。何とか新年を迎え残りの寿命がひと月を切ったある寒い朝、彼が寂莫の思いを外を眺めていたそのとき、家の塀の上を一匹の野良猫が歩いているのを見つけた。尻尾を高く上げて、しっかりとした足取りで狭い足場の上を歩いている。よく、庭にある柿の木から柿を盗んでいた黒猫で、ここ数年間、互いに対峙しあっていたやつだ。だが、今となつては怒る気力もなかった。

まさかあいつより先に死ぬ事になるとかという思いと、どこか和やかな懐かしさを込めてその動きを眺めていると、猫が不意に振り返り、その青い目と目があった。一度猫が身震いした途端、自分の体のおかしいことに気が付いた。早めにお迎えが来たのかと思いきや、なぜか自分は両手までついて青い空の下に立っている。肉球のついている手を見て自分が猫に憑依したのに気付いたときには、驚きのあまり塀から転落しそうになった。ここ何十年も出来なくなっていたことが、死ぬ間際になって再びできるようになったのだ。さつきまで常に身体のどこかが痛んでいたのに、今はどこまでも走っていける気がするほどに元気そのものだった。

半日ほどしたら帰るつもりで塀の上を駆けて行っただが、慣れない猫の身体ではそう上手くはいかなかった。

保健所の男どもに追いかけれ、なんとか逃げ延びてへたつているとき、「ママ、ねこちゃんがいるよ」の幼い子供の声と共に無理矢理わしづかみにされて足が宙に浮いた。無慈悲で無邪気な力に、相対する力もなく、ママが動物嫌いな事を祈ったが、「しょうがないわね」と言う声と子供の「やったー」の台詞が交じったその数分後には、知らない車に乗せられて遠いところに連れ去られてしまっ

ていた。きつく首輪を巻かれて、とりあえず保健所の危機は去ったが、ひげをカットされそうになったところでなんとかその家から逃げ延びた。しかしそこは全く知らない街、知らない匂いの充満する世界で、ようやく見つけた駅でそこが東京ではない事を知り愕然とした。すでに元の身体から離れてから二日がたっている。上りの電車内に紛れ込もうと奮闘したが、あっさりつまみ出され、途方にくれていたところでクロと出会ったらしい。

「憑依している最中って、元の身体の方はどうなってるんですか」
アパートの二階の部屋に帰り着き、コートを脱いでたたみながら愁は尋ねた。ぶるぶると身震いしながら猫になった人間、志田が答える。

「いわゆる昏睡状態だな。でもわしの身体は大分弱ってたから、放置されていたらきつと一日ともたないだろう。あの日家には九十になる婆さんしか残ってなかったから、ほぼ確実に死んでいるだろうと思う」

あっさりと言いき、後足できこちなく耳の後ろを掻いている。

「せっかちな連中だからな、もうそろそろわしの身体を墓場に送ろうとしているだろう」

そう言って缶切で猫缶を開ける愁を見上げた。

「ここできみに頼みがあるのだが、わしをその埋葬地に連れて行ってくれないだろうか」

「それぐらい、いいですよ。……ああ、猫缶どうぞ。クロだけじゃ余るから」

側に座り込んで、頭をつき合わせて餌を食べる二匹の猫を眺めた。

「でももう埋められてるんなら、身体自体なくなってるんじゃないですか」

「こつこつということもあるつかと、遺書に土葬にしてくれと書いておいた」

食べていたものを飲み込んで、志田が答えた。

「こつこつということもあるって考えてたんですか」

「気まぐれで、子供の頃の能力を思い出したんだ。偶然」

「別のものになって行けないんですか。鳥とか」

「それが無理なんだな。一度元の身体に戻らなければならぬ」

食べ終わって、身を寄せてくるク口の喉を愁は撫でた。「ごろごろとク口が喉を鳴らす。」

「いいんですけど、一日待ってくれませんか。今日はまだ木曜だから。……傷んだりするならすぐ行きますけど」

「わしが無理に頼んでいるのだ、きみの都合で構わない。冬だからすぐに腐ることもないだろう」

ああ言っちゃったよ腐るって。自分の身体だと別に平気な単語なのだろうか。

片膝に頼杖をついて、愁はしばらくぼんやりと二匹の猫を眺めていた。

「ところで、何か知りたいことはあるか」

唐突な台詞に、へ、と思わず間の抜けた声を出す。

「猫から見る世界は、人間のものとは大分違う。折角喋る猫がいるのだ」

「あー……、そうですね……」

困ったように愁は視線を移動させた。

ク口を眺め、猫缶を見下ろし、天井を見上げてしばらく考える。

「んー……。じゃあ、猫缶って猫からするとうまいんですかね」

期待はずれだったようで青い目を数回瞬かせてから、志田は黒い尻尾で「これか？」と空の缶をつついた。

「そうだな……。あの子供の家でもらったものには劣るが、途中で食ってしまった犬のものよりは大分いい」

「犬のえさ食べたんですか」

「ちよつとな。いや、ちよつと冒険をして犬の近くに寄ったときにな」

器用に苦々しい顔を作って、

「あれは言っておくが、人の食べるものではない」

「そりゃあ、犬のだし」

「間違えた。猫の食うものでもない」

よっぽどそれがまずかったのか、「げ」という風に口を開いて言った。それを見て愁は苦笑する。

「ところで、少し前から思っていたのだが」

その表情を消して、猫はいたって真面目な面持ちに変えた。

「これは本当は言うべきではないのかも知れない。でも、一度気になっってしまったらなかなか変な感覚が残ってしまったりするだろう。覚えておくはずなのに思い出せないテスト中の心苦しさに似ている、なんというか、わだかまりというか」

「いきなりなんですか」

「わしの単なる好奇心できみが嫌な思いをしてしまったら申し訳ないのだが、どうしてもさつきから気になって頭から離れてくれないのだ」

「だから、なんですか」

猫が額に前足を当てて考え込むという、いたって珍しい光景を目にしたながら、愁は再び問いかけた。

「きみのその右手は、その、……生身のものじゃないだろう」

思わず、頬杖をついていた手を下ろし、何気ない風を装って答える。

「なんでそんなこと」

「さつき、首輪を緩めてくれたときだ。左右の手で硬さと温度がまるで違っていた」

「しまった」と愁は思った。あの時は、あとでつつこまれる可能性などまるで考えていなかった。しかし今更後悔してももう遅い。

明後日までここにいるのなら、どうせいつかはばれていただろう。なら、今言おうと後にしようと思われない。

「……そうですよ」

苦笑いしながら、先程の言葉を肯定した。

「義手、なのか」

言いにくそうに志田が上目遣いで見上げる。答える代わりに、愁は

右手の手袋を外して袖を真ん中まで引き上げた。

「これが肩まで続いてるんです」

腕の形をした金属の塊が袖口から伸びていた。左手とは全く異なるそれが、薄暗い照明の下で鈍く光る。

「ついでに言うと、足もこんなですよ」

かかと近くまである長いズボンを膝まで上げた。右膝から下では、腕と同じような金属が今度は足の形をとっている。

「金属義肢か……」

志田が感嘆の声を洩らし、愁の横でクロがのんきに大あくびをした。

「しかしこれは、使用禁止になったんじゃないのか」

「僕は、特例で許可されたんです」

膝下の金属を再び隠しながら答えた。

今使われている義肢の九割以上は、体内の電流を拾う筋電義肢せつでんで、実際に生身のものと同じように動かすことができ、更にその種類は普通義肢と金属義肢の二つに分けられている。普通義肢は、より生身の身体に近づけることが目的とされ、木製やプラスチック製のものが多く、強度や外見も本来のものとほぼ代わりがない。一方金属義肢は、不慮の事故等で四肢が欠損し「弱い人間」となってしまったことを恐れる人のために造られたものだ。金属なので本来のものとは大きく見た目も異なり、強度も生身のものの比ではない。しかし、本来自己防衛と身体能力の回復のために造られたそれは、次第に目的を見失っていった。金属の塊なのだから、それは単純に凶器になり得る。力に任せて殴れば、人一人軽く死んでしまう。国がそれに対する措置をとる前に、今度は自分の四肢をわざと失わせる人が増えた。他の者よりも優位な立ち位置に居たいがために、本来の身体を自ら捨てるのだ。彼らによる犯罪は急激に増え、遂に金属義肢を使用する事は禁止され、普通義肢に代えることが対象者の義務になった。「フリークス」等の犯罪者集団にはそれを無視している者が僅かにいるが、もちろんそれは違法である。しかし捕まらなからどうしようもないというのが、痛いところだ。

「きみのところには、金属義肢の者が残っているのか」

「いや、僕だけですな」

志田は不思議そうな顔をして、おずおずと尋ねる。

「それはその、事故か何かでも、あったのか」

「事故……いや、仕事中に昔ちよつとあつて」

もつと問い詰めたそうだったが、自制心で無理矢理それを抑えたようにな彼に、愁は続けた。

「僕はそのとき死に損なつて、それでこの継ぎ接ぎになつたんです」
「生き残り、じゃないのか」

そう聞くと、愁は何も言わずに諦めたように笑った。笑っているのに、その顔はひどく寂しそうに見えた。

3 - 4 そして黒猫はかく語る

土曜日の昼下がり、大きめの肩掛け鞆をかけて、愁は上りの電車を待つていた。二月上旬なんてまだまだ寒い季節だが、空は晴れていて比較的天気は穏やかだ。ほどなくしてやってきた電車には、数えるほどしか人は乗っておらず、席の隣にその鞆を置いて側に寄せる。なにしろ、猫が二匹も入っているのだから流石に緊張する。ばれたときのことは、敢えて考えないようにしていた。

変わる景色の中を一定のリズムで振動しながら進む電車に乗っていると、ようやく落ち着いてきた。人の少ないその車両には、小さな女の子とその母親、イヤホンをつけている大学生風の若者、背もたれにもたれて居眠りしかけている老婆の姿しかない。

静かな車内。突然、男の低いくしゃみの音が響いた。

乗客は驚いて一斉に辺りを見渡すが、当然その犯人らしき人物はいない。イヤホンをしていても気付くくらいだから、結構に大きな音だったはずだ。四人とも首を傾げ、不思議がったり、気味が悪いという顔をしている。

愁はさりげなく鞆に手を差し入れて、大きいほうの猫の口を塞いだ。

「はな、鼻まで塞ぐな。息ができん」

苦しげなすすれた声に、そっと手の力を抜く。しかし、その猫の身体は微かに震えており、次の一撃がすぐそこまで迫っている事は明白だった。

咄嗟に、一つだけ思いついた打開策を告げる。

「僕もくしゃみするんで、それに合わせてください」

小声でささやいて、猫がこくこくと大きく頷くのを横目で確認し、

「せーの」とタイミングをはかると、

「くしっ」

「えぐしっ」

絶妙なタイミングでずれた二つのくしゃみが響いた。

無駄な注目を集めた上での、この上ない失敗。もうどうしようもなかった。

「危なかった……」

「すまない」

ホームの隅に二匹の猫を放し、大きく息をついた。

「もはや心霊現象ですね」

「だな」

いないはずの男のくしゃみが聞こえるという、怖いというより気味の悪い話。

寂しくなったのか、小さく鳴いてクロが擦り寄ってきた、その頭を撫でて、

「もう一回、入っといってくれな」

鞆の口を向けた。一匹の猫が、その中に収まる。

「え、まだあるのか」

「あと少しですよ」

そう言って、もう一匹の方にもそれを向けた。

今度の電車は先程よりも混んでいるが、半分ばかりの空席が目立つ。ドアの脇にある、三人ほどしか座れない短い椅子の端に座って、再び鞆をその横に置いた。

規則的に電車が揺れ、男のくしゃみも聞こえず、横の壁にもたれて愁が夢と現の狭間をさまよっていると、ふいに声がした。

「あと七つです」

と、同じ様に小声で返す。

不特定多数の人の会話等から生まれる音で、その小さな声を気に止めるものはいなかった。電車の立てる音がまず大きいから、大丈夫だろう。

しばらくすると、

「あといくつだ」

先程と同じ声がする。

「あと六つです」

残りの駅の数を書えた。何度かそれを続けるうちに、だんだんとその間隔は短くなつていく。

「あとどれくらいだ」

「五つです」

また少しして。

「あといくつだ」

「あと四つ」

「いくつ……」

「三つ。あ、間違えた、四つです」

結局ゼロまでカウントし、鞆をかけ直して、ようやく一人と二匹は電車を降りた。

3 - 5 そして黒猫はかく語る

それからは時間を稼ぐ為に徒歩で向かい、時刻が午後八時を過ぎた頃に最終目的地である、とある寺の門前に着いた。すでに辺りは真っ暗で、すっかり冷え切った冬の空気が辺りの草むらを揺らす。本堂から少し離れたところに、ここの住職一家が住んでいるのだと思われる家があり、そこから明るい光が漏れているが、その奥にある広い墓場には深い闇が充満している。

家の側を物音を立てないように慎重に通り過ぎ、その光景に思わず立ち止まった。真っ暗な闇の中、かろうじて見えるのは黒々と立ち並ぶたくさんのお墓だけ。それらが一面に整列しており、ときおり強い風が吹いて、ところどころに生えている木と、お供え物の花がざわざわと音を立てている。

持参してきた強力な懐中電灯のスイッチを入れて前を照らすのが、広い敷地の奥まで照らす事はできず、なんとか自分の数歩前までの足元が明るくなる程度だ。その向こうは何がいても分からない暗闇が続いている。

「最高じゃないですか、これ……」
「だな」

愁の足元で志田がうなった。クロはというと、その隣で後ろ足を使って耳の後ろなどを掻いている。

「どっちに行ったらいいんですか」
「多分、こつちだったと思うのだが」
自信なさげに前足で前方を示す。

「暗いから、はっきりとは分からないのだが」
「猫って、夜のほうが良く見えるんじゃないんですか」

「人間よりは見えやすいが、それでも雰囲気が違うとどうにもな困ったふうに言うが、もちろん愁にも分かるわけがない。

「とりあえず行きましようか」

ここで立ち止まっても冷えるだけなので、進む事にした。静かな墓場に微かな足音だけが響く。

「彼は全然平気らしい」

志田の言葉にクロの方を見ると、懐中電灯の光のぎりぎり外側を、すたすたと軽やかな足取りで進んでいる。ときおり光の中にその姿が浮かび上がり、クロが夜行性だったことを思い出させた。いつも愁が寝る頃にはすでにうとうととしていたりするので、すっかり忘れていたが。

夜の墓場で迷うという自暴自棄になりそうな出来事を乗り越え、なんとか目的の場所までたどり着いた。そこに書かれている文字を照らしてみても、間違いはなさそうだ。

「これですよね」

「ああ、頼む」

懐中電灯を脇に置き、一段高くなった場所に膝をついた。

「なんか墓荒らしみたいだな」

ぼやきながら、石の一つに両手を当てて力を入れて引き上げる。意外とそれは重く、右足で思い切り地面を押しして頑張ると、やっと動いてくれた。中に黒く口を開けた穴を見下ろして、肩を回した。

つけっぱなしだった懐中電灯を取って中を照らして覗き込むと、すぐに顔を逸らして墓石にちょこんと乗っている猫の方を向いた。許可を取っているとはいえ、あまり長い間見たいものではない。

「どうやって入れるように言ってたんですか」

「亀か何かに入れるように、書いておいたんだが」

「中にはあといくつ入ってたんですか」

「骨壺か。確か、先に四つ入っていたはずだ」

あれ、と首を傾げてもう一度中を覗き込む。中に並ぶ小さな影を指差しながら数えると再び顔を上げた。

「なんか……五つあるように見えるんですけど」

「ほんとか」

意外に深かった穴の中に飛び降りたその姿は、すぐに光から外れて

見えなくなつた。奥の方を探る気配がして、しばらくすると黒い影が中から飛び出してくる。愁の横に座つたその顔は、猫のものとは思えないほど険しい。

「確かに、骨壺は四つだつたはずなんだ」

「じゃあ、やつぱり……」

「ああ」

神妙な顔で頷く。

「あいつら、わしの遺書読まなかつたな」

ため息をつき、遠い目をする。

「大晦日の前日に作つたやつだつたんだ。次の日の大掃除で見つけ

た奴が……捨てちまつたのか」

「読まなかつたんですかね」

「あんなよれた紙切れの中身なんか、わざわざ見ようとなんてしなかつたのかもな……。もしくは知つてて無視したか」

それはきつい。その前に、よれた紙に書いたのか。

「おい、誰かいるのか」

墓を元に戻し終わると同時に、静寂を破る声 that 唐突に響いた。脇を明るい光が通り抜け、向こうの方から土を踏みしめる足音が近づいてくる。

愁は慌てて懐中電灯のスイッチを切り、音と反対側の墓の面に背中をつけて座り込んだ。すぐさまクロがその横に飛び降りてくる。

呼吸まで止めるようにして身じろぎもせず、冷たい石に背を押し付けていると、すぐ側の道が照らされ、足音が一直線にこちらに向かつてくる。歩いてくるのは、一瞬だけ見た姿と声によると、この息子であろう、大学生くらいの男のようだ。愁が打開策を何一つ思いつけないまま、彼は墓一つ分のところまで近づいて足を止めた。

「こら、そんなところに乗るな」

墓石の上に座っている黒猫に気付き、片手を振って追い払うしぐさをする。乱舞する光が、あちこちを照らしてまわった。

「知らないか」

突然そんな声が聞こえて、彼は驚いて辺りを見回す。しかし、そこには自分と猫の姿しか見当たらない。

「わしの身体、知らないか」

まさかという思いで光を声の方に向けると、青い首輪をした猫が目を細めて見つめていた。思わず後ずさった彼の足元にその猫が飛び降り、再び問いかける。

「猫が……」

しゃべった、という台詞を最後まで言わず、

「なあ」

と志田は畳み掛けて、後ずさる彼の方へ走り寄った。

彼が懐中電灯を落とさず、なおかつ転びもしなかつたのは、なかなか凄い事だろう。声がしなくなってからやっと腰を上げ、愁は明かりをつけて声が遠ざかったほうを慎重に照らした。一匹の黒猫が向こうから戻ってきているところだった。

なんとなく猫が喋るのが当たり前な気がしていたが、そんな常識は無い。現に、何も喋らずにク口は自分の側であくびをしている。

「逃げられた」

「そりゃあ、あんなこと言ったら」

シチュエーションとしてはこの上ない。これで逃げないほうがおかしい。

「とにかく、ここから出ましようか」

いつだれが戻ってくるのか分からないのだから、とりあえずここから離れなければならぬ。そう思っただけで見下ろすと、心此処にあらざといった顔で、志田はどこかを見つめていた。

彼の感情を想像しようとしたが、なかなかあることではないので難しい。こういふときにかけるべき言葉も思いつけず、愁はその首元を掴んで持ち上げた。猫の首元には痛点が少なく、掴まれてもあまり痛くはないらしい。母猫が子猫の首を加えて運ぶのはそのためだ、ということを教えてくれたのは誰だったか。やはりそれは本当だったらしく、まだ放心したような顔をしているその身体をよいし

よと肩に乗せて、愁は乗り越えられそうな塀を探して再び歩き出した。

朝がやってきて、ドアを開け放した玄関にしゃがみこんで、愁は黒猫を見下ろす。朝の冷たくも爽やかな風が、すつと部屋の中に入り込んでくる。

「なんか、すみませんね。僕が一日早く行ってたら」

まだ身体は残っていたかもしれない、と続けようとする彼を驚いたように見上げ、

「いや、きみに無理に頼み込んだのはこっちの方だ。礼を言う」
そう言つて志田は深く頭を下げた。つられて愁も頭を下げる。

「猫として生きるというのも、なかなか悪いものではないしな」顔を上げた愁の黒い瞳を見つめそう言つと、その横で「にゃあ」と声を発したクロの緑色の瞳を振り返り、軽く尻尾を振つて志田は背を向け、外へと一歩踏み出した。

が、すぐに足を止めて振り返る。不思議そうな顔をする愁に、「
そつえば」と口を開いた。

「わしが思うに、飼い主というのは自分が飼っている動物にどう思われているのか気にするものだと思う。これは勝手に言っていることだから、聞きたくなければ耳を塞いでもらってもかまわない」
少し間を空けて、続ける。

「その子はきみのことが大好きらしい。首にリボンがあるからだとかそついう理由じゃなくて、ただいたいから一緒にいるのだ。心配はない」

驚いて愁がクロを見下ろすと、「にゃあ」と再び鳴いてクロは見上げる。

微かに詰まっていた何かが消える。その何かは、実はクロは自由になりたいんじゃないか、このリボンを噛み千切つてしまいたくないんじゃないかという思いであったことにやつと気が付いた。

気の抜けたように笑い、何か言おうと口を開きながら視線を上げ

ると、すでに志田の姿は消えていた。小さな足音が遠ざかっていくのだけが聞こえたが、それもやがて消えていった。

4 - 1 予約時間は守りましょう

午後五時半数分前、なんとか間に合った。呼吸を落ち着けながら、受付へ向かう。

「すみません、形義科の南先生のところに予約してたんですけど」

「南先生ですね。お名前は」

「片岡です」

受付の女性は手元のパソコンに何ごとか打ち込み、画面を覗き込んだ。まだ大丈夫だという事を聞き、軽く頭を下げて、示された方向へ歩く。今頃やって来るような人はまずいならしく、周囲では会計を待つ人たちが暇そうに雑誌を読んでいたり、子供達がテレビの教育番組を眺めている。あとは、お見舞いに来た人が談笑しながら歩いていたりする程度だ。

疲れた。なにしろ、駅からこの総合病院まで走ってきたのだ。病院まで自力で走ってくるというのもおかしな気がするが、受付が締め切られていて帰るしかないというのも、虚しい。

二月だというのにうっすら汗をかいてコートの襟元をばたばたやるのを見て、近くにいた子供が不思議そうな顔をするが、愁は気にしないことにする。二階の奥にある、形成・義肢科の前は静かなもので、他の患者はもういないらしかった。椅子に座って待っていると、すぐに名前を呼ばれた。

廊下からドアの向こうに入ると、左手に短い通路があり、その右側の壁に一定の距離を置いて三つのドアがある。一番奥の前まで行って、左手にあるカーテンを開けて数秒で診察用の青色をした半袖半ズボンの服に着替えると、そつと通路の様子を伺う。看護師もだれもない。すぐに正面のドアをノックし、返事が聞こえると同時に中に滑り込んだ。

「こんにちは。じゃなかった、こんばんは」

どうでもいいことを訂正しながら、愁は後ろ手にドアを閉めた。

「こんばんは」と返しながら、医師が机の上のカルテから顔を上げた。二十代後半ほどで、医者らしい温和な雰囲気を持っている。

その近くの椅子に愁が浅く腰掛けると、彼は口を開いた。

「夕方でも大分暗くなるけど、大丈夫だった」

「ええまあ、無事でした」

全力に近い速さで駆けてきた愁は、曖昧に答えた。

「早速だけど、最近調子は」

「やっぱりときどき痛みますね。付け根とか」

「付け根か。寒いとどうしてもね。……まだ冬だし、慣れてもらうしかないな」

そう答えて医師は苦笑し、さて、と机上の書類に目を落とす。

「そろそろレントゲン撮ってみたいとね」

「え」と愁は思わず声を漏らして、眉を寄せた。

「じゃあ、あつちの椅子の方に座って」

のろのろと立ち上がり、別の椅子の方に座りなおす。

「そんな顔しても、いつかはやらなきゃならないんだから」

そう言われて、前にある、特に横に長い台に真っ直ぐ左腕を前に伸ばして乗せた。幅は腕よりもぎりぎり短いので、先の手首は下に垂れて見えず、右腕の方は横に伸ばして台に乗せた。

「ほんとにとるんですか」

「すぐに付け直すから」

ドライバーを手際よく右腕に差し込むのを眺めて、「うわー」なんて小声で言ってみたが、数分後には右足もろとも外されてしまった。

松葉杖を使って立ち上がり、手渡された封筒を左手で掴んだまま眺める。すぐに、それを持ったまま器用に数歩歩くのを見て、

「大丈夫？ 僕も一緒に行こうか」

と医師が声をかけるが、大丈夫ですと愁は笑って答えた。結構前の事だが、なかなかやってこないエレベーターを待たずに階段を使って転落死しかけたこともあって言っているのだらう。が、自分でもあんな事は二度としたくないので、きつと大丈夫だ。バランスさえ

思い出せば、意外と安定する。

廊下にはもう誰もいなかった。元からそれほど患者数の多いところではないので、こんな時間になれば通る人は殆どいない。すぐ近くの突き当たりに、一階で止まったままのエレベーターがあるが、こういうことを想定してここにしたのであるだろうか。違うだろうか。

金属義肢は法律で禁止こそされてはいるが、見つかったも愁は特例なので本来問題は無いはずだ。しかし、この病院でも主治医と院長クラスの人しか知らされていないのだから、いつとき騒ぎになる事は間違いない。そんな厄介ことになるくらいなら、なんとか隠しているほうがまだ。

愁はいつものように、エレベーターの壁にもたれて三階のボタンを押した。

「はい、ちゃんと右向いててねー。手は前に出しておいて、そうそう。じゃあ息すってー、はい止めて」

言われたとおりに息を止めてまだ苦しくならぬうちに、レントゲン技師が閉めたばかりの扉から出てきて、今度は反対を向けと言う。台の上に寝転がったまま左へ身体を向け、細かく指示されたように体勢を調節してじつとそのまま停止する。昔は、何で息を止めるのか等いろいろ疑問があったが、今となっては、もはや何でもいい。異常ないから帰してくれと三度ほど胸中で呟いた頃、ようやく退室が許された。

部屋を出たすぐ脇にある椅子に座り、名前を呼ばれるのを待ちながら壁にもたれて白い天井を見上げた。特に何をしたわけでもないのに、疲れた。目の前の廊下は、そろそろ面会時間も終わりに近づいているのか、お見舞いに来ていた人々やその見送りに行く人などが歩いている。横に立てかけている松葉杖が倒れないように左手で支え、ぼんやりと彼らを眺めた。

母親とその娘が祖母のお見舞いに来ていた、という事態が明白なグループが前を横切っていった。階段の前で互いに手を振っている

のを、何気なく視界に入れてみると、その母親と思わしき女性と目が合った。一瞬、彼女は驚いたような顔つきをしていたが、階段を下りようとする娘に声をかけられ、目を逸らすとすぐに視界から姿を消した。

後に残った祖母が、再び愁の前をゆっくりと横切り、病室のある廊下へ曲がつていった。愁はため息をこらえて、床に立てた松葉杖に額をくつつけた。

驚かれるのは、しょうがないと思う。彼らとは異なった外見なのだから、それは仕方無い。だが、その後の彼女の目が、やりきれなかった。かわいそうな子どもを見る、哀れんだ目。何も知らないくせに、かわいそうだと決め付けて見下ろされる感覚には、未だに慣れることが出来ない。確かに自分は失ったものが多いが、そんな自分がかわいそうだと思ったことはないし、そんな無責任な哀れみはただうつつとうしく、余計に惨めになるだけだった。

愁は自分の名前が呼ばれたことに気付き、はっと顔を上げた。数分前よりも少し重くなった気のする身体を起こして、封筒を受け取りに受付へ歩いた。

4 - 2 予約時間は守りましょう

「ああ、おかえり、愁」

封筒を、形成・義肢科の受付に出して診察室に戻ってきた愁に、そう言いながら医師は資料から顔を上げ、

「あれ、どっかで転んだ？」

怪訝な顔をして愁の顔を覗き込んだ。

「え、いや、なんでもないです」

無理矢理笑いながら、流石だといえるその観察力に内心で感心する。納得の行かない顔をしながらも頷き、椅子に座るよう示してから、彼は、受付から回ってきたレントゲンを眺めた。

二人で、ボードの強い光に浮かび上がるレントゲン写真を眺める。たいして医学的知識のない愁にはよく分からなかったが、いつでも見られるものでもないもので、興味本意で見続けた。

「特に異常はないみたいだね」

しばらくして医師が口を開いた。

「金属義肢って生身のものとは全然重さが吊り合わないから、背骨なんか歪みやすいんだけど……今のところ変わったところはないね」

「じゃあ、次は身長測ろうか」と彼は続けて、愁はさっさと部屋の隅にある計測器まで片足で跳んで向かう。できるだけ背中を押し付けて身長を測った。

再び、腕を外した台の前にある椅子に座って、医師が話すのを待つ。

「体重は比べようがないけど……身長も平均には足りないね。むしろ低くなってる」

「え、縮んだんですか」

「一ミリだからね、誤差の範囲だよ」

誤差だといっても、数値が小さくなっていく事に変わりはない。

がっかりした様子で左手を台の上に投げ出すのを見て、医師は苦笑する。

「これから伸びる人だったたくさんいるよ」

「先生、保障してくれますか」

「それは言い切れないなあ」

気落ちしたように左手の指先を眺めている愁に、彼は外したばかりの右腕を、その肩にあてながら話しかけた。

「そういえば、今は他の科には行ってるのか」

「他のところですか」

台に頭を乗せているので、舌を嚙まないようにしながら愁は答える。
「眼科と皮膚科と……あと耳鼻科にも行ってたけど、かなり前から行ってない」

義肢を取り付ける作業をぼんやり眺め、続ける。

「他の科って行きにくいんですね」

「行きにくい？」

「何かの拍子に見えちゃったらどうしようとか」

「……ああ、このこと」

腕の形をした金属を指先で叩くのを見て、肯定した。

「だから、風邪ひいたときとか大変ですよ。自力で治すしかないから」

「最近風邪ひいたんだ」

そう聞かれて愁は頷いた。あまり詮索されても、冬の墓場に忍び込んで悪化しただなんて、それこそ悪い冗談だ。

「大分前に出された風邪薬とか出てきたんですけど」

「あまり古いのは使わないほうがいいよ」

「そうですね」

じゃああれは捨てたほうがいいのか。なんかもつたいない気もするけど。

「抗生物質とか出してくれませんか」

「それはちょっとできないな。ちゃんと内科で診察してからじゃな

いと」

やっぱり風邪はひかないほうがいいな。それを聞いてそう思った。

ドライバーで肩と腕の付け根をくつつける。実際それが行われているわけだが、痛みなんかはまるでないので少し眠くなってきた。目を離せば、肩の辺りが何かに触れているという感覚があるかないかというくらいだ。

「そつえば、手のひらに傷があったけど」

「きず？」

「何かで引つかいたような傷」

少しの間悩んだが、やがてそれらしい記憶を引っ張り出した。

「多分、二ヶ月ぐらい前のやつですね」

「結構強く引つかいたね、これ」

「割と危なかったですよ」

眠たげな声で説明する。

「相手が物を飛ばせるのこだったときで、地面に刺さってた刃が首のここんとこに飛んできたんです」

左手で首元をさすって、その箇所を示す。

「だから思わず右手でそれを掴んじゃったんですよ。多分、その時できた傷です」

「僕が投げた刃だったんですけどね」と付け足して、愁は小さく笑った。しかし笑い返すことが出来ず、医師は数秒の間、その細い肩に腕を当てる手を止めて愁を見下ろした。

すぐに作業を再開し、彼はできるだけさりげない調子で訊ねる。

「ねえ、愁」

「はい」

「普通義肢に代えようっていう気はない？」

きよとんとした顔で、愁は医師を見上げた。

「これって、普通のやつとは繋がられないんですよ」

金属義肢と普通義肢とは、体内に埋め込んである部品の種類が違う。だから、一度金属義肢を選択すれば、違う方は繋がられないし、

その逆もまた不可能なはずだ。

「そうだけど、もう一度手術して部品を代えれば可能だよ」

一瞬、何のことだか分からなかったが、やがてその意味を理解して愁は首を横に振った。

「今更、代えられませんかよ」

「でもそうすれば、こんなに隠さなくてもすむようになる」

そう言ってくれたが、あいまいに笑って愁はもう一度首を横に振った。

「せっかく許可がもらえたんだし。それに、ここで楽なほうに逃げたら、あまりにも申し訳が立たない」

申し訳だとか、そんなことを言っているのではないということよく分かっている。自分のことを心配してくれているのだということも。この手足がついているせいで、ひどく危険な事までしなくてはならないのだから。

しかし、それでも頷く事はできなかった。

「僕は、このぐらいしないと許されません。これで全部許されるわけではないけど、でも、ここで逃げられないんです」

「そうか」と返事をした医師に、

「それにずっとこれだったから、急に変わったら身体がついていかないかもしれない。内科に行けないくらい臆病もんだから」

そう言っただけは笑った。誰かの同意を求めなくとも絶対に崩せないと決めた、たった一人の笑顔で。

手を離しても外れなくなつた腕の、肩との付け根に細い導線が差し込まれた。ビクツと指先が跳ね、それは再び持ち主の意思に従って動くようになる。

「前から思ってたんですけど、何でそれで動くようになるんですか」目の前にもってきた指を曲げたり伸ばしたりしながら尋ね、

「電気で刺激を与えて、身体の神経と機械を繋げてるんだよ。だからこれをしないと、どんなにちゃんとくっつけても動かないんだ」そう答えを聞いて、なるほどと頷きながら反対の手で腕をぐっと引

つ張った。大丈夫、元通りになっている。やがて足の方も同じ様に繋げてもらい、再び自力で立てるようになった。

「よし。今日はもう帰っていいよ」

「うわ、真っ暗だ」

窓の外に顔を向けた愁は思わず声を上げた。とっくに日は落ちており、窓ガラスは室内の光を反射して、外ではなく部屋の中の方をよく映している。

「もう遅いから気をつけてな」

「はい、ありがとうございました」

そう言っただけはドアの前で頭を下げた。

そして出て行ったその足音がそのまま遠ざかるうとするのに、医師が疑問を抱いたとき、

「うわ、そのまま帰ってた」

と自分で自分に驚く声と慌てた足音が戻ってくるのが聞こえて、彼は思わず苦笑した。

5 - 1 群青の夜空まで

「で、六回が終わるまで一對ゼロだったんだ」

「はい」

記憶を辿りながら四万が語る。

「こつちがリードしてたのによ、次の表で二点入れられてんだ」

「危ないですね」

「だろ。なのに八回目の表でまた一点入ってさ」

「はあ」

「九回目で一對四まで離されてよ」

「うん」

「うわ見てらんねえって思って。分かるだろ、この心境」

「はい」

「でさ、目え離してる間に逆転満塁ホームランでひっくり返ってんだよ。この二時間、いや三時間返せてよな」

「はい」

「で、お前俺の話聞いてないだろ」

「うん。……あ、間違えた」

そう言った瞬間、頭に腕が回された。

廊下でヘッドロックをかけるのを不審な目で見て行く人がいるが、四万は別に気にしていないし、愁にいたってはそんな余裕もない。

「ごめん、ごめんなさい……痛っ！ いたたた」

まだ声が出るうちに、なんとか腕から頭を抜き出した。血流の止まっていた頭が酸欠でくらくらする。

「今までくらったヘッドロックの中で、二番目に痛かったですよ…」

「…」

「じゃあ一番は誰だよ」

「明日香さん」

あー、と言葉にならない声を出して、四万は遠い目をして呟く。

「あの人は、まあ、別だ、な」

「あの時はほんとに、殺す気かと思いましたよ」

「俺も思った。こいつは絶対死んだなって」

数年前に、愁は入院していた事があったのだが、そのとき何とか一人で階下まで出歩いたのが悪かった。そのとき、長谷川明日香と入れ違いになったのが最大の間違いだったのだ。「なに治った気になつてんだお前は」と出会い頭で言われるのと同時に、頭に酸素が回らなくなった。手加減はしていたと言っていたが、ブラックアウト寸前というのはどうなのだろうか。

「何してんだ」

と、背後から突然そんな声が聞こえ、四万と愁はびくつと身体を震わせて同時に振り向いた。

「驚かすんじゃねーよ、このバカ梨！」

瞬時に激しい動悸に襲われながら声を上げる四万に、高梨は顔をしかめる。

「何で声かけたただけで、そこまで言われるんだよ」

「どーもこーもねえつての。あー、心臓止まるかと思った」

何故か逆切れする四万をほっておいて、彼は同じ様に心臓辺りを押さえる愁を見下ろした。

「もうすぐ今度の作戦の説明があるから、早めに集まったほうがいいよ。遅刻したらことだから」

「……分かりました、すぐ行きます」

全力で走った後のような鼓動を抑えながら、愁はなんとか答えた。改めて、OC犯罪対策部長の存在の大きさを実感しながら。

先日、三月一日に、犯罪組織「フリークス」から犯行予告なるものがあつたらしい。対象の現場は、京葉道路から千葉東金道路間。時刻は九日後の三月十日、午前零時。目的は一切不明だが、堂々とお隣の首都高などを狙わなかったのは彼らの力不足ではなく、ただ本部を挑発するためだろう。彼らは、特に金品強奪だとか著名人の

誘拐だとかいうのを目的にはしていないようで、過去に何件かそういう事件も起きているが、彼らの活動の九割以上は単純な破壊活動だ。その内容は分別のない子供が、ブロックで造ったものをためらいなく壊していく行動に似通っている。しかしそれがブロックで済めばいいのだが、彼らの場合はそれが実際の建築物や公共の建物、そして人の命だったりする。そこには、警察と一般人という区別はなく、子供のように大胆かつ予測不可能なことをやってのけていく。彼らが、高速道路なんて何も無いようなところをわざわざ選んだのは、どういうことか。これは彼らの今回の目的がただの破壊活動であるということを示している。それも、人命に対してという可能性が高い。壊すものがないのだから。ここで食い止めなければ、通りすがりの人間でも殺すつもりなのだろうが、ただ、それだけは絶対にあつてはならない。

……というようなことがさつきから延々と語られている。

「今度の担当は、宮口さんと、関さんと^{ウチ}掠だね」

この会議室に入ったとき、高梨が最初にそう呟いた。

「最近のフリークスへの対応には、幾つもの失態が数えられる。今回は東京支部の協力もあり、百名近くを動員する作戦になっている。民間人に被害の及ぶような事は何があつても避けねばならない」とさつきから勢いよく演説しているのが、宮口だ。今回の作戦を取り仕切ることになっており、そのがたいのいい体が発している熱気と意気込みはこの部屋、いやこの建物中の誰よりも強そうだ。

同じ様にその隣に立って、千葉東金道路を担当する二班に、三班の半数を加えた三十二名と向かい合っているのが、関という男だ。六十を越している彼は、とても戦えるようには見えないが、通信班を仕切る彼の問題ではない。隣の人間とは異なり、年相応の穏やかな雰囲気を感じている。

そして彼とは反対側の、宮口の隣に立っているのが掠だ。何故彼だけ呼び捨てなのかというと、まだ彼が十代後半ほどの年齢であり、高梨よりいくつも年下であるためだった。肩には届かないほどの黒

髪に、真っ黒な瞳をしている。その眼に隣の二人とは異なつた静けさを保ち、少しそれを伏せたままにいる。

責任者である宮口が何故か立っている、この場の全員が起立した状態が続いていた。数脚の机を残し、全ての椅子が壁際に下げられているというのは偶然か、はたまただれかの思惑なのか。

「これは本部に対するあからさまな挑発だが、それに乗せられて自己を見失わず冷静に対処しなければならぬ。各IC等を基準にして人員を配置するが、一人でも取り逃がせば二次災害になりかねない、必ず全員捕らえるように」

何か個人的な恨みでもあるのかといった剣幕で、要約すると十五分で終わる内容を二倍に引き伸ばして宮口の話は終わった。多少、酸欠乏な様子だ。

すぐに通信班と活動班に分かれて、それぞれ一つずつの机に集まった。犯罪対策部は三班に分かれており、今回はほぼ全員を半数に分けてそれぞれの道路に配置し、もしものために、それぞれの高速道路の先に東京支部の人間が置かれるらしい。

机の上に、棕は大きめの地図を広げた。ところどころに附箋が貼られており、名前が書かれている。

「一定の距離を置いて、各二名ずつ配置している」と彼は説明を始めた。一人一人名前を呼んで、各々が担当することになっている場所を示す。

「OCは単独で担当することになっている」

数人目でそう付け足し、やがて四万を呼んで指示を出した。

「そんな距離を一人で見んのかよ。見逃すかもしれねえのに」
そうばやいた四万に、

「わざわざ予告してきたんだし、今までの傾向と場所から考えても、挑発の為には最初にこつちを狙ってくる。取り逃す事はあっても見逃す事はない」

棕は淡々と返すと、言葉に詰まった四万から視線を外し、次の名前を呼んで説明を続ける。

「片岡愁」

やっと名前を呼ばれて、愁は地図から顔を上げた。示されたのは、山間部の一部。

「お前も単独だ」

冷たく静かな眼で、彼は愁を見据えて言い放つ。

「またお前のせいで、仲間を失うわけにはいかないからな」

何も言い返せずに愁は視線を逸らし、椋は再び作業を再開する。だが、その空気はすぐに破られることになった。

「おい待てよ、そんな言い方ねえだろ」

驚いて愁が見上げる前に、四万は椋の方へ一歩近づいて彼を見下ろす。少しだけ四万の方が背が高いからだ。

「こいつに謝れ、今すぐだ」

「俺は本当のことを言っただけだ」

衝動的にその胸倉を掴んだ四万を、椋は少し眉を寄せただけで見上げた。その眼は深く波の無い水面のようで、何の焦燥も動揺も無い。

「違う。愁は被害者だ」

「本当にそう言い切れるのか」

一瞬返事に詰まってしまった自分に後悔し苛立ちながらも、四万はなるべく声を押し殺す。

「だれも……だれも望んで、あんなこと」

「望んでやったのなら、俺はこいつを殺していた」

思わず息を呑んだ彼に、何事もなかったかのように椋は続ける。

「どつちにしても、死んだ人間は戻ってこない。だから、俺は許すことは出来ない」

「四万さん、すいません、止めてください。一人がいいって言ったのは僕なんです」

取りすぎる様な声が聞こえ、

「おい、もういいだろ」

という同僚の言葉と共に四万は腕を掴まれ、力の抜けていた手を離した。

言われるままに元の位置へ下がりがりながら前に顔を向けると、それまで微動だにしなかった椋のその眼は苦しそうに伏せられていた。が、それも瞬きをする間には再び前を見つめており、毅然とした静けさだけがそこにあった。

5 - 2 群青の夜空まで

休憩室といえなくもない休憩室。若干広い廊下の右側の壁はガラスになっていて、外の景色がよく見える。その側に数脚のテーブルと椅子が置かれ、反対側の壁に自販機が設置されているだけの、名前ばかりの休憩室だ。

テーブルの上に紙を広げたまま、愁は側頭部をそこに打ちつけた。ごん、という鈍い音が響く。頭を起こしもせずに、横を向いたまま、でぼんやりと窓の外を眺める。

四階の高さまで上ってきた数羽の鳥が数メートル先で、互いにもつれながらじゃれあうように飛んでいる。鳴き声なんかは聞こえないが、楽しそうだ。大分近づいてきた春を思わせた後、やがて彼らは連なり、向こうのビルの方へ流れるように羽ばたいていった。

残された冬の最後の日差しが窓ガラスを通して、廊下の床の一部を照らしている。それに背中を温められ、思い出すようにやってきた眠気に任せ、愁は目を閉じた。

「鉛筆折れてるよ」

ふいにそんな声がして頭を上げた。右手で握っている鉛筆を見ると、それは見事に手の中で三等分されていた。集中していたり無意識のうち力を入れていたりすると、こんなになってしまう。三本折ったところでボールペンなんかは、なかなか使わせてもらえなくなつた。

「左利きじゃなかったっけ」

「元は右利きですよ。左にしようとしてるだけで」

「そうなんだ」

そう言つて彼女、温海瑞穂あつみみずほは笑つた。年齢は二十代中頃で、優しい空気をまとうている。実際その笑顔は柔らかく朗らかで、人を安堵させる効果を持っている。

そんな彼女は、この休憩室のカウンセラー的存在だ。といつても、

研究部に在籍している彼女がそんな資格を持っているわけではなく、ただ、ここに来る人の話や愚痴を聞く相手をするだけである。しかし人というのは、自分の意見や思いを受け止めてくれる人がいるというだけで大きな安心感を得る。ただ和やかな雰囲気では話をして、疲れている人々の拠り所となっている彼女は、長谷川明日香とは違ったタイプの有名人だった。

「これ、何？」

愁が頭の下に敷いていた紙を目にして、彼女は近くの椅子に座った。真ん中分けにしている肩までの黒髪を耳にかけて、小さな文字を覗き込む。

「五日後に高速道路で作戦がありますよね」

「うん」

「そこで、向こうが使ってくるかもしれない能力です」

今までの情報部の調査から、「フリークス」に加わっているOCが持っている予測される能力を収集し、その中から今度対峙することになるかもしれないと判断された能力のリストだ。あくまでも予測だから絶対ではないが、自分の相手になる者のことは一つでも知っておいたほうが断然有利である。その能力への対処法をあらかじめ決めていけば、本番でもしその相手に当たった場合に少しでも優位に立てる。判断が遅ければこちらが死んでしまうのだから、一つでも知っておいたほうがいい。

「どれが来ると思う」

瑞穂にそう聞かれ、小さくうなづいて少し考えた後、折れて短くなった鉛筆でその中の一つを示した。

「僕のところは木が多いから、これかもしれないって思ったんですけど」

「これ、かなり危ないね」

命のあるものに直に触れ、その体温を急激に上昇させる。それは動物だけでなく植物にも有効らしい。木が密集しているところで使われ、発火したりすれば大事になる。

「どうですかね」

しかしいくら考えたって答えが出るわけではない。

「うーん、どうだろう」

困った顔をした彼女は、急に思いついた風に続けた。

「掠くに聞いたら分かるかもしれないよ。すごい頭いいから」

愁は「いきなり何を」という表情で、

「そうですね」

と呟いた。

「あの人は、僕とは違うから」

そして窓と逆の瑞穂の方を向いたまま、再び側頭部をテーブルに打ち付けた。

「大丈夫？結構痛そうな音したけど」

「大丈夫です。基本的に丈夫だから」

「でも、この前風邪で休んでたよね」

「よく覚えてますね」

先月の事だ。しかも違う部署なのに。

「偶然二班に用事があったし。愁くんが来ないの珍しかったから」

瑞穂はそう笑顔で言う。

「それに基本つてことは、応用的には丈夫じゃないってことでしょ」

「……応用的にも丈夫だと思うんだけどなあ」

「いいえ、そんなことはありません」

笑顔のまま彼女はつきり否定した。

「だから、無理し過ぎたら身体は壊れちゃうんだよ。心だつて。や

つぱり無理だつたつていう頃には、もう遅すぎたりするんだから」

「じゃあ、無理しないといけないときは、どうしたらいいんですか」

「無理しなくても、ときには逃げたつていいんだよ」

「それなら逃げつぱなしになるかもしれない」

「それもいいよ」

楽しそうに言うのと、愁の背中を軽く叩き、

「もう行かなきゃ」

と言つて瑞穂は席を立つた。

顔を上げてそれを見送ると、再び窓の外に眼を向けた。青い空は遠くまで続き、はるか向こうにある雲の切れ間から差し込む太陽の光が、カーテンのように街を柔らかく覆っていた。

5 - 3 群青の夜空まで

群青色の晴れた夜空に、高く月が上っている。その周りに幾つもの星が点在して、それぞれの光を放っており、地上に淡い光を投げかけている。いくら春が近づいたといっても、夜になって昼間の熱が完全に消え去ると、冬を思わせる冷たい空気が満ちてくる。

高速道路の側面を覆う高い防音壁。その前に立って、瞳に広い夜空を映した。程なくして、棕は冷たい防音壁に背中を押し当て、ゆっくりとその瞳を閉じた。

身体から容赦なく体温を奪う、冷たい雨。その中へ遠ざかっていく影は、やがて見えなくなつた。ほんの微かな希望と、それを多い尽くす諦め。涙は出なかつた。ただ、そこに立ちつくした。逃げる事はできないし、その術も知らないから、ただただそこに立ち続ける。いつそ、この存在自体も雨に流して消してほしいと、からつぱの心で思った。そのほうが、どんなに楽かもしれない。何一つ出来ない、こんなくだらない自分は消えてしまった方がいいのだろうか。だから今、こんなことになっているのだろうか。

ただ、その時そうすることを選ばなかつたのは、背中にあの温もりがあつたから。だから、そうなるわけにはいかなかつた。あの暖かさや重みは、確かにあの時……。

眼を開けて、棕は無線機からの雑音に答える。冷え切つた背中を壁から離れた。

冷たい風が彼の髪を揺らし、遠くへと駆けていった。

封鎖はしていないが厳重注意が促されている高速道路を、平日のこんな時間に疾走する車はこの一時間で数台しか見られない。あと十五分程で午前零時だという真夜中だ。先までのびてカーブして見えなくなっている道路の上に、両側の森をつないでいる陸橋が架かっている。アスファルトに黒く大きな影を横切らせている。

空に上る月と星の灯りで、割と道は明るい。流石に足元は見えにくく、昼間と同じ様に動けるかといったらなかなか難しいだろうが、それはきつと向こうも同じだろう。

『おい、寝てないか』

残り十分を切ったとき、無線機から二班の班員の声が聞こえた。

「寒くて寝られません」

『それはよかった』

道路と木々の茂る森を隔てている壁に背をあて、その冷たさに思わず背筋を伸ばした。

『時間どおりに来るだろうからな、気をつけるよ』

「え、ああ、はい」

『……本当に大丈夫か』

「大丈夫ですよ」

疑念のこもった声に、笑って愁は答える。通信の途切れたそれをべルトにつけ直し、静まりかえった空気に耳を澄ます。ここを下ったところには街があるが、その喧騒も聞こえてこない。

少しの空気の流れも読み取ろうと神経を細く細く研ぎ澄まし、それが背後に違和感を捉えたと同時に前へ跳んだ。

背にしていた壁を飛び越えて現れたのか、自分がいた場所についての間にか見知らぬ男が立っていた。ここまで近づかれるまでその気配に気付かなかったとは。その無感情な眼を捉ながら愁は振り向き、再び地面を蹴る。同じ様に向かつてきた男の拳が左耳をかすめ、その代わりに足払いをかけるが避けられた。再び壁の前に戻ってきた愁は、予想以上に近くで振り向いた男が自分の側頭部を狙う左手を右手で受け止め、首を掴もうとする反対の手を左手で上にはじいた。意外と簡単にそれは軌道をそれ、頭上の壁にぶち当たる。

パラパラとコンクリートの破片が降ってきたのに気付き、どんだけ骨が丈夫なんだと思わず呆れたその一瞬、空いていた胸を蹴り飛ばされ、肺から空気を押し出ししながら、愁はもろくなったコンクリートを背中突き破った。勢いあまって地面を一度転がり、すぐさ

ま身を起こしながら思い出す。

物質の分子結合を弱める能力があるらしい。この世に存在する全てのものは、原子や分子が繋がってできており、その能力を使うと分子同士の繋がりを弱め、触れた対象の強度を落としてもろくすることができると。

崩れた壁をくぐり抜けた男は、冷えた目でこちらを一瞥すると、道路に平行になるよう地面を蹴って斜面を駆け出した。愁も急いでそれを追う。斜面を下って市街地に行かなくてもしたら厄介だが、今のところその気はないらしい。だが、目的不明な彼らの事だから、いつそんな行動に出るのか皆目検討がつかない。とにかく、一秒でも早く捕らえなければ。

しかし、右手に連なる壁のせいで光は大分遮られ、おまけにそこかしこに木々が生い茂っている。距離はなかなか縮まらないし、見え隠れするその影は少しでも気を抜けば見失ってしまいそうだ。

思いついて、愁は地面を蹴り、壁の上へ手をつけてそこへ飛び上がった。そのままペースを落とさずに走り続ける。光を遮るものは何もないし、走ることへの障害物もない。幅は手のひらほどしか無いが、上手くバランスさえとっていれば、山道よりもよっぽど走りやすい。

ほぼ平行の位置までつき、

「止まれ！」

と声を上げる。しかし一度視線を向けただけで、止まる気配は全くない。

しょうがない。と、愁はコートの中から刃を一本だけ抜いて、左手に握り締める。狙いを定めようとしたとき、男が急にペースを上げた。

構わずに照準を変更して、愁は刃を左手で投げつけた。前に飛び込むように地を蹴ってそれを避けた彼が、片手を横の壁に当てると、下から上へと、稲妻のような亀裂が走る。

前方の壁が崩れ、咄嗟に愁はそれを飛び越えた。着地し、殺しき

れなかつた勢いで僅かに横へ滑る。息をついて、前方、壁の上を駆ける背中を見つけて再び走り出す。

斜面と道路の高低差が大きくなり、だんだんと壁は高くなっていく。やがて相手の向こうに、その上を横切る陸橋が姿を現す。走るのは愁の方が速い。距離が大分縮まったとき、男は手すりを飛び越え、陸橋の上へ飛び乗った。

それを追って手すりを越え、愁は橋の真ん中辺りにいる男の方へ駆ける。何故か立ち止まり、逃げるのをやめた男を不審に思ったとき、彼はゆっくりと膝を折り、地面に手をついた。不敵に歪ませた顔が月明かりに映し出されると、その手から愁の方へ放射線状に幾つもの亀裂が走った。

その亀裂のいくつかに沿ってコンクリートが崩れ、少しの時間差の後、橋に巨大な穴が空く。

「しまった」と、頭で思ったが声には出なかつた。足場を失うことによつて生まれた浮遊感。気持ち悪い。自由落下を止めるべく伸ばした左手が何かに触れ、全力でそれを握り締める。肩が外れる前に、壁から突き出た鉄骨を右手でも握り締めた。

否が応でも、つま先の下にある瓦礫の山が視界に入った。さいわい、偶然通りかかつた車はなかつたようだ。しかし、もし手を離せば、かなり痛い目にあうだろう。十メートル、はなさそうだが、高い確率で命まで落とすことになりそうだ。

下は見ないように、と顔を上げると、夜空よりも黒い銃口がこちらを向いていた。それを同じぐらい黒々とした眼が、じつと見据えている。

咄嗟に左手を離れた途端、その手が握り締めていた鉄骨に鉛球が直撃して、金属同士のぶつかる澄んだ音がこだました。

コートの中に無数の刃を隠し持っている事は、さつき投げたときに知られてしまった。もしそんなそぶりを見せれば、間違いない胸の方に穴が空く。行き場のなくなつた左手を、全体重を支えている右腕にそつと添えた。

5 - 4 群青の夜空まで

どうやら、九ミリ弾程度ならこの手は弾いてくれるらしい。相手が引き金を引くと同時に、左手で右腕の部品をスライドさせて、中から引き出したナイフをその銃に向けて投げつけた。逆上がりの要領で、一回転してしまわないように鉄骨の上に立つと、崩れていない橋の方へ飛び退き、少し距離を置いて対峙する。

「……片手で支えられるわけだ」

男の目が、少年の焼け焦げた白い手袋を示した。金属でできた義手が、淡い月明かりを反射する。

「銃でも出てくるかもよ」

しかしそんなものは入っていないし、使い方すらよく知らない。

愁はゆっくりその手を開いて握り締めた。

男は、使い物にならなくなった銃からナイフを引き抜き、そして特に構えることもなく、足を踏み出す。瞬時に速度を増し、流れるような動きでナイフを突き出した。

相手の手を右手で握り締め、刃先を顔から逸らし、愁は左手拳を鳩尾へ滑り込ませた。男は反射的に身体の向きを変え、白い手袋をした手が、その脇腹をかすめる。自分の腕を握っている手を逆に掴み、その軽い身体ごと投げ飛ばした。

宙に浮いたまま地面に両手をついて、一度天地が逆転した。体勢を立て直して身を起こそうとしたが、強烈な蹴りがそれを許してはくれず、愁はなんとかそれを避けて男の背後へ転がり込み、立ち上がりながらその背骨を狙って蹴り返す。

男がそれを避けきれずによるけたところを、間髪いれずに右手を蹴りつける。その手からナイフが飛び出し、橋の手すりにぶつかって高い音を立てた。そのまま流れに乗って殴りつけようとしたが、その右手は僅かに動いた相手の身体の横を通り過ぎ、反対にすれ違った拳で肩口を殴り飛ばされた。堪え切れなかった自分のうめき声

を聞きながら、後ろに数歩下がって間合いを取る。

相手も同じ様に向かい合うと思っていたが、ふいに彼は身を翻して駆け出した。反応が遅れてしまったが、すぐにその後を追う。その背中では、すぐに木々の中へ吸い込まれていった。

このまま、街まで降りられてしまつたらまずい。同じ様に山の斜面を駆け下りながら、愁は刃を数本握り締めた。繁る葉の隙間からこぼれる月光で、なんとか相手の影は認識できる。突き出す枝に姿勢を低くし、地を這う根を飛び越しながら、一気に三本を投擲した。だがその直線状に障害物が存在しない状況などはなく、途中の木に遮られ、相手まで届かない。数度試したが、結果は全て同じに終わる。

地面に横たわる岩に、男がすれ違いざまに触れていった。途端にそれは小さな幾つもの塊となつて崩れ、その中に突つ込む羽目になる。しかし、スピードは落とさない。

やがて、木々の切れ目が見えてきた。まだ民家の存在するところまでは下つてはおらず、短い草の生えるだつ広い草原びはくが先にある。それを通り過ぎて下つてしまえば、ただではすまないだろう。なんとかしてここで食い止めなければならぬ。

愁が斜面を蹴つて男の上を跳び越し、その前に立ち塞がると、彼は進路を左方向へと変更した。その先には、倉庫だと思われる、大きな箱の形をしたコンクリートの塊が存在しており、巨大な黒い影を草の上に投げかけている。

そのすぐ横を、二つの影が疾走する。と、前を行く一つが立ち止まり、灰色の壁に片手を押し当てた。

ひたすら追いつくことだけに意識を向けていた愁は、立ち止まつて身構えた。彼の手から走る一本の亀裂が、すぐ右手の壁を駆け抜けていく。だがそれは、大分頑丈に作られているようで、その一撃で崩れ去りはしなかった。

安堵する間もなく、二撃目が放たれた。

先ほどと同じ軌道を辿る衝撃が、コンクリートをさらに深くえぐ

つていく。その通った後の壁が、大きな音を立てて崩れ、瓦礫の塊が草地へ突き刺さる。

第一に左側へ逃げる事を考えたが、この壁はかなり高い。とても間に合わないだろう。強く歯を噛み締めて、愁は右手で思いきり、側の亀裂を殴りつけた。

瓦礫の落下した衝撃で地面の土が舞い上がり、辺りに充満する。薄い霧のように視界を遮る砂埃に目を細め、男は壁から手を離れた。そこから先のコンクリートは、彼の視認できる範囲では残っていない。数秒前の轟音が嘘のように、周囲には静寂が満ちていた。風のない大気は、一度舞い上がった砂塵をなかなか拭い去るうとはしない。

ようやく薄まってきた砂の霧の中から、鋭い刃が空気を裂き、男に向けて飛来する。その三本の内二本が、彼の左腕と脇腹をかすめ、パツと空中に赤いまだらを作ったが、右腕を狙った最後の一本はなんとか避けることに成功した。が、次の瞬間には、砂塵から飛び出してきた少年がその身体を渾身の力で殴り倒し、草の上へ倒れたその背中に自身の片膝を押し付け、両手を後ろへねじ上げた。

張り詰めた空気の中で、双方の荒い呼吸がまだ収まり切らない頃、男がぐくもった声で尋ねた。

「何故……」

愁は背後をちらりと見やる。長いコンクリートの壁は、その途中までが完全に崩れてしまっているが、そこから先には一本のひびが入っているだけで、なんとか大地に立っている。視線を下方へ戻し、落ち着いた声で答えた。

「その能力だと、金属を破壊する事はできない」

「知っていたのか」

「いや」

真っ直ぐにその言葉を否定する。そこまで詳しく彼の能力は知らなかった。

「さっき橋を壊したとき、鉄骨だけは崩れずに残っていた」

「ああ。……だが、それ以外は落ちていったらどう？」

「力を放射状に張りめぐらせれば、何本かは鉄骨を避けていく。後は、もろくなつたコンクリートが自重で落下したただけだ」

分子結合の弱まった基盤が、自らの重さに耐え切れず、無傷な金属だけを残して崩れ去つた。彼の力が放射状に伸びていたせいで、何本かは鉄の部分を利用して破壊作業を行っていたのだ。しかし、その力がたつた一方向に働いているだけなら、それさえ遮ればその先が壊される事はない。咄嗟に、金属で出来ている自分の腕で、力の直線を妨害した。それだけのことだ。

「捨て身だつたんだな」

そう、全てはただの推測に過ぎなかつた。しかし、これしか思いつかなかつたのだから仕方がない。

どこか可笑しさを滲ませながら呟く男に、今度は愁が問いかける。

「答える。お前達の目的はなんだ」

「……目的、か」

少し間を空けた後、ようやく彼は口を開く。

「あるといえばあるし、無いといえば無い」

「そんな事を聞いているんじゃない」

わけのわからない言葉に、愁は冷たい声と共に手首をねじ上げる手に力を込めた。その痛みからか、男は少し顔をしかめる。

が、愁の方へ向けた虚ろな瞳には、まだ言葉を重ねる余裕の影が映る。

「意味の無いことなんて、たくさんあるだろう……」

そして「意味無く人を殺しているのか」と聞き返されるより早く、彼は瞼を閉じ始めた。

自ら意識を手放した男を見下ろし、愁はため息をつきながら立ち上がる。器用な人間は、自分の意思で気絶できると聞いた事があるが、彼もその類なのだろうか。

一応、一般人に被害を及ばさないという最低限のことは完遂したが、どうしようもない虚無感だけが残つた。それは何故かと考える

前に、無線機を手に握る。

頬に何かに触れるのを感じ、空を見上げた。いつの間にか月や星は雲に覆われ、小粒の雨が草地に注がれだしていた。

頭に、暖かいものが触れているのに気が付いた。見上げると、その人は右手を乗せたまま、いつものように笑った。つられて、幼い自分も笑顔を返す。何も言われなくても、その彼の暖かさが触れていてくれるだけで、安心できた。どんなに辛いことがあっても、大丈夫なんだと思えた。

いつの間にか、その温もりが消えてしまっていて、自分の周囲を見渡した。

少し離れたところに、その人は倒れていた。身体中の傷口から血を流し、自分自身の血の中に浸って、死んでいた。

その近くにも、同じ様に血を流して死んでいる人がいる。その側にも、そのまた側にも。大切な人達が、たくさん、赤い血の中で、死んでいる。息をしているのは、自分ひとり。生きているのも、自分ひとり。

「お前のせいだ」

そう言う声があった。

「ずっと近くにいたくせに」

どこかで聞いたことのあるような、いろんな人の声で。そんな言葉が、幾度も幾度も、繰り返して響く。

いくつもの言葉が、こだまする。心を、鋭く突き刺すように。あるいは、深く深く染み込むように、響いている。

堪えきれず、小さな両手で耳を塞いだ。許されないと知りながら、やっではいけないと知りながら、耳を塞いだ。

ゆっくり、目を閉じた。

何も聞こえなくなつた事に気が付き、目を開ける。耳から手を離し、ようやく、自分の少し前にある後姿つしよすかたに気付いた。何度も見たことのある、後姿。その彼女の手に触れようとして、足を踏み出す。一歩、また一歩。

しかし、なかなかその背には近づかない。ようやく、あと少しと
いうところまで距離が縮まったとき、その手を掴もうと右手を上げ
た。

耳元で、音がする。小さな小さな、虫の羽音。

自分の右手は、うまく持ち上がってくれなかった。使い物になら
なくなったその手は、誰にも触れられずに、垂れ下がっていく。上
がらなくなっていく。

ふと、何かにつまづいて、身体が前のめりに倒れた。

起き上がろうとしたが、右手は上手く身体を支えてはくれず、な
んとか左手を地に着いて身を起こす。足を見下ろすと、右膝から先
はなくなっていた。切れ目から滴った赤い血で、膝先の地面にでき
た、小さな血溜まり。身体が大きく傾きながらも、それから視線を
外し、なんとか顔を上げた。

背中を真つ赤に濡らした彼女も、倒れていった。

愁は飛び起きた。半身を起こして自分の手足を視界に入れ、再び
身体を横たえる。

動悸が激しく、苦しい。必死で酸素を取り入れるが、浅い呼吸の
せいで、それらはすぐに出て行ってしまふ。

突然の事に驚いたクロが、横を向いたその背に向かって鳴く。し
かし今の愁には、それに反応する余裕もない。自分の方へ寝返りを
打ったのを慌ててクロは避け、愁の身体は、そのまま床に転げ落ち
た。

苦しい。なんとか落ち着けようと、腹を押さえて床にうづくまる
が、なかなか動悸は治まってくれない。

激しく収縮と膨張を繰り返す心臓の音を聞き続け、しばらくして
少しだけそれが小さくなったとき、ようやく身を起こした。しかし、
あの声が、頭の中で響いている。なかなかそれは消えてくれない。

また逃げたのだ。この弱い自分は。逃げる事は許されないと知っ
ているはずなのに、あってはならないことなのに、耳を塞いだ。逃

げるために、耳を塞ぎ目を閉じた。あれは自分のしたことの結果なのだ。だから、例え夢の中であっても、直視しなければならぬに。目を逸らしてはいけないのに。弱いままの自分は、未だに背を向け続けている。

耳元で微かな羽音がした。右手でそれを捕まえようとしたが、開いた手のひらには何もいなかった。

「虫……」

開きっぱなしの窓に気付き、顔をしかめる。どうやら、昨晩は窓を開けたままで寝てしまったようだ。窓の外はいつもよりも暗く、雨が降っていた。

「クロ」

そう名前を呼ぶと、嬉しそうにクロは側へ寄ってくる。そっと、その頭を右手で撫でた。

冷たい右手は、なんの温もりも届けてはくれなかった。

6 - 2 永訣の記憶

「前捕まえたフリークス、やっぱり、全員死んだらしいよ」
一日も終わりに向かっていている夕暮れ過ぎ、高梨がそう告げた。

それは「フリークス」の実体を未だ掴めずにいる、最も大きな要因だ。こちらが身柄を拘束した者は、それから二十四時間以内に必ず死んでしまう。それが、首吊りだとか舌を噛むとかいう自殺なら止めようはあるが、その体内で心臓が停止してしまうことには、どうしようもない。彼らの中枢に、人の寿命を定める能力を持ったOCがいて、捕まったら死ぬという恐ろしい制約を強いているというのが、今のところ最も説得力のある推測だ。そんな神のような力なんて、まるで信じられないが、他に方法は考えられない。彼らは全員、自らの心臓を止める力を持っているのだという説もあるが、そんなことは考えにくいし、いざとなったときに、全員が全員、死を選ぶことができるのだろうか。彼らだって人間だ。一人ぐらい命を惜しむ奴もいるだろう。しかし、今のところそんな者は一人もいない。どちらにしても、確保してから二十四時間以内じゃ、たいした情報も得られないので、この終わりの見えないたちごっこは、今現在も続いている。

「みんな、死んだんですか」

「今朝の三時に、最後の一人が心臓麻痺を起こしたって」

「そうですか……」

高速道路の一件では、一般人の犠牲者は出さずに済んだらしい。戦闘の際に負傷した者はいたが、命に関わる傷ではないようだ。

最低限のラインは守ったのだ。それなのに、愁は俯きがちに呟いた。

「どうした、愁」

高梨が心配そうに尋ね、はっと顔を上げて無理矢理笑う。

「いえ、何でもないです」

「でも大分しんどそうだけど」

「いえ。……すいません、やっぱり、先に帰ります」

なんとか日が暮れるまで頑張ったが、何にも集中する事ができなかった。やるべきことはあるが、これ以上ここにいても、意味は殆ど無いだろう。

愁は立ち上がり、室内を見渡すと、近くを通りかかった明日香に声をかけた。

「明日香さん」

「ん、何？」

「ちよつと調子悪いんで、帰らせてもらっていいですか」

「ああ、いいよ。さっさと帰って寝ちやいな」

立ち止まり、至極あっさりと言つてのけた。愁を見下ろし、忠告する。

「歩きなんでしょ。途中で倒れるなよ」

「はい。大丈夫ですよ」

愁は笑つてそう言い、頭を下げると、背を向けた。

部屋を出て行くのを見送り、高梨は意外そうな顔をする。

「割と簡単に許可出しましたね」

「まあね。朝から様子は変だったし」

部長らしい観察力を示し、にやりと笑う。

「でも、今まで言わなかつたんじゃないですか」

「それはあんたもでしょ」

そう明日香に切り返されて、高梨は返答に詰まった。

「あの子は、聞いても、大丈夫ですしか言わないからね」

「……ですね」

「まったく」と呟き、明日香が続けようとする、「あー疲れた」という台詞を必要以上の声量で発しながら、四万が部屋に入ってきた。

「ああ、お帰り。さっき愁が帰つただけど、会わなかつたか」

「え、あいつ帰つたのか」

疲れているはずの四万が、高梨に声を上げた。

「帰ったよ。私が許可出した」

「部長が？」

驚きを隠しもしない四万が、今度は明日香の方に向き直る。意外だという思いが、ありありとその目に浮かんでいた。

「朝からしんどそうだったろ。食堂にも来なかったし」

「そうだったっけ」

とぼけた表情で、高梨に返すのを見て、それがわざとでないことを読み取った二人は、そろって呆れた顔をした。

「四万、気付かなかったのか」

「あんたってやつは、ほんと……」

再び外へ行きたくなる衝動を抑えながら、四万は乾いた笑い声を出した。

暗い夜の住宅街を、愁は一人で歩く。設置されている街灯が、その影を大きく引き伸ばし、地面に浮かび上がらせた。明かりの漏れる近くの民家から、ときおり子供の笑い声が響いてくるが、もはやそれは意識の内に入って来ない。

苦しい。息が出来ないわけではないが、胸の奥を強く握られていたような息苦しさがまとわりついている。今日一日ずっと隠し通してきたつもりだが、上手くいっていただろうか。いや、ばれていただろうな。なかなか隠し通せる苦しさじゃない。気持ちが悪い。

うつむいて足を引きずりながら、通りかかった公園へ足を踏み入れる。隅の方の、水飲み兼手洗い場に片手をつけて、頭を垂れた。

朝から何も入れていなかった胃からは、胃液しか出てこなかった。焼けつくように喉が痛み、頭ではそれを止めようとするのだが、身体が言う事を聞いてくれない。腹を押さえて、自分の中のものを全て搾り出すかのように吐き続ける。

ようやくそれが治まり、口の中に残っていたものを洗い流すと、水が詰まって咳が出た。止まらない。苦しくて、必死で空気を吸い込むが、すぐに喉で絡んで押し出されてしまう。身体を折って、幾度も咳き込む。あまりにそれが激しすぎて目から涙が零れ落ち、開きっぱなしになっていた口から垂れた唾液と共に、排水溝へ落ちていった。

今自分は、悲しんでいるのだろうか、それとも怒っているのだろうか。

生きている限り、自分のしたことを背負わなければならないのは、自業自得だと信じている。だが、それに何時までも押しつぶされる自分が、たまらなく惨めで情けない。そして、そんなあまりにも無価値な自分に気付き、堪えられなくなる。

死ねば、楽になるのかとも思った。存在自体を消してしまえば、

許されるのかとも。

だが、それは出来なかった。こんなくだらない命一つで、全てを清算しようということが、すでに間違いなのだ。許されるわけが無い。そもそも、この臆病な自分に、死を選び実行する勇氣があるのだろうか。

ならばせめて、前を向く事ができれば。この、ろくに目も耳も塞げない継ぎ接ぎだらけの身体で、前に進む事ができればと思っただし、周囲もそれを望んだ。

だが、それができないから、今ここでこうしている。苦しくて苦しくて。ちゃんとこの足で立つことができているのかも、分からない。

仕方ないと分かっているけど、醜い姿を見透かされ、否定されるのが怖くて、前も見ずに背を向ける。逃げてはいけないと、ちゃんと受け入れなければならぬと分かっているのに、鮮明に自分のしたことが映し出されると、必死で逃げる。もう傷つけるのも、傷つくるのも嫌で、不器用に目を閉じて、耳を塞ぎ、世界を遮断して、逃げる。

こんな自分が、許されるわけが無い。認めてもらえるわけが無い。

「ちくしょう……」

かすれた、弱々しい声が、喉の奥から漏れ出た。

苦しくて、悲しくて辛くて腹が立って、わけが分からなかった。

頭の中はいっぱいなのに、それでいて、何も無いかのようにからっぽで、

「ちくしょう！」

声を上げて、右手を振り上げた。水飲み場の硬い石を叩き潰す為に、それを力任せに振り下ろしかけたとき、

「にゃあ」

と、足元で小さな声がし、手を止めて虚ろな目で見下ろした。首に青いリボンを巻いた小さな黒猫が、惨めで情けない飼い主を、澄んだ緑色の瞳で見上げていた。

「クロ……」

その名を小さな声で呟き、自分がしようとしていたことに気付いて、だらりとその手を下げた。夕方に雨の止んだばかりの、ぬかるんだ地面に膝をつく。

さっきまでが嘘のように、心の中は冷え切っていた。いつものように、クロがその身を摺り寄せていることに気が付き、小さな身体を見下ろす。どうして、クロは離れようとしなないんだろう。

こんな自分に寄り添うその小さな命が、堪らなく愛しく、こんな自分が飼い主である事が、堪らなく哀しかった。

「ごめん、ごめんな」

膝に頭をこすりつけるのを、そっと右手で撫でた。

冷たい右手は、なんの温もりも届けてはくれなかった。

7 花びらの舞う先

春の夜風に巻き上げられた桜の花びらが、窓の外を軽やかに舞って、暗闇へ消えていく。幾枚も幾枚も、部屋にこもっている人間をからかうかのように、楽しげに宙を漂っている。

たとえゴミ箱をひっくり返しても、やる気という単語は欠片も出てきそうの無い気だるさに、OC犯罪対策部二班は包まれていた。部長を除く全員が珍しく集合しているが、言葉を発しようとする者は一人もおらず、奇妙な静けさが立ち込めている。このまま零時まで指示がなければ、待機命令は解かれるようになっていくが、それはつまり、何があっても零時前には帰れないと言う事。今はまだ八時半。何も無いのに越したことはないが、それでもあと三時間半はこの状態が続く。

しかし誰も、帰りたいなんて言葉は呟きもしない。言えば叶うわけでもないし、イライラを特につのらせている人間の耳にでも入れれば、暴動の引き金にもなりかねない。そして全員が最も恐れているのは、その後の制裁だ。それを防ぐ為には、出来る限り平穩にこの時を過ごすしかない。三日前からこんな状況が続いているので、疲れて喋らないというのもあるが。

椅子に逆向きに座り床の一点を見つめ続ける、生ける屍から脱出し、愁は机の一番下の引き出しを開けた。二度ほど、椅子から転げ落ちるまで寝ていたので、特に眠くは無い。

「あれ、どっか行くのか」

「ちょっと猫に餌あげてきます」

「そうか。じゃあ僕も行こうかな」

そう行つて高梨は席を立つと背を伸ばし、四万がだるそうな声を出す。

「机に猫缶入れてるやつって、珍しいよな」

「そうですか」

「てゆうかさ、お前だけだろ」

「非常食にはなりませんよ」

「ないない」

椅子に座って、天井を見上げたまま、四万は全否定しながら片手を振った。その後ろで、同じ姿勢で上を向いていた班員が、にやにやしなから口を開く。

「んなこと言ってもよ、お前ここで虫飼ってたんだろ」

「はあ？何言ってたんだ」

「この前机の上にいるん見たぞ。あれ、飼ってたんじゃないのか」

「あること無いこと言ってるんじゃないやねえよ」

四万が座り直して、後ろを振り向く。ここにいたら、 unnecessary事態に巻き込まれるといち早く察知した高梨が、

「ほら、早く出よう」

と愁の背中を押しした。

「クロー」。おい、クロ」

駐車場でしばらくくろくろくろくろ言っていると、数分後に植え込みの中から、身体中に花びらや葉をつけたクロが姿を現した。アスファルトに飛び降り、ぶるぶると身体を震わせてそれらを落とそうとしている。

「小さいな、クロって。何歳ぐらい」

「はつきりとは分からないけど、三歳ぐらいらしいですよ」

高梨が植え込みに腰を下ろし、愁はその場にしゃがみこんでクロの背についた花びらを払った。猫は綺麗好きだと聞いたが、今も、手を舐めて顔を洗っている。

「ところで、缶切り持ってきてたっけ」

「……あ」

左手に猫缶を持って、何も無い右手を閉じて開き、

「忘れた」

ぼつりと呟いた。

「いったん戻る？僕は持つてないけど、愁は引き出しに入れてたよな」

「高梨さん」

両手を合わせて、いつになく真剣な顔で見上げた。

「これからすることは、見なかったことにしてくれませんか」

「え、何が」

返答を待たず、愁は服の右袖を引き上げ、義手からナイフを取り出すと手早くそれを使って缶を開け、再びナイフを戻し、何事もなかったかのように袖を下ろした。

「はい、ここまで」

「……知らなかったな。そんなものが入ってるなんて」

「まだ誰にも言ったことないんですよ」

いつもの、気の抜けた顔で笑った。それを見て、高梨は苦笑する。

「分かったよ。でも、それは隠しておいたほうがいいな。特に上の方には」

ただでさえ、金属義肢はウケが悪いのに、こんな凶器が仕込まれているなんて知れたら面倒な事になるのは容易に想像できた。法律をおいて愁が許可をもらえたのは、その当時の彼は今よりも子供で、それ以上に実力があつたからだ。もし、もう少し年齢が上で、弱かつたら当たり前前に許可なんてもらえなかったはずだ。だから、面倒ごとの種がこれ以上問題を起こすわけにはいかない。

「愁ってさ、意外と危険な橋渡ってるよな」

「適当なだけです。実際危険な橋で落ちかけたし」

「どっで」

「いや、なんでもない」

そう言つて首を横に振つたとき、植え込みの向こうから人の談笑する声と、幾つかの足音が聞こえた。葉の隙間から、何人かが右から左へ歩いていくが見える。

「こんな時間になんかあるんですかね」

「どうだろう。花見でも行くのかな」

「夜にですか」

わざわざ桜を見に行くという考えの無い愁は、驚いた顔で瞬きをした
「夜に行つて、楽しいんですかね」

「夜桜つてね。昼と違つた綺麗さがあるから。それに、大人はなかなか昼には行けないだろ」

「ああ、そうですね」

そういえばこの時期、いつも帰りに前を通りかかる公園で、なにやら大騒ぎをしている人たちがいるが、あれは花見だったのか。今まで特に気にした事は無かつたのだが。

「でも夜になつたら、結構補導されるんですよ。警察に」

「夜桜なんて思いつかないわけだ」

「帰つてるだけなのに、声かけられるんですよ。きみ、こんな時間に何してるのかなつて」

そう言つて、不満げな顔をする。

「対策部だつて言つてもなかなか信じてくれないし。そのまま派出所まで連行されるんですけど、なんと振り切つて逃げようと思つた事か」

「余計騒ぎになるだけだもんな」

高梨には、最早縁の無い話だが、愁にとっては結構大きな問題になっている。今日の零時に外に出て、何ごともなく帰れるだろうか。

強い風が吹き、植え込みの向こうを通りかかった人たちが歓声を上げるのが聞こえた。歩道に植えられている桜の木が、惜しげもなくその花びらを宙へ放つ。

舞い込んできた花びらを捕まえようと、クロが前足を伸ばして小さく鳴いた。高梨と愁が藍色の夜空を見上げると、星の代わりに幾つもの花びらが映えていた。すぐに視界を流れていったそれらは、風の行く先を示すかのように、夜空を流れて音もなく闇に溶けていった。

真昼間、ただ人ごみを歩いていただけなのに、何故か銃口を背中に押し当てられた。

理由は全く分からない。人違いじゃないかと訊ねたが、問答無用で歩けと言う。こんな街中でまさか発砲するわけは無いだろうが、絶対無いとは言い切れないので、言われたとおりに歩く。お決まりの台詞、手をあげるは言われなかった。向こうも、そんな目立つ事はしたくないのだろう。

勘弁してくれと、愁はため息をついた。いったい何をしたらこんな目にあうのだろう。そして、意外にも落ち着いている自分に驚いた。

通路の両サイドには、様々な店が軒先を連ねており、多くの人とすれ違うが、こちらに違和感を抱いてくれる者はいない。視線だけを動かして、近くの店のショーウィンドウに映る自分の姿を発見した。その後ろに、くっつきすぎもせず、離れすぎでもない微妙な位置関係で男が歩いている。

背は特別に長身であるわけではないが、愁よりは大分高く、すれ違う同年代の男性と比べても、彼は運動することに適した背格好をしている。その歩き方から、こういうことをするのに慣れている様子も伺われた。

いやいや勘弁してくれと改めて胸中で呟く。

段々と周囲の人は減り始め、やがて、昼下がりの静かな住宅地に訪れた。平日のこの時間、人通りは意外と少なく、ようやく男が口を開いた。

「俺は、フリークスだ」

それはすでに可能性の一つとして考えていたが、こんな単刀直入にばらされるとは思っていなかった。しかし愁は、奥底で生じた動揺を隠し切って、普段と変わらない声音で話す。

「フリークスが、僕に何の用ですか」

「少し話をしただけだ。大人しくしていれば、手荒な真似はしない」

こんな状況で大人しくも何もないだろう。背骨辺りに、硬い金属の塊が感じられる。

「きみについては、単独で調べさせてもらった。すでに住所も割れている」

「信憑性は」

「確かなはずだがな、片岡愁」

「名前ぐらい、誰かが呼んだかもしれない。それに、情報部が管理してるものがそんな簡単に……」

「そっちの機関を介さなくとも、こんな情報ぐらいどこにでも流出している」

愁は初めて、最近よく聞く個人情報流出問題をうらんだ。まさかこんな事になるなんて、今まで思ってもみなかったが、

帰ってしまったえば、その話とやらを誰かに聞かれる恐れは無いが、

こんな得体の知れない人間を連れて帰る気はない。しかし、今現在彼の指示したとおり朝通った道を再び引き返す羽目になっている。

もともと、こんな時間に出歩いていたのは、お使いの途中だったからだ。無駄だと知りながらも、口を開いた。

「そろそろ戻らないと上司に殺されるんですけど」

「ここで一度死ぬのと、どっちがましだ」

二回も死ぬなんて、器用な真似はできない。大幅な遅刻に対し、部長が行う制裁を思い出しながら、状況が変わるわけでもないのにひたすら心の中で謝った。

今、状況を変えられる唯一の方法は、抵抗する事だ。愁はようやくそれを思い出す。

さつきガラスに映った時に、男の黒い手袋をした左手は、コートのポケットに突っ込まれていた。右手には銃を握っている、問題は左手に何を持っているかだ。不意を付いて上手く銃身を抑える事が

できて、もし相手が別の武器を所有していれば、まず勝てない。身体が小さい分、愁の素早さは部内でもかなり上位に位置しているが、相手の武器が分からない以上、下手に動けない。

そんな事を考えている様子なんておくびにも出さなかったが、背を銃口で小突かれた。小さな金属音が聞こえる。銃に疎い愁だが、それが撃鉄を上げた音である事ぐらひは分かった。流石に、緊張のせいで背中が冷たく感じられる。

そうこうしている内に、朝出てきたばかりのアパートまで戻ってきてしまった。何か隙が出来ないかと心もち歩みを遅くしたが、何ごともなく二階の角部屋までたどり着いてしまった。心底嫌そうな顔をしてようやく後ろを振り向くと、早くしろといった目つきで見下ろされ、そこで初めて、相手の瞳が灰色をしている事に気付く。

鍵を取り出して鍵穴に差し込み、もう一度振り向く。

「……片付けてくるんで、ちよつと待っててくれませんか」
「無理だ」

窓からでも逃げられる自信はあるが、一瞬の間もなく否定された。しょうがない、と鍵を回して引き抜きドアを開けた。

電気の消えている薄暗い部屋に足を踏み入れる。閉まりかけたドアの隙間を縫って、黒い影が入り込んできた。男は反射的に、足元に滑り込んできたその影に銃口を向ける。

「猫は殺さないでくださいよ」

幾分尖った声で愁が言い、見知らぬ人間に怯えたクロが、その側へ駆け寄っていった。首に巻いた青いリボンと、緑色の瞳が、ほの暗い中でやけに映える。猫がそのまま走っていったことといい、この部屋では土足が基本らしい。

隣の部屋にあるベッドの隅に浅く腰掛け、愁は部屋にある一脚だけの椅子を示したが、警戒を怠らない男に断られた。

そういえば、何故自分は敬語を使っているのだろうかと今更ながらに思う。そんな必要は全く無いはずだし、むしろおかしい気がする。が、昔から、年上には敬語を使えと言われ続けているので、今だけ変えるのも面倒だった。なのでこのままにしておく。

「で、何の用ですか」

横にクロが飛び乗り、壁にもたれた男を愁と一緒に見上げる。

「さつきも言ったように、単独である程度調査したのだが、君は年齢の割に優秀なようだな」

「別に普通ですよ」

謙遜したつもりはないし、普通以下かもしれないと、言うてから思った。取り返しの付かない失敗をしたことだつてある。が、男はその言葉を黙殺して続けた。

「この一連の行動は、全て俺が勝手にやっていることで、組織は関係ない。しかし、返答しだいでは、組織ぐるみの活動に変貌するだろう」

「……ということは、もし僕が断ったら、そっちの組織自体を敵にまわす事になるんですか」

「そついうことになる」

通り魔ぐらいには負けないが、日本最大級の犯罪集団を一人で相手にして、生き延びられる自信はなかった。不分明な話に愁は訝しげな顔をし、男はそれを面白そうに眺める。

「君の実力なら、十分フリークスの中でも上に並べるだろうにな」

少しの間、愁は頭の中でその言葉を反芻し、意味をはつきりと理解した。しかし、すぐには言葉が出てこなかった。

それは、断る事による恐怖なんてものじゃなく、ただ純粹な怒りが邪魔したからだった。自分は、その程度のやつだとみなされていたのか。そして、そんな馬鹿馬鹿しい事を聞くために、この男はここまでやって来たのか。

愁にしては珍しく、相手に怒鳴りたくなつたのだが、なんとかそれを押さえ込む。ここでやけを起こしても、何のプラスにもならない。むしろそれで自己を見失いでもしたら、よっぽど厄介な事になるだろう。

冷静でいると自分に命じて、押し殺した声で、

「そつち側につくぐらいなら、死んだほうがまだ」

そう答えてから、ふと、空気が停滞し続けているのに気付いた。いつの間にか膝にもたれて、呑気に眠りこけているクロをゆっくり離し、窓を開ける為に立ち上がる。

「それに、僕より強い人なんて部内にもいっぱい……」

「他に金属義肢の人間がいるか」

窓の鍵に伸ばしかけた手を止め、男の方へ首を向ける。こちらの反応を楽しんでいるような目と視線が合い、再び前を向きながら何気ない風を装って口を開く。

「なんでそんなこと」

「なら、その手袋を外してみる」

窓を開けた、自分の腕を見下ろした。構わずに、再び元の位置に腰を下ろし、上目遣いに男を見上げる。

一瞬、ハツタリかとも思った。政府が世間から直隠ひたかくしにするよう

なことだ。いくらなんでも、そんな情報までが流出しているとは思えない。一人だけそんな人間がいることぐらい知られていたかもしれないが、個人の断定までは容易に出来ないはずだ。だから、ただ鎌をかけているだけなのではないか。そう願ったが、そんな結果には終わってくれなかった。

「この前、その腕を見せた相手がいただろう。彼が教えてくれたんだ。今はもういないがな」

「どうやって」

「今の時代、無線機も大分小型化している。それを今まで幾人かに持たせて、変わったやつがいたら報告しろと言っていただけだ」

「……偶然網にかかっただけか」

「その情報から個人を特定するのは、難しい事ではなかったしな」
「それはどうも」

あいにく、部内の誰かと間違われた事は一度もない。部内だけでなく本部全体からでも、愁の、子どもの範疇から脱出しきれない外見は浮き気味だ。

運が悪かったと思うしかない。しかし、ずっと継続していたのなら、何時かはこうなっていただろう。ふと、ある男の顔を思い出した。もうこの世にはいない人間の。

「金属義肢は、禁止するにはもつたいない技術だろう」

「…… 思いません」

「人をそれ以上に強くするものだぞ」

意外だ、と言いたげな調子で男が言った。

「こんなの、ただ凶器が繋がってるただの人間だ」

「だが、嫌いではないのだろう。それならとづくに普通義肢に代えているはずだ」

愁は言葉に詰まって、口を閉じた。

自分を再び地に立たせてくれたものだが、好きではない。手足の代わりをするだけなら別に普通のものでいいのだから、やはりこれはただの凶器だ。それに、こうなった経緯いきさつなんかを考えると、余

計好きにはなれない。しかし、その理由を男に話す気にもならなかった。

返事をしない愁を、肯定したのだと受け取ったのか、男は冷たい笑みを浮かべる。

「人以上の力を持った人間は、目障りだ。管理するか排除するか。どちらか選ばせてやろう」

「それなら、僕に選択権は無い」
負けずに愁も睨み返す。

「聞くだけ無駄だ」

ここで、男が殺しにかかってくる可能性も考えたが、それは杞憂に終わった。彼は可笑しそうに声を上げて笑い出し、愁はただ黙って、それがおさまるのを待つ。

「そうか、それが今の君の返答か。なら仕方が無い」

そして、そのまま去ろうというそぶりを見せながら、忘れずに付け足す。

「このことを、他言しようなんて思わないほうがいい」
やはり言われた。予想はしていたが。

「君の義肢を、直接的に管理しているものがあるだろう。もしそいつがいなくなれば、君はいくらか大人しくはなるだろうな」

相手に気付かれずに、愁は奥歯を噛み締めた。

そして男は背を向け、最後に一度だけ振り向き、

「その意思を貫き続けるのなら、近々、君の居場所はなくなるだろう」

そんなことを告げた。

部屋に、一人と一匹以外の気配が完全に消えてなくなった頃、ようやく愁は大きく息を吐いた。緊張していた心身から力が抜ける。

完璧にやられた。おまけに人質まで宣告されて。

かかりつけの医師の事まで知っているととは思えないが、彼らの組織全体の力を使えば、それを知ることが不可能ではないかもしれない。関係の無い人間を殺す事に、爪の先ほども躊躇しない集団だ。

それはよく知っている。

心配そうに普通義肢を勧めた医師を思い出し、愁は口元に手を当てた。暑くもないのに、汗が一筋だけ頬を伝って滑り落ちる。

駄目だ。絶対、誰かに言うわけにはいかない。これ以上、自分のせいで誰かが死ぬなんてことがあったら自分自身生きていけないし、なによりも、南先生に死んでほしくない。

愁の居場所とは、いったいどここのことを示していたのだろう。最も適当なのは犯罪対策部のことだが、愁自身がよっぽど問題になるような事をしない限り、向こうから断ち切られる事もないはずだ。

とりあえず今分かるのは、これは誰にも言っではいけない話だということ。誰かを頼るわけにはいかないということ。

9 天秤と二つの背中

フリークスの男が言っていたことの意味は、すぐに分かった。

それから一週間と少しが経ち、この間に、金属義肢装着者による犯罪が各地で立て続けに続いた。その全てが、犯罪組織「フリークス」によるもののように、捕まった者は全て心臓麻痺で死んでしまっている。とはいっても、禁止されている技術による犯罪の、前代未聞の増加に、世間は揺らいだ。その犯罪の本身は多種多様で、目的などは全く不明。流石、日本最大規模の犯罪者集団というだけあって、個人的に彼らの目的等を追っていたとかいう連中が、分かった風な顔をして解説をしている様子が、テレビなどでもしょっちゅう目に付く。その内容もまた多種多様で、信憑性はまるで無い。金属義肢に使用されている物質が電波のようなものに反応して、このような行動を起こしているのだという馬鹿馬鹿しい推測をする者もいるが、それでも、何も知らない一般人はそうなんだと頷く。

兎にも角にも、いてはならないはずの者による犯罪だ。政府は、どうして今まで彼らを野放しにしていたのかという言葉が、一般人からかけられ、ようやく全国の対象者への徹底的な洗い出しが開始され、禁止法はこれまでになく強化された。

彼らは、一体何を考えているのだろうか。たった一人の人間を引き入れるために、貴重な人員を割いているのだろうか。OCで構成されているはずの彼らの中では、金属義肢装着者の立場は、比較的是の方だと思う。しかし、それでも、無いはずの技術を持った人間だ。むざむざ捨て去るだろうか。

本当は、この状況を見て楽しんでるだけなのかもしれない。それこそ、理由ともしえない理由だが、愁はあの男の笑い声を思い出し、あながちあり得ない事ではないと思った。もちろん、自分に脅しをかける意味合いもあるのだろう。その為に、すでに幾人かの犠牲者も出てしまった。このままだと、更に犠牲者は増えてしまうか

もしれない。かといって向こうについても、人殺しを強要される事に変わりはない。何があっても寝返るつもりはないが。

どうすればいいのだろう。

「おい、ちよっといいか」

突然声をかけられて、愁ははじかれたように顔を上げた。

「これ、情報部まで持ってってくれないか。今どうしても手が離せないんだ」

「分かりました。情報部ですね」

頷きながら立ち上がって、愁は封筒を受け取る。「悪い」とすまなさそうに言って、彼は忙しそうに席に戻っていった。

そして、情報部の方は年末並の騒ぎになっており、受話器を置いたばかりの男に封筒を差し出すと、彼は礼を言っ受け取った。

「まったく。敵さんも今更面倒なことしてくれるよな」

なあ、というように見下ろされて、愁は苦笑いを返す。

「でも、もう少しでひと段落着くんだ」

彼はそう続けて笑った。

それから一週間ほどかけて総力を動員して調べ上げた、現在金属義肢を使用していると思われる人数は、すでに一桁にまで減っていた。禁止法が制定されても、普通義肢に代えたと報告する義務を果していない人間の数だ。残り僅か。一気にその人間を確保する動きになった。当然、消息不明な人間ばかりだが、この機会を見逃すことは許されない。少数でも対象者による凶悪犯罪は続いているし、原因も不明なままだ。

休憩室の椅子に座り、テーブルに頬杖をついて、温海瑞穂は窓の外を眺めていた。時刻はすでに夜中の一時を回っており、ガラスには外より明るい廊下が映し出され、窓の向こうの様子はよく見えな。い。ところどころ照明の落とされた廊下の隅には、黒い影の塊が横たわり、突き当たりには非常灯が浮かび上がっている。

窓を見つめたまま、

「お疲れ」

と瑞穂は声をかけた。

「……こんばんは」

自販機の前で、廊下を通りかかった愁は立ち止まる。窓ガラスに映ったその姿から視線を外し、彼女が振り向いた。

「今日も遅いね。もう一時過ぎてるよ」

「帰れそうにはないです」

そう言いながらも眠たげに目をこするのを見て、瑞穂は微笑む。

「でも大丈夫ですよ。ちゃんと猫には餌あげてるし」

「そっか、猫飼ってるんだよね」

瑞穂は楽しそうな声を出した。

「名前何だったっけ。クロ……っていつてた気がするけど」

「そうですよ」

「ちゃんと大きくなってると？ずっと前はまだこのぐらいだったよね」
左右の手の間を指の長さほどに開ける。

それはいくらなんでも小さすぎる。と思いながら、愁は答えた。

「大分大きくなったけど、でも元が小さいから、大きい子猫ぐらい」

「そうなんだ。ねえ、やっぱり動物にも性格ってある？」

「あります」

特に考えず即答した。猫や犬が、全て同じ性格をしているとはとても思えなかったから。クロを思い出しながら答える。

「クロは……すぐ臆病だけど、かわいいですよ」

「それ飼い主が言うか」

可笑しそうに瑞穂が笑い、つられて愁も笑った。

「よかった」

「よかったって、僕は捨てたりなんかしませんよ、絶対」

「違う違う、ちゃんと成長しててよかったってこと」

ほんの数分後には、愁は再び廊下の突き当たりの方へ歩き出した。その子供のような笑顔と振られる白い手袋をした手に、手を振り返して、その背中が廊下を曲がって見えなくなると、瑞穂はだれもい

ない自販機の前を眺めた。そこに先ほどの愁の姿と、これはもう何年前前のことだが、同じ位置に立っていた掠の姿を見る。ただ、さっきの愁のように笑うことなく、同じ様に廊下の向こうへ消えていったその背中。

兄弟でも、こんなに違うものなのか。

そう思い瑞穂は一人、苦笑した。

10 - 1 窮猫やはり犬に怯え、黒鉛は折れる

時刻は、もうすぐ日付が変わってしまふというような真夜中なのに、その茶色と白の毛皮をしたコーギー犬は、千切れんばかりに尻尾を振って喜んでくれた。

「よしよし。シロ」

「勝手に名前付けんなつて。イブだよ」

しゃがんだ膝に、短い前足を乗せてくる犬を撫でながら、愁は祐輔を見上げた。

「イブなんてよく考えたね」

「俺じゃなくて姉ちゃんがつけたんだよ。なに考えてんだか」

電気の消えた家の玄関前で、二人は声を潜める。無論、家人を起さないためだ。

鼻をひくつかせてイブは愛想よく寄っていくだけなのに、怯えたクロはたじたと後ずさつてしまう。

「クロが喰われる」

「喰わねえって」

祐輔が、先に立ってこつちこつちと手招きした。敷地を囲む塀に沿い、足音を忍ばせて玄関口と別の面にある窓までまわつてくると、そこから部屋の中に入り、再び祐輔は合図をした。今まで何度かしたことがあるので、要領は分かっている。靴を芝生の上に落として、愁は窓枠に手をかけて、唯一電気のついているその部屋へ上がった。水野家では、長男である祐輔以外の人間は立派に早寝早起きをこなしているらしい。一人だけ、その遺伝を受け付けなかった夜型人間は、十時になると、もう寝ようかという雰囲気立ち込める家中で、他の家族からの苦情を避けるため、なかなか息を潜めるようにしなければならぬようだ。

「悪い、俺まだ宿題終わってないからさ。そこらへんでも適当に読んでてくれや」

机に向かつて言う祐輔に、愁は床に座ったまま適当な返事をした。いつか見たような鞆が近くで横倒しになっており、教科書やノートらしきものが氾濫している。それをちゃんと立て直すと、手元にク口が寄ってきた。鞆の下敷きになっていた漫画に鼻を近づけて口に入れようとするので、その身体を抱えて自分の横に座らせると、特に執着は無かつたらしく、ク口はそこで大人しく後足で耳の後ろを搔いている。

見たことのあるような無いような表紙のそれをパラパラとめくり、愁は、はたと手を止めた。まじまじとそれを眺め、口を開く。

「ねえ祐輔」

「なんだよ」

「これ、似てない？」

両手で掲げて、振り向いた祐輔にそれを見せた。水道の修理だと偽って盗聴器を仕掛けに来た悪役の中年男性が載っているコマだ。

「あれ、小学校のとき理科の先生だった……名前がでない」

「だろ、似てるよな。何かあだ名あったろ、あだ名」

「常にあだ名だったよな、あの先生」

「俺、本名聞いたことねえもん」

「確か横文字だった気がする……。り、リリー……。だったっけ」

「あ、そうかりりーか」

そうかそうかと、祐輔は何度も頷く。

「だけどさ、何でそんな名前だったか覚えてるか」

「理科だから」

「そんなだった。誰かがさ、『あいつなんか青酸カリで死んじまえ』つつたからだと思ってた。カリのりで」

「そんなひどいこと言ってたっけ」

「子供は残酷だからな。よく叩かれてたし。教科書で」

「あれは痛かった」

薄っぺらい教科書でも角は信じられないほど痛い。あの頃、身をもつて知った。

「そういえば最近思い出したんだけどさ、あいつどこ行ったんだよ」
急に、思い出したように祐輔が問いかけた。

「あいつってリリーのこと」

「ちがうちがう。坂口龍二とかいうやついただろ」

「ああ、サカタツのこと」

「そう呼ばれてた、俺はよく知らないけど。そいつさ、どっか中学
受けてたのか」

「さあ、どうだろ」

「なんだよそれ」

祐輔は期待はずれのような顔をし、愁は横にいるクロの尻尾を片手
でいじる。

「だってお前ら仲良かったじゃんか」

「だったけどさ、僕は知らない」

「会ってないんか」

ここ数年間を通して、どこかで会ったかどうかをしばらく思い出す。

「だいぶ前に一回だけ」

「そんだけかよ」

「その時も『お前とはやっぱ世界が違ってたよ』とか言っていてさ、
なんだよそれって言ったのにどっかいつちやって、それからずっと
見てない」

いい加減飽きたのか、クロが痛くも無い猫パンチを仕掛けだした。

そっかど顔き、すぐには返す言葉を見つけられなかった祐輔は、

「そういつやつもいるさ」

とだけ返して背を向けた。

10-2 窮猫やはり犬に怯え、黒鉛は折れる

シャーペンの芯が折れて、どこかに飛んでいった。中に残っている芯は既に大分短くなっていて、いくらノックしても出てきてくれない。しかたなく、最後の一本を芯入れから取り出して補充しようとしたが、不覚にも手の中で折れてしまった。と同時に、祐輔の中にある目に見えない何かも折れた。

「あーもう、うるっせえ！」

勢いよく立ち上がった彼は、ぱつと振り返る。

「いい加減にしるよ、それすっげー耳障りなんだよ！」

「教科書なのに」

「だからよけー耳につくんだよ！」

声を荒げて愁が手にしている本を指差した。

背表紙に、世界の子供達の写真が載っている英語の教科書。今開かれていますページは、とある犬の生涯を綴った感動すべき物語。しかし、それをとるところありえない発音で、しかも聞き取れるかどうかという微妙な声量で背後から朗読されれば、祐輔でなくとも何か折れていただろう。

「そんなこと言うなよ。サンディーが不治の病に倒れたところなのに」

「そういうことじゃねえよ」

「あれ、シツクって病気って意味じゃなかったっけ」

「そうだよ病気だよ。……だからサンディーは関係ねえ！」

投げつけられた消しゴムを避け、愁は立ち上がった。

「アレも寝ずに看病してるって」

「飼い主も関係ねえ、お前に言っただよ！」

無数に飛ばされる消しゴム等を、ドアの方へ下がりながら器用に避ける。

「頼む、一発でいいから当たってくれ。俺の気が済まない」

「嫌だ。痛そうだし」

「しょうがねえな」祐輔が振りかぶった途端、唐突にドアが開き、驚きのあまり、彼はバランスを崩して後ろ向きに床へ倒れこんだ。
「何してんの」

「ね、姉ちゃんこそ、何だよいきなり」

「えー、私？……あ、そうだ」

寝ぼけ眼をこすりながら、彼女は不思議そうに尋ねる。

「あんたさ、お経のCDでも持ってんの」

「は？」

立ち上がる事も忘れ、祐輔は間抜けた声を出した。思った事をそのまま口に出す。

「そんなもん持ってねえよ」

「ほんと？」

「ほんとだって」

「でもさ、こつからなんかお経みたいにぶつぶつ言うのが聞こえてたけど。さんでいって漢字でどう書くのよ」

「……気のせいだって。姉ちゃんにしか聞こえなかったんじゃないの」

とことんとぼけることにした。しばらく目をしばたたかせた後、彼女は露骨に顔をしかめる。

「ちょっと、怖いこと言わないでよ。明日朝早いのに、これで寝れなくなったら祐輔のせいだからね」

こういうことに弱い彼女は、そう言い捨ててさっさとドアを閉めて出て行った。遠ざかる足音が聞こえる。

と、足音がいきなりリターンし、再びドアが開いた。

「寝る前に、イブの水があるか見といてよ」

「分かった」

机に手をかけ、立ち上がりかけた姿勢で硬直したまま答えた。

「じゃあそういうことで」

今度こそ、遠ざかった足音は聞こえなくなり、それから一分はたっ

た頃、どちらからともなく大きいため息をついた。

「あーびっくりした」

ドアの蝶番と壁に挟まれた空間で、愁が呟く。開いたドア一枚隔てた場所にいる人間に気付かれないようにする為、ほぼ息まで止めていた。

「なんだよあの不意打ち」

そう言いながらやっと立ち上がった祐輔の足元に、本棚の陰に潜んでいたクロがまとわりつき、大きくあくびをした。時刻は、あと少しで一時になる。

「そういえば、明日は昼からバイトがあるって言ってたな」

「僕と逆だ」

「え、明日午前だけなのか」

「なんか午後は帰っていいって言われた」

椅子に座り、祐輔はにやつと笑って言う。

「なんだよ、もう来なくていいってことじゃねえの」

「だったりして」

そう返して、愁も口の端を吊り上げた。

「辞めたらさ、俺んこの学校来いよ。お前来たらいじめてやるよ」

「祐輔そんなことしてんのか」

「俺はしない。敢えてお前に言ってるの」

「なんでだよ」

悪意のないやりとりに、二人とも笑った。ふと時計に目をやった愁が軽く目を見張り、それを見た祐輔が声を上げる。

「もう一時なんだよ。お前いつまでいるつもりだよ」

「どつりで眠いと思った」

「眠いんなら帰れ」

「来いって言ったの祐輔じゃんか」

「言ったけどさ、帰れよー。ほら、帰れ」

理不尽なようだが、帰るタイミングを計っていた愁には丁度良かった。まだ水曜だということを考えれば、もう両者共に限界だ。外に

出て靴を履いた愁の頭に、

「ほれ、忘れもん」

と、祐輔がク口を乗せた。ク口は乗ったまま、ふらふらと尻尾を振っている。

「またな」

祐輔が手を振ると、闇に溶けかけていた愁が笑顔のまま手を振った。その上で、ク口も尻尾をゆっくりと振り続けている。

玄関前まで戻ってくると、元気なイブがぶんぶん尻尾を振りながら迎えてくれた。その頭をなで、軽く手を振って愁は夜の道を歩いていった。

11 犠牲の上

「じゃあそろそろ帰りますね」

「ああ、気をつけてな」

明日香の席の前に立って言うと、

「愁、帰んのかよ」

後ろからやってきた男が、そう言いながら愁の頭に腕を置いた。

「なに、あんたも帰りたいの」

明日香が彼に尋ねる。

「いや別にそういうわけじゃないですけど」

「やること終わってれば、帰ってもいいけど」

「そうは言っても終わりが無いやないですか」

「終わりは無いね」

断言したがすぐに続け、

「終わりは無いけど、今日やる分には終わりがあ

るでしょ？という目で彼を見た。少し考えたが、

「それはそうですね……」

言い返す言葉が見つからず、なあ、と同意を求める目で彼は愁を見下ろした。しかし、そんな目で見られてもどうする事もできないので、曖昧に笑って見上げた。

「まずあんたは、やるべきことしなさい」

椅子から立ち上がってポールペンの柄で、こんこんとその頭を軽くたたきながら言った。ばつの悪そうな顔で彼が返事をしたとき、

「東北地方の対象者の再確認、とれました」

後ろからやってきた高梨が、明日香にファイルを手渡す。

「ん、ご苦労さん」

「お前タイムリング悪いなあ」

「え、何が」

何も知らない高梨が怪訝な顔をし、なんでもないと彼は手を横に振

った。頭頂部にひじを押し付けられる形になった愁は、地味な痛み
に複雑な顔をする。

「さて。愁、あんたはもう帰んな」

明日香が切り返し、やっと腕を下ろされて、周囲を見渡した。「あ
あ」と、その意図を先回りして高梨が口を開く。

「四万なら外に出たよ」

「また行ったんですか」

「あいつまだ行ってんのか」

愁と男が同時に声を上げた。確か、四万は午前中も外に出ていたは
ずだ。

「外回り大好きな奴だからね。だいたいそういうのは四万にまわし
てんのよ」

変わった奴だからと、明日香が説明した。まあ彼なら納得できる話
だ。

仕方ないので、愁は礼をしてその場から離れた。何故かなかなか
進まない足を無理矢理引きずって出て行く。背後でドアの閉まる音
が聞こえた。

長方形の枠を作り、全ての席が向かい合うように鎮座している会
議室には、明日香を含め十数名ほどが席についていた。

握った拳には、うっすらと汗が滲んでいた。会議なんかでここま
で緊張するような人間でないことは、周り以上に自分がよく知って
いる。別に、自分より偉い人がたくさんいるからだとか、そんなの
も別に関係ない。

できれば、こうなる前になんとかけりをつけておきたかった。し
かし、結果的に力が足りなかったのだ。全ての対象者の戸籍まで明
らかになっているのに、身柄の確保には至らない。見つけれない
この掃討作戦が終わりを告げない事に、人々の不信感は募るばかり
だ。最後の一人が犯罪を犯し、捕まって心臓麻痺で死んで終わりま
したなんて、最低の結末にならないよう、もとからあるのか無いの

か分からない信用をマイナスにしないように、政府も必死になっている。

片岡愁を体調不良で早退させたことを聞くと、偉い人達は不満をあらわにしたが、これでよかったのだと明日香は内心ほっとした。悪いほうの結果でこの会が終わったとき、更に悪い方向へことが運ばないするための、彼女に唯一できた予防策だった。愁が、こんなところで、切り捨てないでくれと主張できる性格でないことはよく知っているから。そうはいっても安心なんて、到底出来ないが。

組織という概念には、協調性や統率性が必要とされる。が、それ以上に重視されるのが、表面的な外面だ。いまや、不信感の矛先は成果の上げられない本部に逸らされようとしている。明日香は、その卑怯さに腹が立った。しかし、更にそれを助長したのは、外面ばかりを気にする本部の姿勢だった。

政府から切り捨てられないようにするため、見た目を取り繕う行動は必要不可欠だ。嫌でも、それはよく知っている。見捨てられないようにするには、それぐらいしなければならぬ。その為には、ほんの少しの犠牲など気にはいけぬ。一人のために大勢を犠牲にするわけにはいかない。そんなことは、よく知っている。

だから、これが単なる私憤である事も明日香は自分自身で分かっていた。組織の一部として、あつてはならない考えだという事も。だけど、この間ぐらひは、折れるわけにはいかなかった。この場で一人になっても、長谷川明日香という個人として、諦められない。

もう、結果は決まったようなものだった。しかし、最後の足掻きとして、明日香は発言権を得て席を立つ。

「彼は、数値の上から見ても優秀です。実戦に不安を持つ方がおられるなら、情報班として十分にやっていける知識もあります」

世間一般から見ても同じ立場にしか見えない者に、対象者を追わせるのはおかしいのだそうだ。信用するに及ばないらしい。

「彼のぶんには何の影響も及んでいないと、言い切れるのか」
そう、ほぼ向かいにいる男が問いかけた。「フリークス」ではなく、

金属義肢装着者全体に、異常行動が起きているのではないかと。

そんな馬鹿な、と思いつながら明日香は続ける。

「私では完全に言い切れませんが、実戦に出させなければ」

「犠牲者が出てからでは遅いんだぞ。その責任が君にとれるのか」

明日香でも、口をつぐむむしかなかった。人の命に対する責任など、誰にも取れるわけがない。愁がそんな事をするわけがないと、確信はしている。が、技術者でもない彼女に、専門的な説明など出来るはずもない。

「我々がなんと言おうが、人の目には同じ穴のムジナだとしか映らないんだ。承知してくれ」

思わず明日香は声を荒げかけた。あんな奴らと一緒にしてやるなと、怒鳴ってやりたかった。しかし、彼女の立場ではそれは許されず、それに従う自分に悔しさを感じる。せめてもの抗いに食い下がった。

「このことを始めに許可したのは、我々ではないですか」

「あのときは、状況が違うんだよ。先に最後の一人を確保できれば、再び許可されるかもしれないがな」

諭すような物言いと、自分の無力さに拳を握り締める。

周囲からの疑念の意がはつきりとしてしまう前に、問題の種を切り捨てる。今の今まで仲間だといっていたものを、手の平を返し敵の側へ回すのだ。非人道的だなどと非難される事への予防策として一般市民に犠牲者が出るのを防ぐ為だという表向きの理由も出来上がっている。

だが、この場にいる全員が、本当の目的を暗黙の了解として理解している。外面を上手く保つ為に、無感情かつ機械的に一人一人を切り捨てるのだという事を。もしかしたら、この場にも明日香のように思っている人間がいるかもしれないが、何も言わないのならそんな奴、いないのも同然だ。

自身の非力さを噛み締め、このシステムに従って黙って席に着きなおし、あまりの不甲斐なさに、ただ唇を噛んで目を伏せ、胸中で

謝る事しかできなかった。今、ただプラスだと思えるのは、先に帰らせていたことだけ。もしこの場にまで残していたら、この会が終わった瞬間に捕まえられるだろうが、少しでもそれを先延ばしにすることが出来たはずだ。結果的には、同じことになってしまっただが。

「これで、依存はないな」

男が、周囲を見渡しながら言う。誰も反対する者はいなかった。

12 - 1 残された道

地上は数え切れないネオンの光やビルから漏れる明かりに照らされ、その元を車や人々が行きかっている。夜であっても、人通りは絶えそうになかった。しかし、一度夜空を見上げると、そこには誰もいない群青色の世界が広がっており、その地上と空の合間にあるビルの屋上には、穏やかな風が吹いていた。

その風の穏やかさとは正反対の明らかに焦燥している表情で、屋上の手すりにもたれて下を見下ろしながら、彼は通信端末を握り締めていた。反対を向いて手すりに背を押し付けると、やがて、耳に当たったそれから『はい』と言う声が聞こえた。

「俺だ」

小さくそう呟くと、

『……四万さん？』

不思議そうに答えた。眠たげだが、いつもと変わりのない声音に、やけにほっとする。

「ああそうだ。今どこにいる」

『どこって、家に帰ったままですけど』

「そうか。この話が終わったら、すぐにそっから出る」

『出たら、どうしたらいいんですか』

すでに予想していた事なのか、その声は唐突な四万の言葉にも、落ち着いていた。

「逃げる。とにかく」

『逃げるって、どこに』

「どこでもいい。とにかく、最後の一人が捕まるまで逃げる」

最後の対象者が捕まれば、彼らによる犯罪も終わる。そうして、再び安全性が表の人々に認識されれば、愁が犯罪者の側に回る事もなくなる。

そのことを手早く説明すると、すぐに「分かりました」と返って

きた。それを聞き、彼の中から言いよのない苦しさが込み上げ、それを吐き出すかのように呟いた。

「部長も最後まで粘ったんだが、無理だった。もうお前は帰ってくるな」

そして、思わず言葉が漏れる。

「何で、こうなっちまったんだらうな」

『仕方なかったんですよ。僕に運がなかったただけだから』

緊張感のない、むしろ明るささえ滲ませる声に、逆に励まされているような錯覚を覚えたが、それが本心からの言葉なのかは分からない。

「最後に、一つだけ教えてくれ」

少しだけ声を低くする。

「この事件の前に、お前はフリークスの奴に会っていたのか」

何の脈絡もない質問に対し、奇妙な間が空き、それに確信を抱いた彼は強い口調で再度訊ねる。期待はずれの答えであってほしいと願ったが、それすらも上手く運んではくれなかった。

「会ってたんだな」

『……はい』

先ほどとは打って変わった沈んだ声へ、思わず怒気がこもる。

「どうして今まで黙ってたんだ」

機械を握る手に、不要な力を込める。返事は返ってこない。

「それが分かってたら、まだ対処できてたかもしれないのに」

『……ごめんなさい』

電気信号に変えられて伝わった悲しさになんとか怒りを押さえ、一呼吸置いた。

「脅されてたんだろ」

『……はい』

「もう、黙っておく必要もない。全部話せ」

冷たくそう告げてからふっと力を抜き、四万はいつもの調子を取り戻す。

「まあ、これを予想したのは、俺じゃないんだけどな」

『え？』

「掠だよ」

そう言いながら四万は苦笑した。

なんとか廊下で掠を見つけ出した四万は、その場で彼を問い詰めた。問い詰めたというのも、問いかけるといには一方的過ぎたからなのだが。

フリークスの今回の一連の動きについて聞くためだった。当然、彼が確かな全貌を知っているわけが無いが、愁のたつた一人の兄弟として、彼自身が何を考えているのかが知りたかった。

掠はただ黙って、透明な水面を思わせる、落ち着いた黒い瞳で四万を見上げ、話を聞いていた。子供のような明るい光はないが、大人のような疲弊した年季も入っていない、深く透明度の高いその瞳で。

四万が話し終わると、掠は少しの間考えるそぶりを見せたが、一度ゆっくり瞼を閉じて開く頃には、再び見上げて口を開いた。

「ただ、向こうの気まぐれでやってるだけなのかもしれない」

「それはみんな言ってるんだ。そうじゃなくて、お前はどう思う」
一瞬不思議そうな顔をしたが、言葉を返すのは早かった。

「もし、これまでにあいつが一人で「フリークス」の奴らと接触していたなら、別の可能性が出てくる」

「別のってどんなだよ」

「自分達に手を貸すように声をかけられていた。もし断ったとしても、このことを喋れば他のやつを殺すとも言っておけば、口を封じるのなんか簡単だ」

「本部の人間だったら、そう簡単にやられはしないんじゃないか」

「不意打ちを掛ければ十分だし、部外の、戦ったことの無い民間人だったらすぐに殺せる」

だが、結果的に人は死んだ。知らない人間であるが、そのことに

間違いは無い。

四万は掠のこの推測が真実でない事を願いながら、尚もその話題を続ける。

「でも、そんな一人の為に、あいつらが貴重な手駒をここまで失わせる必要はないだろ」

「確かに、それだとあまりにも釣り合いが取れない」

掠は一度その目を伏せて、続けた。

「だがそれが、自分達と敵対する組織の人間だったら。その情報が得られるんなら、まだ傾くかもしれない」

「あいつは、そんな重大な情報は持つてねえよ」

「それでも向こうにとっては、価値のある情報になりえる」

こっちだって、フリークスについての情報はどんなつまらない事でも収集に専念している。それはきつと向こうにとっても同じなのだろう。

「それに本質的にはただ、この騒ぎ自体を楽しんでいるんだろうし」「だよな」

娯楽にしては激しく度が過ぎるし、だいたい、ただ楽しんでやっているなんて推測、馬鹿馬鹿しいと切り捨ててしまるのが普通の考えだ。だが、これが彼らのやることだから納得出来る。彼らは「普通の範疇に入れるには、あまりにも常軌を逸しすぎている集団なのだから」。

「……つまり、あいつらの思い通りになったんだな」

「もしかしたら。唯一、法を無視して金属義肢が許可されている人間なんて、これほど厄介で面倒で、目に付きやすい奴はいないだろう」

だから、簡単に弾き出すことの出来ない、他の人間では駄目だった。

「そうだとしても、どうしてあいつは誰にも言わねえんだ」

「そんな細かい事、俺に分かるわけがない」

「だから推測でいいんだよ。お前はどっと思っ」

掠は愁ではないのだから、その心情など分からないのは当然だろう。

しかし、誰が何と言おうと、何と否定しようとして、掠と愁は血の繋がった兄弟だ。自分がどんなに考えても、掠の意見が最もそれに近いように、四万には思えたのだ。

「だから、あらかじ予め釘を刺されているんだろう」

「それでも、対策部の力を使えば、その人質に宣言されているやつを守ることもだつて出来る。そうすれば敵をおびき寄せることだつて出来るのに」

「向こうもプロだ。そう簡単にはいかないし、失敗するかもしれない」

自身の力をも否定する掠の瞳を見下ろしたが、相も変わらず、そこには悔しさも苦々しささえも滲んでいない。

「そうなれば必要以上の死傷者が出るし、その直接的な原因が自分自身だと決定したら、これ以上あいつ自身も生きていけない。だから、頼れないんだ」

分かるわけがないと言ったが、その冷静な分析は確かなもののように思えた。少なくとも、本質的に他人である四万が考えるよりははずつと。

「……頼れない、か」

「ああ。自分がそうする事で、確実に誰かが死ぬからな」

「ここまで考えられて、どうして何もしてやらねえんだ」

急に声音を変えた、その静かな怒りを内に含んだ瞳に、掠は過去に遭遇しているような気がした。しかし、それがいつ誰のものだったかを思い返す暇は与えられなかった。

「今言つた事は、全部推測だ」

「それが当たつても外れてても、お前なら最後はこうなる事くらい分かつてたんだろ。助けようとしてやればよかつたじゃねえか」

「何で、俺が」

胸倉を掴む勢いで声を荒げる四万に、掠は眉をひそめ、彼の言葉を受け止める。

「お前は、たつた一人の兄貴だろうが」

そんな繋がりには、とつくの昔に断ち切ったつもりだった。愁もそれは分かっているはずだし、今更他人にどうこう言われる筋合いはない。だが、それは言わずに椋は僅かに目を伏せた。

「そんなもの関係ない。それに俺が何と言っても、事態は変わらないんだ」

そう言い放った椋に、四万は感情に任せて怒鳴りつけてやりたかった。しかし、確かに、椋の力でもどうしようもなかっただろうし、そうして全ての責任を彼に押し付けるのは間違いだという事ぐらいよく分かっていたので、なんとか耐えることができた。それと同時に、自分がどう訴えようが変えられない事実を思い出すと、急速に怒りは冷めていき、代わりに、不思議と虚しさだけが浮かび上がる。

「そうか」と静かに呟き、

「愁のこと、憎んでるって言ってたよな」

答えの分かりきった質問を投げかけた。

「ああ」

と当たり前のように、椋も呟く。

その時、椋の瞳に苦しさが滲んでいた事に、ついに四万が気付く事はなかった。

12-2 残された道

四万が、短く棕の推測だけを語り、代わりに、灰色の眼をしたO Cの話聞き終わるのに、そう時間はかからなかった。

「やっぱあいつの言ってたことは当たってたんだな」

極端に性格が異なり、衝突も幾度か繰り返してきた相手だが、その洞察力のよさに素直に感心した。だが、今の四万には、同じ様な言葉繋げることしか出来ない。

「いいか、絶対逃げ切れよ」

「大丈夫ですよ。逃げるのは得意だから」

予想通りの言葉が返ってきたが、愁の意に反して、少しも安心させる要素にはなってくれなかった。愁の笑い声が返ってきたが、いつもと同じはずのそれが、普段よりも大分弱々しく聞こえたのは気のせいではないだろう。

「わざわざ、ありがとうございました」

普段の口調だが、過去形である事が、異様に不安感を助長させる。

「みんなに、お礼、言っておいてくれませんか。あと、ごめんなさいって。明日香さんにも」

「分かった」

正直、そう答えるのは嫌だった。愁は、明日戻ってくることは出来ない、犯罪者の肩書きを背負わされるのだと認めたくはなかった。だが、そう答えるしかできないのだ。

四万は指先が白くなるほど強く通信端末を握り締め、反対の手で手すりを握り、行き場のない感情を押し込めた。屋上を吹き抜けていく風は強かったが、それらを吹き飛ばしてくれるほどに強くはなかった。

通信の切れたそれを左耳から離し、液晶画面を数秒間だけ見つめた。数度指を動かして、今までやったことのない操作を行う。「A

「L L DELETE」の文字を眺め、それをゆっくりと裏を向けて机に置いた。手に握ったナイフの刃先をカバーの下に差し込んで、てこの原理で柄を下へ下ろすと、案外簡単にそれは外れ、複雑な回路が姿を現す。その中から、親指の爪ほどの大きさをした平たいメモリーカードを取り出し、右手の親指と人差し指で立てたまま挟んで力を入れると、それは音も立てずに真つ二つに割れた。

データは全て消えた。もうこれは使えない。意味の無いことだと分かっているが、再び同じ位置に破片を入れなおし、カバーを乗せ、表を向けて机の上に置いた。もうこれを持っていても意味は無いし、こうしておけば最後の会話の相手が四万だとすぐにばれる事もない。どこに行くかなんて、何も考えてはいない。しかし、今まで捕まってる生きている者がいないのだから、もし自分が捕まったとき、どうなってしまうのかということへの見当もつかなかった。

それでもいいような気がしていた。四万からの通信がなければ、このままここにじっとしていようとさえ考えていたのだ。彼には悪いが、逃げて逃げていった先に、それ程の意味があるとは思えない。そこまでして生きていく価値が、自分にあるとは思えない。

だが、これで逃げる事を決めた。そうしてでも生きていてほしいと思ってくれる人がいるのだし、黙って捕まるのも馬鹿馬鹿しい。ただ、ずっと絡み付いていた罪悪感が、これでようやく消えた。

自分の知っている真実を隠し続けて、周囲の人の笑顔を見るのが、堪らなく辛かった。いつも通りに笑ってくれる度に、自分はこの人達を騙し続けているのだという事実がはつきりと形を為し、その度に心の中で謝り続けた。だがもう、嘘をつく必要もない。

電気も点いていない暗い部屋。そこに立ち尽くす足元に、小さな影が擦り寄った。その緑の瞳を見下ろし、

「行こっか」

と、愁はクロに笑いかけた。

12・2 残された道（後書き）

こんなところ、見てくれる人いるんでしょうか。
見てくれる方、ありがとうございます。

この話で内容的に前半終了です。量はまだ半分じゃないんですけど……。
ぐだぐだ感溢れる文章です。たらたらです。不必要なところはあるだけ潰したいです。
後書きなるものを見てみたかったです、すいません。暇で死にそうなときにもお付き合い頂けたら嬉しいです。ありがとうございます。
ました。

13 - 1 路地裏の住人たち

指を折って何日たったか数えてみるが、右手をグーの形にし、左手の指を数本曲げたところで止めた。三日だろうか、一週間だろうか、それとも二週間たったか。結局よく覚えていない。思い出す気力も、無い。

なりふり構っていない分、政府よりもフリークスの方が手は早かった。OCでも対象者でもなく、そこらの不良少年にしか見えない、彼らの上下関係の下層部分を占める者たちに、再び選択を迫られた。そして当然断った。そしてやはり、殺し合いになった。

生きる事への大層な理由も無いし、その先には何も見えないが、死ぬことに対する漠然とした不安があった。まさに死ぬほど痛いだろうし、ここまで来て簡単にやられたくない。

だけど、愁は自分の限界をよく知っている。普段、死なない程度に無理をするために、自分の限界は知っておかなければならないから、自然と分かるようになってしまった。それによると、常に緊張状態が続いている自分の身体は、すでに限界点を越えている。つまり、今は気力だけで動いているわけだが、それももう長くはもちそうにない。

戦って、逃げて、また戦ってを繰り返しているうちに、知らない路地裏に迷い込んでいた。あまり遠くには行っていないはずだが、ここがどこなのか全く分からない。しかし、そんなことは、もはやどうでもよかった。

敵の気配は無い。ぎりぎりの精神がそう告げるが、大分鈍ってしまっているそれは正しいのだろうか。それも分からない。

とにかく少しでも進まなければいけない気がして、片手を壁につき、なんとか足を進める。足元を歩くクロが心配そうに見上げるが、少しでも足にまとわりつかねれば、避け損なって転んでしまいたいそうだ。

それからいくらも進めず、暗い路地裏の地面に愁は膝をついた。もう、どこでうけたかも分からない身体中の傷が、鈍い痛みを訴えている。だから取り合えず生きているんだということだけは分かるが、意識の定まらない頭では、何も考えられなかった。

重い、眠気のようなものが身体を支配していくが、それに抵抗する気も起きない。やがて愁は、意識を手放した。

小さな子供の手が、そつと頭を撫でる。と、その口が、先程と同じように微かに動いた。声はよく聞こえないが、何度も同じ言葉を呟き続けている為、何と言いたいのかはわかる。

「ごめんなさい……」

同じ形に口を動かし、彼女も呟いた。ずっと眠ったままなので、誰に対して謝っているのかは分からない。今、夢の中にいる相手へののだろうか。

汗で湿っている髪が頬に張り付いた、その下の表情は苦しそうに歪められている。傷が痛むのか、それとも悪い夢でも見ているのか。彼女は、頭を撫でていた小さな手で、そつとその髪をかき上げた。途端、驚きのあまり、その手が止まる。

本来、右耳の存在する場所。そこには塞がりかけた穴があるだけで、自分達が普段耳と呼ぶ耳殻じかくは、影も形も無かった。

意識を取り戻すと同時に、愁は弾かれたように飛び起きた。触れられていた事を自然と感知した右耳部分に片手を当て、咄嗟に手を引つ込めた見覚えの無い少女へ視線を向け、

「……見たのか」

と、たった一言尋ねた。

突然の事に、七、八歳頃の少女は怯えきつた眼を向け、返事もせずに駆けていってしまった。

必死で記憶をたどるが、いずれもあやふやなもので、この場所に関するものは何一つ出てこない。床に足をつけて立ち上がるうとしたが、急激な眩暈と身体中からの痛みに襲われ、思わず、再び腰を

落としてしまい、焦りながら部屋を見渡す。そこには、自分が寝かされていたらしいベッドと、他には机や椅子などが雑然と置かれている。窓の外は暗く、天井から下げられている電球が、小さな部屋を照らしていた。少女が先程出て行った、たった一つの出入り口に扉は無い。

その向こうに影が見えたと思うと、一人の若い男が部屋に入ってきた。

「お、やっと起きたか」

明るい声で言うその年恰好から、棕とほぼ変わらないほどの年齢に思える。子供のような輝きを持った黒い瞳を、愁は探るように睨み付ける。

「そんな怒ったような顔してんなよ」

困ったような彼の後ろから、それより少しだけ年下に見える女の人、先程の子供を連れて不安そうに顔を覗かせた。が、彼らの足元から飛び出した黒い影に、愁は更に驚いた。

いきなり体当たりをかまされた衝撃で身体に痛みが走るが、それも忘れ、

「クロ！」

と声を上げた。膝に前足を乗せ、緑色の瞳でクロは飼い主を見上げる。尻尾がピンと上を向き、青色のリボンが揺れた。

「偉いやつだぜ、その子。おれらが下手に君に触ろうとしたら、毛逆立てて怒るんだもんな。おかげで、腕や顔ぐらいしか処置できなかったんだが」

そこで初めて、愁は自分の左頬にガーゼが当てられていることに気付いた。そして、腕。コートの下の左腕には白い包帯が巻かれている。

はつと顔を上げた愁に、男は頷いた。

「最初見たときは、流石に驚いたけどな。片岡愁」

「どうして……」

「君のことは彼から聞いたよ」

男は隣の部屋へ、何ごとか言葉をかけた。すぐに、何か床へ降り立った音がして、その彼がひょっこりと姿を現す。

「久しぶりだな」

眼を見開いて、クロのときよりも更に驚きながらその名前を呼んだ。

「志田さん!？」

見覚えのある黒猫が、愁の足元までやってきて、尻尾を揺らしながら喋った。

「心配するな。彼らは信頼するに十分値する」

「それはどうも」

普通に男が猫へ言葉をかけるのを見て、普通ではありえない光景に、いくらか混乱する。

「どうして、志田さんが」

「彼らとはちよつとした知り合いでね。いや、きみが失踪してしまっていたのは聞いていたのだが、まさかシオンが拾ってきたのが愁だったとは」

「不思議な事もあるもんだ」と、不思議の塊が首を軽く振った。

部屋にある椅子に、少女を膝に乗せて、ようやく女の人が腰を下ろした。二人とも、おそろいの茶色い長い髪をしている。

「おれの仲間に、政府の動向に詳しい奴がいてな。まあそいつに聞けば君の名前ぐらいは知っていただろうけど」

男が、軽く笑いながら続ける。不思議と、その笑顔に懐かしさを感じた。

「だけど、その猫の言うとおり、安心してくれ。おれらは君を政府に引き渡そうなんざ思っていない」

「おい、わしは猫じゃないぞ」

「よくいうよ、だれがどう見ても猫のくせに」

そうやってふざけあっているところを見ると、どうやら本当に前からの知り合いらしい。

だが、今まで笑顔で嘘をつく人間は、たくさん見てきたし、自分もその中の一人だ。彼もその部類だとは思えないが、悲しい事に、

どうしても、自分の中の理性が人を疑う事を強要する。

「ああ、忘れてた。おれはシオン。妹のアオイと、その下のサラ。兄妹そろって、君らが言うところの〇〇ってやつだ」

兄妹全員〇〇だなんて事例、聞いたことがない。余計にわけが分からないといった顔をする愁をよそに、サラが眠たそうにあくびをした。妹の髪をアオイが優しくなで、シオンが苦笑する。

「もう遅いし、部屋戻って寝ときな、サラ」

「眠くないもん」

そんなことを言いながらも、背中を押されるままに、彼女は立ち上がった。こちらを見上げる眠たげな眼の中に、微かな怯えを見つけて、心の奥の方から哀しさが込み上げてくる。自分でもよく分からないが、それは恐れられているから、ではなく、記憶の中にある、彼女のものと酷似した瞳が何かを思い出させようとしているから、という理由が大部分を占めていた。何かを恐れるその瞳は、懐かしさと悲しさをも同時に思い起こす。だが、それは誰のものなのか、思い出したほうがいいものなのか。それを考えるのを中断して、

「ごめんね、さっきは驚かせて」

と、愁は彼女に言った。

二、三度瞬きをした後、につこりと子供らしくサラは笑った。

サラとアオイが出て行った後、シオンは愁を振り返る。

「そこ使っていいよ。不安ならそのうるさい猫も置いていいからさ」

「だから、猫じゃないって言ってるだろ」

「猫じゃんか。……ああ、一応、きみが持ってた物騒なもの、まだおれが持つてるけど」

それは当たり前前の判断だと思ったので、愁は頷いた。自分が逆の立場でもそうするだろう。

シオンもいなくなってから、愁は一度コートの内側を確かめたが、彼の言ったとおり、刃は一本も残っていない。ナイフ一本しか持っていないことに不安を感じている自分に気付き、改めて嫌気がさし

た。

「さっきも言ったが、彼らは決して危険な奴らじゃない。まあ、猫の言う事なんて、信じられないかもしれないが」

「……拗ねないでくださいよ」

「拗ねてなどない」

あくまで人だと言い張る猫はそう言って、後ろ足で器用に耳の後ろをがりがりと搔いた。

13 - 2 路地裏の住人たち

「おれらはな、存在しないはずの人間なんだ」

翌日、一人でやってきて、椅子に逆向きに座ったシオンが語る。その顔はどこか楽しそうで、雰囲気はサラの笑顔のように、懐かしさの輪郭をたどらせる。

兄妹の両親も共にOCで、かなり強力な能力を持っていた。戦闘で役に立つ能力だと判断されたOCは、犯罪対策部等の機関から半強制的に勧誘される。「フリークス」等と対等、もしくはそれ以上に対峙する為だ。もちろん彼らも、そうすることを望まれた。

「二人とも、一度だけ人前で力を使ったことがあってさ。ばれちゃったんだよ」

言いたいことは、容易に想像できる。危険な、得体の知れない能力を持った人間に対し、世間の風は決して暖かくはない。

「でも政府機関に入ったOCには、生活する為の最低限の保障は……」

「それがなんになる」

シオンの声が急に低く冷たさをおび、愁は思わず息を呑んだ。

「世間に混じって食っていける保障があっても、だからって何で戦わなきゃならないんだ。死んじまったら何にもならない」

苦々しい顔で、シオンは続ける。

「それに、実験動物になる理由も無いんだ」

実験動物という言葉に、言いつぎじゃないかと思っただが、OCでない愁には何も言えない。いつも嫌々ながら研究部に顔を出していた人を思い出し、その言葉もまんざらではないなと思った。

「結局、隠し通せなかったのが運の尽きだったって言ってたな。戦わず、ただ普通に生きたいだけなんだって。だから二人ともここまですべて逃げて、おれらはここで育った。もちろん戸籍も無い」

彼は肩をすくめて笑った。存在しないというのは、こういうことだ

ったのか。

「ただどこにいる奴は、誰もそんな事に文句なんて言わないからさ」

「他にも、誰かいるんですか」

「おれらみたいの外から逃げてきた奴が、他に何人かいる」

「気にすんなよ、悪いやつはいないから」と言われて、それならそうなんだろうと、愁は思った。その単純な考え方が危険なんだとは分かっているが、彼らを疑う必要は無いと、信じていたいと、奥底にある、嘘のない本当の心が囁く。

クロと一緒に床に丸まっていた猫が、むくりと身を起こし、ぶるぶると身体を震わせた。それを皮切りに、シオンが再び口を開く。

彼らの、他愛の無い思い出話だった。最近の事には志田も口を挟み、楽しそうに笑う。時折軽い衝突が起きると、「なあ」と、どちらかが愁に同意を求め、どっちつかずの曖昧な返事に、再び一人と一匹は笑う。

忘れていた雰囲気だった。この暖かい空気を壊す事になるんじゃないかと、怖くて聞くことができない。だが、そうならないことを願って、彼らの会話が途切れた頃、愁は恐る恐る視線をシオンに向ける。

「……僕のこと、聞かないんですか」

「ん？」

「なに」という様に、笑ったままの表情で彼は視線を合わせた。

「僕、犯罪者になってるんですよ。危険だからって、対策部も切り離すようなやつなのに」

「知ってるよ。そんなら、愁はおれたちを殺そうだとかなんとか考えてんの」

眼を少し見開いて、愁は大きく首を横に振った。

「なら、別にいいじゃんか」と、軽く返すシオンに、言葉を繋げる。

「でも、政府にもフリークスにも追われているのに、ここに置いてる

なんて知られたら……」

シオンたちも、きつとただではすまない。今まで人目を憚んできた彼らが、更に犯罪者まで匿っていたなんて知られれば、このままの生活に戻れる可能性は限りなくゼロに近い。

それだけは、絶対にしたくなかった。この、表に出る事はなくとも、それ以上に暖かい場所を壊す真似なんて。愁は目を伏せた。

「じゃあなんだ、おれは放っておけばよかったのか」

しかし、シオンの声音にも表情にも、怒っている節は全く無い。

「ひどいなあ」

「え？」

「こんな路地裏にぼろぼろになって転がってるやつがいてさ、それを無視していくほど、おれってひどい奴に見えるか」
ふざけたように笑って言った。

もし、街中で一人で泣く人がいても、ほとんどの人が変な目で見ながら目も合わさずに去っていくだろう。それが倒れていたとしても、率先して声を掛ける人が、果たしてどれだけいるだろうか。

シオンはきつと、自分の優しさがどれほどのものなのか知らないのだ。非常識だと言われてしまうような、その常識がどれほど優しいものなのか。

ああ、やつと思い出した。

昨日その笑顔を見たときに、ふっと込み上げてきた懐かしさ。シオンは似ているのだ。

「嫌になっただら出てつてもいいけどさ、別に今更捨てる気は無いよ。こんなこと昨日も言った気がするけど。君のことだって無理に話さなくてもさ、話したくなったらいい」

そう言うシオンの、その笑顔も雰囲気も、やっぱり彼に似ている。優しさが非常識に変えられる分、彼の方にはどこか悲しげな膜が常に張っていたが、酷似している懐かしさに少し苦しくなる。

床の上で、「言ったとおりだろ」とでも言いたげな顔をして、猫が愁を見上げた。それを見て、少しだけ笑った。

昼間は、狭い路地裏の一角で壁にもたれて、ただぼんやりと空を見上げるだけだった。幅の狭い縦長の空は、やはり突き抜けるように高く青く、今まで愁が見てきたものと一つの違いも無い。少し前に見ていたものと同じだと考えると、不思議な気がしたが、やはり同じ空だった。雲の流れていく先に、数週間前まで自分がいた場所があるなんて、信じがたいが、いつだってこの同じ空の真下にいたのだ。

ここでは、まるで世界自体が違っているかのように、愁が今まで生きてきた場所とは時の流れが違った。常に時間という絶対的な概念に押され、曜日という区切りに生活を当てはめ、日々を過ごす人々は、ひどく遠い場所にいるように思える。

日が暮れると、星が瞬き月が昇る。そして、暗闇の中、ずっと座って夜空を眺め続ける愁の傍らには、離れまいと常にクロが寄り添い、時折、一人二人、時には一匹がその側で一緒に夜空を見上げ、笑顔を分けていった。

もたれている壁のすぐ横には一枚の扉があり、その奥でシオンやその仲間がふざけ合ったり談笑していたりする。路地裏から幾度かそれを眺めたが、その誰もが、柔らかで自然な笑顔を湛えている。ほんの数歩の距離だが、彼らは自分とは遠く離れた場所にいるようだった。

「きみも、行ってみたらどうだ」

クロの隣に座っている猫がそう訊ねるが、その度に笑って首を横に振った。孤独感や疎外感なんて無い。ただ、見ているだけで不思議と安心できるから、それでよかった。

そして再び空を見上げる愁の名を志田が呼び、振り返った彼に訊ねる。

「いつも、空を見て何を考えてるんだ」

「何をつて、別に何も考えてないですよ。ただ見てるだけで」

「視線は上に向いているが、まるで心ここにあらずって顔してるぞ。

別のものを見ているみたいだ」

「志田さんは好奇心旺盛ですね」

笑いながら言った愁を、言葉を飲み込んだ志田が上目遣いに見上げた。自覚はしているようだが、決まり悪そうな表情。

「いろいろ思い出してたんですよ」

「いろいろ、か」

「ずっと前のことなんですけどね」

明日も今日と同じ様に無事に終わらせるため、普段は思い出さないうようにしている事。しかし、時間の感覚の違うここだと、向き合えるんじゃないかと思った。忘れたいが忘れてはならない思い出に向かうにはどうすればいいのか、正直、よくは分からないが、きちんと記憶を辿ってみれば。それが無理でも、次の日にそれを引きずって必死で笑うよりは、上手くいく気がした。

志田がそつと横から見た愁の左目には、焦りも苦しみも無ければ、安堵しているような穏やかさも無い。ただじつと、空を見つめている。いや、いくらその瞳が空を映していても、見つめているものは違うのだろう。その景色が、自分の見ているものとは違っているのだということ、志田にも楽に理解できたが、それを問い詰めるような真似はしなかった。

今はコートを脱いでいるので、その下に着ていた半袖の黒いシャツからは金属で出来た腕が伸び、鈍い光沢を示している。隠す必要がないので、手袋もしていない左手の素肌には、クロが眠たげにもたれかかり、目を瞑った。

13 - 3 路地裏の住人たち

月の明るいある夜、志田とシオンもやってきて、ただ空を眺めていた。時折発する言葉は、静かに空気を震わせ、夜闇の中へ消えていく。

「クロちゃん、抱っこさせてー」

小さな足音を立てて、扉の向こうからサラが駆けて来た。扉の側にちょこんと座っていたクロを両手で抱き上げて、ぎゅっと抱きしめる。クロは抵抗せず、大人しく腕の中で、されるがままになっていた。

「志田さんちよつとどいて、サラも座るー」

「……扱ひどくないか」

そう言いながらも場所を空け、そこにクロを抱いたサラが代わりに座った。

「だって、いつつ猫じゃないって言ってるじゃん」

「それはそうだが」

「分かった分かった、いいこいいこ」

頭を撫でられている猫を見て、シオンが可笑しそうに笑った。志田は、慚然とした表情で彼を見上げて言う。

「言う事が兄妹そっくりだな」

「だな。移っちまった」

クロを胸に抱くサラの両肩に、そつと後ろから手が乗せられ、彼女の肩を抱くようにして、その隣にアオイが腰を下ろした。

「おねーちゃん、クロちゃんかわいいよ。ほら」

「そうね、いいこだね」

アオイの細い指がクロの喉をそつと撫で、猫はごろごろとその喉を鳴らす。

青い首輪をした猫は、所在無げに、その身体を愁とシオンの間に収めた。月明かりに照らされた黒い毛皮が、流れるように光ってい

る。

「父さんらがいた頃から、よく見てたな」

「何を見てたんだ」

「月。変わらないな、当たり前だけど」

志田の質問に、シオンは静かに答えた。その頃を思い出しているのか、その顔は穏やかに笑っている。

「ねえねえ、愁のおかーさんとかって、どこにいるの」

突然、サラが振り返った。

「サラのね、おかーさんとおとーさんはね、すぐに死んじゃったの。だから、なんにも覚えてないの」

彼女が屈託のない笑顔で話すのを、シオンもアオイも止めようとはせず、そんな過去さえも包み込む暖かさがそこにあった。サラはそのことで、孤独を背負うことも負い目を感じることも無かったのだろう。事実、彼女の笑顔がそう物語っている。

「……さあ、どこにいるんだろう」

困ったように愁は答えた。サラが、きよとんとした顔をする。

「分かんないの？」

「生きてるとは思うけど、僕は知らない」

「顔とか知ってるの？」

「よく、覚えてない。……ただ何か、すごく悲しい事があつた気がするだけ」

その何かはよく覚えていないし、分からないが、思い出したくないことがあつた気がするの、普段は考えないようにしている。思い出そうとする事自体、今となっては殆ど無いし、その必要もない。

「ふうん」

と、サラは不思議そうに首を傾げ、シオンが壁にもたれて立ったまま、口を開いた。

「思い出せるんなら、全部忘れる前に思い出したほうがいい。最初に君のことを認めたのは親だったろうし」

「何でそう言い切れるんですか！」

思わず、愁は声を荒げて立ち上がった。すぐに、驚いた顔をしているシオンが視界に入り、「すみません……」

と声を落として再び座りこんだ。

「いや、悪い。おれが軽率だった」

そう言うシオンの声が、痛々しく染み込んでくる。俯いて奥歯を噛み締める愁を、心配そうに志田が覗き込んだ。

「親にもきょうだいにも見捨てられるような僕が、誰かに認めてもらえるわけないんです」

潰れるように小さく、そう呟くと、横にいる猫に大丈夫だと笑いかけて顔を上げた。

「僕は、ずっと前に捨てられたんです」

自嘲気味に笑いながら話す愁を、シオンは穏やかな瞳で見下ろす。

その瞳の中に、どこか寂しさが混じっているのを見つけて、込み上げてきた懐かしさに苦しくなった。

「四つ上のきょうだいがいるんですけど、その背中に僕を背負わせて、本部の前に置いていったんです」

そして、両親は二度と戻ってこなかった。

ふいに降って来た雨にさらされ、異常な量の睡眠薬で死んだように眠る弟を背負い、まだ幼かった椋は、いったい何を思っただろう。どれだけ辛かっただろう。それを考える度に、苦しくなる。そのとき感じたはずの不安と孤独の大きさは、想像もつかない。

捨てられたのだということは、きつとその時の彼には分かっていただろう。それでも、愁を捨てて両親を追いかけようとはせず、あまりにも大きすぎる悲しみに耐えていた。犬のように捨てられ、雨に打たれながら、それでも、言われたとおりに椋は愁を背負って立ち続けていた。

「どうしてきみの親は、そんなことをしたのだろうな」

「分からない。いらなかったからだろうし、それまでに何があったか、よく覚えてないから」

志田の言葉に、薄く笑ったまま答えた。

「それでも、きみのその、兄、か」

愁が一度頷き、猫は青色の瞳の隅に月を映しながら彼を見上げる。

「四つも上なら、その両親の事も覚えてるんじゃないか。聞けばいいだろうに」

「僕らはね、あんまりそのことは話さなかったんですよ。僕自身、普段は全然考えないし、まず聞いても教えてくれなかった。忘れてるならその方がいいって」

「それに」と、愁は続ける。

「きつともう、兄弟には戻ってくれない」

「それは、さつき見捨てられたといったあれか」

「しょうがないんです。僕が、そうなつても仕方ない事をしたから、そこで言葉を区切つて周囲を見渡したが、誰の目にも、同情の色は欠片も滲んでいなかった。捨て子だと知つた途端、可哀想な子だと、同情を湛えた目で見てくる者が今までに幾人もいたが、彼らに救われた事は一度も無い。そんな目を見るたびに、自分は普通じゃないのだと、不幸な人間なのだと言われているようで、腹立たしく、そして虚しくなる。」

だが、ここでは誰もそんな目はしていなかった。相変わらずの、穏やかな瞳。

言葉にして自分の中で整理をつけたかったのか、本当のことを誰かに知っていてほしかったからなのか、分からない。

「僕の話、聞いてくれますか」

そう訊ねると、シオンはいつものように、笑つて頷いた。

14 - 1 記憶と傷痕

夕月直哉ゆしきなおやという人がいた。

OC犯罪対策部に在籍していた彼がまだ二十歳にもならない頃、その本部で二人の兄弟が拾われ、一時的に面倒を見る役を、彼が買って出た。

誰がこんな事をしたのか。戸籍を調べればすぐに両親の名前は判明したが、その姿は見つからず終いで、保護者のいない二人は、当然、施設行きが決まっていたが、夕月はそれを渋った。

二度も捨ててやらないでくれと、そんなことを言っていたが、必要以上に彼は必死だった。そして、普通なら鼻であしらわれるところだが、非常に優秀な構成員であった彼が言った事だから、まだ問題にされたのだ。全ての責任を負うことを筆頭に、様々な条件を重ねてようやく、対策部に置いておく事が許可されたとき、兄弟以上に彼は喜んだ。よかったと子供のように笑って、未だ警戒を解こうとしない二人を抱きしめた。

優しい、穏やかな瞳をしている人だった。その奥底には、拭いきれない寂しさのような哀しみのようなものが、影のようにいつも張り付いていたが、それでもいつも笑っていた。

幾年かして、ある大きな仕事か山を迎えたとき、夕月は愁をその現場に連れて行った。すでに掠は、戦力の一つとして成り立っていた頃だから、それも当たり前だったのだ。しかしそれが、割と危険な仕事だと想定していたのか、夕月は無線機だけを手渡し、

「おれらが危ないと思ったら、それで他のやつ呼んでくれるだけでいいから。使い方、分かるな」

それだけ言つと、頷く愁の頭を右手で軽くなでた。そして、その暖かさがまだ残っているうちに、戦闘が始まった。

危険だといつても、相手の位置も能力も把握している状態だったので、プロである彼らがそう簡単に負けるような状況ではなく、現

に最初は随分と優勢だった。このまま全て終わるんじゃないかと、誰にでも容易に予想できた。

だが、時間が経つにつれて予想は覆されだした。把握しきれなかった想定外の能力、それもかなり強力なものを持っていた相手は、こちら側の人間を一人また一人と倒し、容赦なく止めをさす。今思っても、滅多に例を見ない強さだった。油断していたわけではない、ただまるで桁の違う相手だったのだ。

応援を呼べば、なんとかなる。多勢に無勢だ、包囲を固めるなり、こちらも、もつと強力な手駒を呼び寄せれば、いくら相手が強くても流石に負ける事はない。そう、これ以上誰かが死ぬこともなかったのだ。

しかし、愁は助けを呼ばなかった。呼べなかった。

あまりの恐ろしさに、手渡された機械を強く握り締め、ただ立ち尽くしていた。自分に優しくしてくれた人たちが、刺し貫かれ、血を流し、地に倒れるのをただ見ていた。それを、楽しげに行っている者がいる。その圧倒的な強さが、ただひたすら怖くてたまらない。一步も動けずに、目を見開いて全てを見ていた。やがて、傷だらけになった夕月の背後に敵が回りこみ、彼が振り返ってそれに触れようとした直前、相手の指が先に彼に触れた。夕月は、切り裂かれた腹から血を噴き出しながら、血の中にくずおれた。

ずっと見ていたはずなのに、気が付くとあたり一面に血の海が広がっていた。みんな死んでいる。不気味なほど静かだ。愁が目立たない位置にいたためか、それとも敵方は子供なんて殺そうとも思わなかったのか、そこでは愁一人しか生きてはいなかった。

時間の感覚は全くなかったが、敵がいなくなっただけでそう経っていなかったように思える。後ろから響いてきた足音に、ゆっくりと振り向くと、掠が呆然と同じ光景を眺めていた。この付近で活動していた彼は、自分の担当が済むとすぐに様子を見に来たらしい。

「だれか、呼んだのか……」

愁の姿を見つけた彼は、かすれた声で訊ねた。ぼやけた頭でなんと

か言葉の意味を理解した愁が、僅かに首を振って否定すると、
「何やってんだ！」

そう怒鳴りながら駆け寄り、その手から無線機を奪い取ると、早口で何ごとか喋る。しかしそれすらも、愁はただ見ているだけだった。それから人が集まりだし、手際よく後片づけが始まったが、処置のしようもなくやはり全員が息絶えてしまっていた。

赤い地面に膝をつき、ごめんなさいを繰り返す愁を、誰も止めようとはしなかった。

数時間前までは生きていた人達に、ひたすら謝り続けることしかできない。彼らは、信じてくれていたのだ。それなのに、臆病な自分分は、ただ死ぬのを見ていただけだった。悲しくて悲しくて堪らない心から、涙は零れてくれない。一杯になりすぎた心は、何も無いようにならっぱで溢れはしない。

だが、時間が経つにつれ、からっぱのはずの心から、堪え切れない感情が形になって零れだした。一度滲んだ涙は、止まることを知らない。

血と泥にまみれた夕月の身体はひどく冷たく、その虚ろな瞳は、何も映してはいなかった。

「どうして、何もしなかったんだよ……」

その身体のある場所で、泣きながらひたすら謝り続ける愁の傍らに立った椋が呟き、顔を上げた愁は、思わず目を見開いた。

椋の眼から、涙が一筋だけ零れ、頬を伝って落ちた。愁が見た、最初で最後の涙。親に捨てられても、そのことを学校で責められても、自分達を厄介ものだと嫌悪を露にする人がいても、一度だって椋が泣いたことはなかった。しかし、何があっても毅然と前を見つめている瞳から、そのとき一度だけ、透明な涙が零れて落ちた。

お前のせいだと罵られることも、殴られることも覚悟していたし、それぐらいは当然だとも思っていたのに、椋はそのどちらもせず、ただほんの少しだけ泣いた。だがそれが最も、彼のこれまでにない悲しみを表していて、

「兄ちゃん……」

背を向けた襟に声をかけたが、振り返ってはくれなかった。遠ざかっていく背中を、愁はただ一人で、見えなくなるまで見つめ続けた。

「でも、愁も、わざとやったんじゃないだろう」

励ますでも、なだめるでもなく、ただ確認するようにシオンが聞いた。

「それでも僕のせいではなくさん人が死んだ。それに、二回も」

「二回って」

「その後、夕さんの次に僕とよく仕事をした人がいたんです。濱瀬はませ夢っていう、子供みたいで、優しくて、よく笑う女の人」

愁の瞳には、路地裏の地面ではなく、その時の記憶が映っている。「三年ぐらい前、僕と一緒に場所を担当する事になったんです。そのときも、かなり危険な相手で、硬直状態が続いていて、それを破る切り込み役を僕がすることになってたんです。死ぬ覚悟もしてました。でもそのとき、怪我をしていたのを心配してくれて、私が代わってあげるって、言ってくれたんです」

血の流れる右腕に応急処置をしてくれながら、彼女はそう言って笑った。

「駄目だ、僕の仕事なんだからって言ったけど、聞いてくれませんでした。僕も、その手を掴む事ができなかった。……自分が死ぬのが怖かったんです。追い込まれてぎりぎりのときなんかを除いて、作戦を勝手に変えるなんてこと、あってはいけないのに。そのときは、それが許されるときじゃなかったのに」

ちゃんと規則を守っていれば。しっかりと覚悟を決めていれば。あの手を掴めていれば。

「死ぬのは、僕だったのに、死ねなかった。生き残るのは……」

彼女のはずだった。この世に残っているのは、自分じゃなかった。

「僕は死に損なった」

「違う、きみは生き残ったんだ。死に損ねたんじゃないだろう。」
首を横に振る志田を見下ろし、愁は肯定するでも否定するでもなく、

以前のように曖昧に笑った。

「そう、僕はそれでも生きていた。手も足もいろいろ失くしたけど、死ななかつた。それでも、前を向けなくなつたんです。これで、ちゃんと生きてるっていえますか」

「何を、言っているんだ。きみはちゃんと、前を見ているじゃないか」

「僕は逃げてるんです。誰かに否定されるのが怖くて、本当のことはずっと隠し続けて、そんな臆病なところを見透かされるのも怖くて、前なんて向けなくなつた」

首を傾げる猫に笑いかけ、愁は立ち上がった。彼らと向かい合うように、反対側の壁へ背をつける。折れそうな心に、ひやりとした冷たさが、染み渡る。

本当のことを知られるのも見られるのも、怖い。その先で、相手に否定され、見捨てられるのが恐ろしい。

だから愁は、この思い出を誰かに話すことは今まで殆ど無かつた。それも、聞かれたから答えるくらいで、自分から話すなんて真似はしない。この腕も、足も、全部隠し続けてきた。弱くて臆病な、どうしようもない奴だと見捨てられたくなくて。

この人達は、全てを知って、自分を見捨てるだろうか。情けない奴だと、呆れるだろうか。

そうでないことを願った。誰かに全てを知っていてほしかった。そして彼らの優しさを信じたくて、愁は自分のシャツを握り締め、上着を脱いだ。髪がその拍子に後ろへ撫で付けられ、普段は隠れている右耳の穴が姿を現し、思わずシオンやサラたちは言葉を失う。

首筋の右側から痩せた身体の横腹まで、醜くひどい火傷の痕が残っている。光源は月明かりしかない路地裏でも、そのにこった赤色ははつきりと目に映った。

「本当は、これにせものなんです」

そう言うと、愁は自分の金属で出来た右手を目の高さまで持ち上げ、その指をそのまま右側の眼孔へ差し入れた。軽く指を曲げ、先程ま

で顔の中に収まっていたそれを手に摘み出す。哀しそうに、左目が右目を見つめた。

猫が、問う。

「どうして、そんなことに」

「さつき言った、死ねなかつたときです」

死にはしなかつた。ただ、継ぎ接ぎだらけの身体だけが残った。他には、何も無い。

元の場所に右目を戻し、数度瞬きをすると、再びシャツを着直す。髪で耳元が隠れると、先程の面影は欠片も残らない。

自分から人にばらしたのは、始めてだった。後悔はない。ただ、不思議な安堵と空の虚しさがじわりと広がる。立っているのが辛くなって、その場に座りこんだ。

「僕のせいで、たくさん人が死んだ。だから僕はちゃんと前を見て歩かなきゃいけないのに、できないんです。必死で本当のことを隠し続けて、隠さないと生きていけない。前なんて見られるわけがない。」

情けなくて仕方が無い。こんなに嘘ばかりついていて、生きているなんていえない。こんなこと、誰も望んでいない。

堪らなくなつて顔を伏せた。泣きたかつたが、人前で泣くなんてそんな弱いことは許されない。そして、少しでも強くなれるために、嘘をつく。嘘をついて笑う。

「大丈夫、私たちは捨てないから」

ふと、そんな言葉がすると同時に、頭を温かい手がなでた。優しく微笑むアオイを、愁の黒い瞳が見上げる。側にしゃがみこんだ彼女の肩越しに、クロを抱いているサラが見えた。

「言つたる。今更捨てる気は無いつて」

と、夕月に似た瞳で、シオンが笑った。その笑顔も、アオイの手のひらも、懐かしすぎた。

人って、こんなに温かかつたんだ。

最後にこうやって誰かに触れられたのは、いつだったか、もう思

い出せない。ただ今は、その懐かしさは、ひたすら優しかった。

右腕の傷は思っていたよりも深く、なかなか出血は止まらない。

動かすのに支障のない程度に強く包帯を巻きながら、痛みを顔にしめる愁を、夢は見下ろした。二十歳を迎え、成長は止まってしまつたが、彼女の方がいくらか身長は高い。

「よし、応急処置終わり。用意ができたので決行していいって言つてたけど、大丈夫」

「大丈夫です」

頷いて、愁は行く先に顔を向けた。その眼は普段の仕事のときよりも大分鋭く、ぎゅっと口を引き結んではるか先をを睨みつけている。きつと抑えようとしているのだろうが、彼が普段よりも深く頻度の高い呼吸をしていることに、彼女は気が付いた。

「ほんとに？」

そう言つて顔を覗き込む夢を、訝しげな顔で愁は振り返る。

「なんなら、私が代わつてあげようか」

「え？」

「だって、こんな怪我したら上手くいくものもいかないでしょ」

「駄目ですよ。これは僕の担当なんだから」

しつかりした目で見上げるが、その奥底に潜む不安を見抜いて夢は笑う。今の愁とは対照的な、子供のような無邪気な笑顔で。

「忘れてるかもしれないけどさあ、愁より私の方が強いんだよ」

「そんなこと言つても……」

「自信あるの」

率直に聞かれ、愁は返事に詰まつた。硬直している、誰も下手に手出しが出来ない状況に対し、ふいをついてそれを崩すという作戦ともいえない作戦。動くのが危険だから誰も動けないのだ。それを無視して突つ走つて無事でいられる自信は、正直なところ無かつた。

「だめじゃん」と、夢はこの場に似合わない明るい表情で笑う。

「だいじょーぶ。少なくともあんたよりは、ね」

「でも……」

「じゃ、援護よろしく」

彼女は愁の肩を軽くたたき、両側を倉庫に挟まれた狭い道を進み始めた。引き止めないという思いで、咄嗟にその手を掴もうと愁は手を伸ばした。しかし、その距離は既に開きすぎていて、その手はあと少しというところで宙を掴む。走って行って引き止めることができなかった。

日の落ちかけた夕暮れ、幾つも連なる倉庫は、夕日に照らされて赤みを帯びている。あちらこちらに人が潜んでいるとは思えないほど、周囲は静かだった。その倉庫群に囲まれた、土がむき出しになっている、だだっ広い何も無い円形の空地へ、夢は一人で歩いて行く。隠しても隠し切れない長い影が、ちらちらと躍った。

彼女の足取りは一見軽いのが、警戒は全く怠っていない。自分の微かな足音意外の音がしないかと、神経を研ぎ澄ましている。

夢の耳元で、虫の羽音がした。

横へ跳躍した途端、その小さな羽虫がそれぞれ爆発して弾けた。と、それを引き金にして周りの空气中を漂っていた虫たちが弾けだし、その周囲を張っていた仲間が近くにいるであろう敵を確信して、行動を始める。張り詰め、緊迫していた空気が、文字通り音を立てて崩壊した。

当然、最も居場所を確実に示している夢へと、その小さな虫たちは集まり始めた。一匹一匹の威力は小さくとも、それが何十匹単位になれば非常に危険だ。しかし、相手は虫だ。どれだけいるか分からないし、場所の特定も根こそぎ倒す事も難しい。その中に飛び込む危険性は誰もが承知していた。だから、誰も近づけなかったのだ。それを操っている人間をやく捕らえなければ、夢がやられるのは時間の問題だ。おおまかな場所が分かった今、周りの者は必死でそれを見つげようと奮闘している。

相手は、獲物を視認できる場所にいる。必ず、この付近にいるは

ず。

愁は必死に、彼女のいる開けた空地へと走った。と、その途中の倉庫によって出来た影の中に、見知らぬ人影を見つける。その後姿には、全く見覚えが無い。

迷わず、上着の中の刃を左手で引き抜くと、すぐに感づき、逃走を図ろうとする相手に投げつけた。

手首が炎症を起こしても練習してきた技術だ。今まで行った幾つもの仕事の中でも、外した回数は片手の指で収まるほどしかない。

だが、焦りの為か、強い相手へ対する畏怖の為か、それは僅かに相手をそれで固い倉庫の壁に突き刺さった。外すような距離でもなかったのに。

しまったと思った瞬間、羽虫の大群が視界を埋めた。地面を蹴つてとにかくその場所から離れ、爆風によって思っていたよりも遠くの地面にぶつかった。立ち上がったときには、すでに相手の姿はその場にはなくなっていた。

「大丈夫か」

と、側を駆けてきた仲間が声をかけてくる。

「だいじょうぶ……」

そう返事をして、ふと、彼の肩越しの風景が視界に入る。途端、愁は大きく目を見開いた。

一人目の獲物と認められ、逃げ場を失った夢が、開けた地面の上にいる。その身体の傷は致命傷には至らないようだが、すでに彼女は血まみれだった。そして、もつと恐ろしいのは、そろそろ止めをさすつもりなのか、黒い一つの塊と化した小さな虫の大群が、その近くにあることだった。

愁は彼の側をすり抜け、その方向へと駆け出した。

「おい！そっちは……」

止めようとしているのが聞こえたが、聞こえないふりをする。彼の言いたいことが正しいのはよく分かっている。今彼女のところにたどり着いても、出来ることなど何も無い。だが、一瞬だが、見知ら

ぬ影が向こう側の倉庫の闇に見えた。そこに向かうには、その開けた場所を通るより、倉庫の合間を縫っていったほうが安全で確実に、そうしていたらきつと間に合わない。

けれど、自分が本当に向かいたいののは、敵の方ではない。夢のところまででもたどり着けば、何とかなると思つた。冷静さを欠く、あつてはならない感情的な行動だとは分かっている。だがそれでも、自分の代わりに死を覚悟した夢が死ぬのは嫌だった。とにかく、血だらけで今にも倒れそうな彼女を、あそこから離さないとならない。死なないで、死なないでくれと、緊張と恐ろしさの為に心臓が激しく鳴る。全力で走っているからなんかじゃない。鼓動は激しいのに、心はひやりとしていた。

ようやく林立する倉庫の壁から抜けて、一步踏み出した。敵の判断は、想像以上に早い。虫の塊が砕け、大半が空中に広がる。

しかし、それは視界には入ってこなかった。最早、走る事しか考えられないその頭では、そちらに注意を向けることも出来ない。

耳元で、羽音がする。身体の右側、耳のすぐ側。右腕に、小さいものがたくさんまとわりつく感触。視界の右端に、細かいものが集まって出来た、黒い影が映った。

一斉に爆発が起き、前に進んでいたはずの身体が左側へ飛ばされ、地面に叩きつけられると、そのまま転がって止まった。何が起きたのかよく分からない。

ただ、自分の右側が、妙に濡れている。ぬるりとした液体が、身体の表面を伝っていくのだけが分かる。

そんなことより、走らないと。

うつ伏せになり、起き上がろうと地面に両手をついた。そのときようやく目にした自分の右腕はぼろぼろで、あちこちに穴が開き、ところどころの肉がこそげ落ちて減っていて、残っている皮の方が少ない。体重を支えようと力を入れると、とめどなく血が溢れ出す。それでも立ち上がることは出来た。しかし、まだ向こうにいる夢

はさつきよりも身体を赤く染め、地面に倒れていた。一瞬絶望感が心を占めたが、なんとか彼女は立ち上がるうとしている。生きている。

もう一度、愁は駆け出した。

「愁、駄目だ！戻れ！」

誰かが後ろで怒鳴るが、最早それは音であって、言葉として認識することは出来なかった。頭の中は白くて空っぽで、ただ、今日最後の太陽が投げかけてくる日差しが目につき刺さり、単純な眩しさを感じただけだった。

あと、もう少し。

残り数歩のところ、右足の違和感にようやく気が付いた。膝を、何かに締め付けられているような。

途端、愁の右膝に張り付いていた虫たちが、破裂した。

身体が大きく前に傾く。踏み出したはずの右足が土を踏みしめる感触はなく、その勢いのまま地面に倒れた。顔から垂れた血と、地面の土が、口の中で混じる。

ぜえぜえと必死に呼吸をし、限界を訴える声に必死で聞こえないふりをして、さつきと同じ様に両腕を土の上のに突き立てる。と、無理をしすぎてもろくなった右腕があり得ない方向に折れ、再び地面にぶつかつた。最早つかえ棒にもならない腕を、なんとかもう一度立てる。

だが、身体は立たなかった。首を曲げて腹の下から足の方を覗く。膝が僅かに土から離れ、そこから滴る血が、地面の窪みにたまっていた。その切り口から先には、何も無い。

なんとか顔だけを上げると、ようやく立ち上がった夢の真っ赤な背中が見えた。が、そこに黒い塊がしがみつき、それを隠す。同時に、愁の心も恐怖で多い尽くされる。

「やめろ、やめてくれ……」

喉の奥から搾り出すように、見えない相手に訴えた。しかし、そんな言葉も虚しく、彼女にしがみつくその数は増えていく

「やめろおーっ！」

どうしようもなく、叫ぶ事しかできなかった。喉から血が出そうなほど、叫んだ。

腕が再び二つに折れ、身体全体が大きく右側に傾きだす。赤色を増やした夢も、ゆっくりと地面に倒れていった。彼女の背中に出た大きな穴から、赤いものが零れ落ちるのを視界に入れたとき、愁も地面に身体を預けた。すでに、意識はなかった。

15 - 2 亡失のユメ

重たい瞼を開けると、見慣れない白い天井だけが見えた。体が重い。頭もぼやける。仕方なく、横たわったまま、少しずつ記憶を取り戻す。

ああ、行かないきゃ。

身体はまだ動きたがらないが、行かなくてはならない。のろのろと半身を起こし、天井と同じ様に白い壁を見つめた。心なしか視界が狭い気がするが、疲れているから、気のせいだろう。

ベッドの枠を握り締め、向きを変えると、冷たい床に素足を下ろした。そのまま床に下りようとしたとき、どういうわけか派手な音を立てて転倒した。左腕に刺さっていた注射針が抜け、その先にある器具が共に倒れる。

身体を貫くような痛みが走り、呻くと同時にかすんだ思考が少しだけはつきりした。

足、なくなっただんだけ。

見下ろした先、見慣れない水色の薄い生地の手から下は空っぽだ。立ち上がるのと、再び枠に手を伸ばしたが、いつまでたっても何かに触れた感触はない。不思議に思って視線を向けたが、そこにあるべきはずの右腕は、肩口から見当たらない。足が千切れるのは見た。しかし、腕はどうだったか。

異常なほど、驚きは少なかった。それは、まだユメの中にいるような感覚に助けられたからだろう。痛みはある。が、今いる場所が現実だという実感はまだ沸いてこない。もう一度目が覚めればちゃんと元に戻っているような、そんな気がして。

壁に立てかけてあった松葉杖でなんとか立ち上がった。視線の先にある窓の外はうす暗く、自分が鏡のように映る。右腕を失い、顔の半分にガーゼや包帯を巻き、一本の棒に寄りかかってなんとか立っているその姿を、愁は無感動に眺めた。やがて、ふっとそれから

目を離し、行くべき場所へと歩き始めた。

外はまだ暗いが、空気はさほど冷たくない。いや、もし冷たかったとしても、それをはっきり認識する余裕はない。動く度に横腹から激痛が走るが、止まっても腕と足と顔が痛みを訴え続けるから、そのことから気は反らす。まだユメの中を彷徨っているような非現実な感覚が麻酔の代わりになってくれるので、なんとかそれも可能だった。

記憶の端にある病院だったので、その場所もうる覚えだが分かる。自分が今向かっている場所が、そこからさほど遠くない事も。

朝を控えた暗い道に、すれ違う者はいなかった。何も考えずに、残りの距離も分からずに、ただひたすら前に進む。今はもう、それしか残っていない。

とても、歩きにくい。何度も倒れ、それと同じ回数だけ起き上がって、不器用に歩く。何のためにこんなことをしているのかは分からないが、ただ、たどり着けば、目が覚める。ここから抜け出せる。全部ユメだったと言える。一方通行のつもりだから、何度転んでも気にはならなかった。

ようやく、暗い空気を朝の光が侵食し始めた頃、愁の裸足は、茶色く冷たい地面の上に立っていた。開けたその場所のあちこちには、側の倉庫が崩れて落ちてきたコンクリートが突き刺さり、荒れた地面は捲れ上がり、大きな窪みが出来ている。

愁はその中央に立ち、全てを狭い視界に入れた後、一気に力を抜いてその場に膝をついた。

乾ききった心に、傷口からの痛みなど、届きはしない。身じろぎ一つせず、虚ろな瞳で少し向こうの地面を見つめた。だが、その瞳には何も映らない。黒く乾いた、ただのガラス玉のような瞳。心を映す鏡。そこにもかろうじて時が流れている事を示すように、ゆるく上った薄い朝日が闇に紛れていたその姿を浮かび上がらせ、非情に現実へと引つ張り出す。

やっぱり、ユメじゃなかった。

自分は身体のおちこちを失い、そして、彼女は死んだ。代わりに
なつて、死んだ。

ここに帰ってくれば、まだ夢はあるような気がした。いつものよ
うに笑つて、全部嘘なんだよつて、言つてくれる気がした。

それが、ただの自分の願望にすぎなかつたのだと、無意識に現実
から逃れる術だつたんだと、そう分析する力は最早残つていない。

悲しくはない。苦しくも、辛くもない。なにも無い。進む気も、
逃げる気もない。

自分を責めることも、悲しむ事も、もちろん立ち上ることなん
てできず、ただ止まつたような時だけが過ぎていった。

どれぐらいそうしていたのか、ふいに、小さな音が聞こえている
ことに気が付いた。寂しげで、頼りなげで。いや、音じゃない、声
だ。静まりかえつたこの場でも聞き取るのが困難なほど、それは弱
りきり、霞んでいる。今にも消えてしまいそうな声。

少し離れた瓦礫の中、はつきりとはしないが、そこから聞こえて
いる気がする。あまりにも孤独で、それでいて誰かを呼んでいる。
それに引き寄せられるように、愁はその方向へ向かつた。土の上を
欠けた手足ではつて進み、側へたどり着いたときには、その声は消
えてしまつていた。

瓦礫の中へ腕を差し込み、その手が固い塊の中で柔らかく温かい
ものに触れた。片手に収まるほど小さなそれを、そつと隙間から外
へと引き出し、地面の上へ置く。

小さな小さな、黒い子猫だつた。おちこちの皮膚が焼け爛れ、特
にそれがひどい片耳は折れ曲がつてしまつている。もう鳴くことも
できず、苦しそつに息をしている。

先日の戦闘に巻き込まれたのだということは明らかだつた。その
間に仲間とはぐれたか、もしくは初めから一匹だつたのか。崩れた
瓦礫の中に埋もれて出られなくなつていたのであろう。理由もなく傷
付いたまま、たつた一匹で、ずつとあやつて鳴いていたのであろう
か。来るかも分からない誰かを待つて、鳴き続けていたのであろうか。

何も知らないまま、何の関係も無い戦いに巻き込まれ、誰にも助けられずに、ずっと一匹で。

猫の乾いた毛皮に水滴が落ち、その黒みが増した。それでも動けない小さな身体と、横たえられている土の上に、何滴も何滴も、雫は降ってくる。

愁の目から、涙が溢れた。こみ上げるそれを拭おうともせず、肩を震わせてぼろぼろと泣き続ける。抑えきれない嗚咽が漏れ、左目から零れる涙が、猫の毛皮を濡らしていく。

自分達の戦いで、また命が消えようとしている。もう誰も死なせたくない、もうそんなのは嫌だと、あのとときあれだけ強く思ったのに、今も目の前で小さな命が消えようとしている。手を伸ばせば触れられるのに、助ける事ができない。何一つできない。ただ死んでいくのを見ていることしか出来ない。

「ごめん、ごめん……」

震える声で、謝った。何も出来ない事に対して。何の罪も無い、その小さな命に対して。

今までつまっていたものが、全て溢れ出した。ぎりぎりまでこらえていたものが流れ出し、愁は静かに泣き続けた。

そつと左手でその身体に触れ、かろうじて無事な皮膚を撫でる。その温かさが、いつそう悲しみを助長した。

しかし、その微かな温もりは、すぐに消えようとはしなかった。

弱々しく細い呼吸の中、猫は必死でその命を一秒でも長く引きとめようとしている。

この猫は、生きようとしているんだ。

当たり前のことに、ようやく気付いた。こんなにぼろぼろになっても、死にそうになっても、それでも一生懸命、生きようとしている。こうして息をしているほうが苦しいだろうに、今が一番痛くて辛いだろうに、すぐ側に迫る死に抗い、呼吸をしている。

生きている。この猫はまだ、生きている。

泣いている場合ではない事を知り、その眼から最後の一滴が落ち

ると、愁は決心した。

空っぽの右袖の中に、左手でそっと持ち上げたその小さな身体を入れた。真ん中、肘の部分に持つてきて、袖口を口でくわえる。袋状になったその中、子猫は小さく息づいている。

もう一度はつて松葉杖までたどり着くと、もう使うつもりのなかつたそれで、立ち上がった。刺すような朝日に背を向け、強く歯を食いしばり、地面を踏みしめる。

まだ通りに人は殆どいなかったが、すれ違った者は少なくとも一度は、包帯だらけの少年を振り返った。だが、自ら声をかけるに至る者はおらず、愁も彼らを気に止めはしない。どこにこの猫を連れて行ったらいいんだろう。そこまでは分からないので、一度もとの場所に戻るため、歩く。今度は転ぶ事は許されない。進む際の衝撃も、最低限のものにしなければならぬ。慎重に、だができるだけ早く。

今にも倒れてしまいそうだったが、袖の中にいる猫の重みを実感すると、何も気にせず進む事ができた。なんとしてでも、この命だけは、見捨てたくない。

最後の角までやってきたとき、そこから人影が飛び出してきた。そしてすぐ側で立ち止まると、驚いた顔でじつと愁の方を見て呟く。「……愁、どうして……」

途端、足の力が抜け、愁はその場に倒れこみ膝をついた。慌てて、高梨がそのまま前のめりに倒れそうな身体を支える。

「なにしてたんだ。どこに行ってた」

袖を口で啜えたまま、血の気のない顔で高梨を見上げる。

「土だらけじゃないか。ほら、傷口から血も……。まさか、あそこまで行ってたのか」

あそこ、というのは曖昧だが、彼の言いたいことはよく分かったので、小さく頷いた。呆れたような困惑したような表情で、

「どうして、そんな……」

と、彼が言いかけたとき、

「この馬鹿野郎！」

という大声が振ってきた。振り向いた高梨が、片手で愁を支え、咄嗟に背中にかばう。

「やめるよ！今殴ったりしたら……」

「うるせえ！」

相手の声を遮って、四万が肩で息をしながら立っていた。走ってここまで来たからなのか。ただ感情が荒くなっているからだけではないだろう。

「勝手に抜け出しやがって！お前これ以上血流したら死んじまうんだぞ！」

「落ち着け、四万」

怒鳴りつける四万を、彼の後ろからやってきた明日香がなだめた。彼女の方を振り返し、「わかってる」と頷くその眼を見て、四万はなんとか落ち着こうと、握り締めた拳をようやくほどいた。

「もういい、話は後だ。とにかく戻るぞ」

そう言っただけ片手を愁の左手に差し出したが、予想に反してその手は伸ばされず、そこでやっと、四万は反対側の右袖に意識を向けた。肘の辺りが、やけに重たげに垂れ下がっている。その視線に気付いた愁がその中に左手を差し入れ、ようやく口を離した。

袖の中から取り出され、コンクリートの上に置かれたものを見たとき、全員思わず言葉を失った。ぼろぼろの黒い子猫は、まだ微かに息をしている。

「この猫、拾ってきたのか。あそこで」

始めに明日香が口を開き、愁は黙って小さく頷いた。

「なにやってんだよ！」

四万が、再び声を荒げる。

「さんざん人に心配かけて、あげくに猫なんか拾ってきやがって！お前今自分がどういう状況なのか分かってんのか！」

「ごめんなさい……」

ポツリと呟いたその左袖を乱暴につかみ、

「ほら、さつさと行くぞ」

無理矢理引つ張り、引き上げようとした。しかし愁は、座り込んだまま少しも動こうとしない。「おい！」と四万が怒鳴りつけると、疲れきつてはいるが、その瞳で真っ直ぐに見上げた。

「お願いします、この猫、病院に連れて行ってあげてください」

突然の言葉に、意味が分からないといった顔で、四万が手を離れた。その左手を地に着き、彼らを見上げる。

「このままだと、もうすぐ死んじゃうんです。でもまだ、この猫、一生懸命生きてるんです。だから……」

「愁、死にそうなのは自分も同じなんだよ。分かってる？」

穏やかだが責めているみたいな声で、諭すように高梨が告げた。唇を噛み締め、愁はうつむいて猫を見下ろす。しかしその小さな身体を目にすると、諦め切れなかった。

「僕のことなんか、ここで見捨ててもらって構いません。だけど、この猫だけは……」

ここでこの命を見捨てるほうが、よっぽど辛い。それなら死んだほうがいいと本気で思った。しかし、彼らが見捨てられるような人間でないこともよく知っている。だからこれは、汚い脅迫だとしか映らないだろう。そう解釈されても仕方がない。もし引き換えに、ここで死ぬまでへたばつてると言われればそうするが、しかし、その思いを知らせる術は、口で言うしかない。だから四万に怒鳴られても、俯いてその言葉を身体に染み込ませるようにじつと聞いていた。卑怯な奴だと嫌われるのは泣きたいほど悲しいが、それよりもこの猫に死んでほしくなかった。

ふと、四万を制して明日香が同じ様に正面に地面に膝をつく。俯けていた顔を僅かに上げると、彼女の瞳が愁の瞳を覗き込んだ。愁も、目を逸らさないよう、じつと同じ様に見つめ返す。ふ、と明日香は張り詰めていた力を抜いた。

「分かった。この猫は私がどうにかする」

その台詞に、四万も高梨も、愁までもが驚きを顔にする。

「だからあなたは、ちゃんと他の言う事聞いて大人しくしときな」
優しげな声で、明日香がはっきりとそう告げた。

一瞬だけ表情に安堵を示した後微かに口を動かしたが、そのまま
愁は瞼を閉じ、猫の横に倒れこんだ。

16 届かない猫の祈り

「ところで、きみはこれからどうするんだ」

「取り合えず、そろそろここから離れようかなと」

シオンの仲間の情報によると、政府の方も本格的に動き出したらしい。この辺りでも、それと思われる人間を見かけたと言っている。唯一助けになったのは、自分の他に残っている対象者は、あと一人のところまで迫っているらしい。つまり、その誰かが捕まるまで逃げ延びればいいのだ。

「そうか。彼らを巻き込まない為には、もう潮時かもな」

「ですね。一度出たら、今度はとにかくここから離れないと」

「当てるはあるのか」

「あるわけ無いですよ」

「じゃあどうするんだ」

「さあ……。行く場所なんてないし、なるようにしかならないし」
「あ、と猫はため息をついた。呆れた顔で愁を見上げる。

「なるようにしかならないって、そんな考えなしじゃ捕まるぞ」

「じゃあ、志田さん考えてくださいよ」

「なんでそうなる」

笑いながらその黒い額を指でなでると、「やめろ」というように前足でぎゅっと押し返された。

縦長の空は相変わらず高く、青い。緩く流れる風は穏やかで、暑くも寒くもない五月下旬のある日の昼。

「そういえば、もう一匹はどこにいったんだろう。」

そう思った途端、狭い路地裏の少し向こうにある、開け放たれた扉から黒い塊が飛び出し、すぐにそれを追うサラも姿を現した。直線を駆けて来たクロは、地面に座っている愁の身体を、だだつと駆け上り頭にしがみつく。

「クロちゃん、おりてきてよー。なにもしないから」

側までやってきたサラが、猫を見て不満げな声を出した。しかしク口は、ひしと、かじりついたまま動こうとしない。

「なんかやったの」

重い頭を僅かに傾げたが、ク口は頭上でバランスをとってそれでも尚しがみついている。

「あのね、ク口ちゃんのおひげが長いからね、ちよっとひっぱってみたの。そしたら逃げちゃったの」
なるほど。だからこんなにびびってるのか。

猫はかなりひげに敏感な動物らしく、切られでもしたら精神的なショックで死んでしまうものもいるらしい。ただでさえ臆病なク口が、逃げないわけがない。

「サラ、ひげは止めておけ」

「えーなんでー」

「なんでもだ」

妙に神妙な猫の言葉に、痛かったのかなと彼女は尋ねる。

「ク口ちゃんごめんね、もうやんないから」

「ほら、降りろ、ク口。いててて」

爪を立てるク口を両手で無理矢理引き剥がすと、猫はにゃおうと哀れな声で鳴く。しかし、可哀想だが降りてもらおう。びくびくと小さい身体を更に縮めるのを膝に乗せ、柔らかい毛皮をなでた。サラもしゃがみこんで小さな手でそつとなでる。ようやく、何もされない事を知り、ク口は目をぱちぱちさせながら少女を見上げた。つやの良い黒い毛が日の光を浴びて身体に白い筋が幾本か出来ており、サラの手に頭をなでられ、気持ちよさげに目を細めている。

「あ、忘れてた。こっちおいでー、よしよし」

「だから猫じゃないって何度も言ってるだろう。サラ、止める」
触れようとした手を肉球のついた手が押しつけた。諦めずに伸ばすが、するりとその腕を抜ける猫を、サラはしょんぼりと落ち込んだ声と目でじっと眺める。

「志田さん、サラのこときらい？」

「え、いや、別にそういうわけじゃ……」

「だって、いつつも逃げるんだもん。やめるやめろって……」
たちまち少女の大きな瞳が普段以上の潤いを含んでいく。

「あーあ、志田さんが泣かせた」

「泣かせたって、そんな泣くような事じゃ……」

愁がその背をなで、クロが側に寄り添うが、サラの涙は今にもこぼれ落ちそうだ。その上の涙声が見る者の哀れみを誘う。

「おい、泣かなくてもいいから。サラ、泣くな、な？」

「だってえ……」

あたふたと戸惑いながら、明らかに自分が悪者になっていることに気づき、ようやく志田は彼女の側へ寄り、見上げた。

「好きにしていいいから、泣き止んでくれ」

「……ほんとに？」

「ああ」

「おこらない？」

「怒らない」

「ぜったい？」

「絶対だ」

「やったあ！」

「ぐえっ！」

途端、サラは両腕で猫の身体をぎゅっと抱きしめた。力の加減を知らない子どもの強さに、猫は天に前足を伸ばして苦しみを表現している。しかし、それに気づきもしないサラは嬉しそうに飛び上がりながら、さつきとは裏腹の明るい声を上げる。

「うわあ、ふわふわしてるー。やっとだっこできたよー、ねえ！」

「よかったな」

「たすけてく……」

「あつたかーい。クロちゃんとおんなじだー」

猫は強く頬ずりをされながら、分かっているくせに笑ってばかりで助けられない愁を、恨めしそうに眺めた。唯一、同情を含んだ眼で

クロが見上げているが、彼になす術はない。

観念して弛緩した柔らかい身体を、サラはもう一度強く抱きしめた。

17 できることなら、もう一度

悪い予感。幸か不幸か、これが良く当たる。朝、今日一日の運勢は最悪だと宣言されれば、その日に起こるほんの些細な失敗でも、その占いに結び付けてしまう。要は確率の問題なのだが、やっぱり今日は悪い日なんだと、その一日をどこか緊張気味に過ごさなければならなくなったりする。

だからきつと気を持ちようなのだ。悪い予感というのも。

しかし気のせいで片付けるには、少し余りが生じるほど良く当たる。と、愁は自負している。本人としては少しも嬉しくないが。

日が落ちてきて、空が赤みを帯びてきた。今日一日を燃え尽きようとするかのように、強い日光が雲を照らし、地面に長く黒い影を作り出す。その影が長く長く伸びていくのに比例して、その「悪い予感」は、大きくはつきりとその形を成していく。

「あれ、どうしたの？」

「ちよつと……」

サラの方も見ずに、路地の向こうの方を睨んだまま、愁は腰を上げた。クロも、彼女の腕から飛び出して地面に降り立った。夕日を浴び、黒い毛皮が明るいオレンジ色に染まっている。

「家に戻って、しばらく誰も出ない様に伝えておいて」

「やだー、サラもいくー」

「駄目だ」

しばらく聞かなかった、有無を言わせない厳しい声に、サラは思わず息を呑んで愁を見上げた。その目は自分などには向いておらず、夕日とは真逆の影の向かう先をじっと見つめている。普段は見ない冷たい光。

「サラ、戻ろう」

志田が彼女の足元で促した。その蒼い瞳を見下ろしてしびしび頷くと、もう一度彼女は顔を上げた。

「ねえ、愁はどっかいつちゃうの？もうもどつてこないの？」

詳しい事情などはつきりとは理解しきれないが、いつもと違う焦燥を含んだ雰囲気くらいは彼女にも読み取る事ができた。

不安を隠そうともしない真っ直ぐな瞳を振り返り、愁は力を抜いて笑いかけ、

「大丈夫」

いつもと同じ台詞を、いつもと同じ表情で呟く。

「ちょっと気になることがあるだけだから」

「ちょっとだけ」

「そう。僕はすぐに戻ってくるから」

視線を少し下げ、猫が頷くのを見てから、背を向ける前にふと右手を上げようとして、止めた。彼女を安心させるために、その頭を撫でようとしたのだが、急な躊躇いがその行動を制限した。

彼女に触れるには、自分の手はあまりにも汚れすぎているような気がした。人を傷つけるための右手はもちろん、血のにおいと刃物の感触が染み込んだ左手も同じだ。触れた先から、まだ幼いサラにそのにおいが染み付いてしまふ、汚れてしまふ。錯覚であるとは分かっているが、その躊躇は諦めとなり、手の動きを止めた。

不思議そうな顔でそれを見上げていたが、やがてサラはにっこりと笑い、手を振った。中途半端に上げた手のやり場を見つけて、愁も軽く手を振った。

影はどこまでも伸び、やがて一つになって夜の闇をつくりだす。

その生成は、既に終盤を迎え始めていた。

狭い路地裏の闇は特に濃い。そのうえ今日は雲に覆われて月も出ておらず、いつにも増してその濃度は高い。その中の影と影の間を飛び越すようにして、足音も立てず、愁は駆け抜ける。こここの必要としていなかった動きだったが、身体は忠実に覚えてくれていた。後ろを、小さな黒猫が同じ速さで彼の影のようにぴったりついて走ってくる。路地の境目で急に立ち止まると、クロも急ブレー

キをかけて足を止めた。

密度を増す生き物の気配。犬や猫のものとは異なる、間に溶けきれない人の存在。

壁にできるだけ背中を押し付け、息を殺して、僅かにその向こうへ首を向けた。人の影が二つ。離れすぎていて会話は聞き取れない。対策部の人間なら顔を見れば判別できるだろうが、この暗がりの中では、彼らが政府機関の人間なのか、犯罪組織の人間なのか、もしくは予想外れの一般人なのかすら、よく分からない。

向こうの方からもう一人走り寄って来た。合計三人になった彼らは、何か言葉を交わすと、再び三方向に駆け足で散らばる。大の大人がこんなところで夕暮れに鬼ごっこか、かくれんぼか。鬼がいないからどっちも違うか。いや、そんなわけはないから、これで最も望ましかった一般人の線は消えた。

一人がこちらの方へ向くのを察して、愁はもと来た道を駆け出した。走りながら、右腕が微かな月明かりを反射しているのを見て、どうにかしてくるんだったと後悔するが、今更ごまかしようも無く、気配をできるだけ消し、走るのに専念する事にした。

割と離れたところまで入っていたので、往復には思っていた以上に時間はかかった。そして、やはり悪い予感は的中していた。もうこれ以上ここに居るわけにはいかない。

早口で非常に分かりにくい説明だったが、まるでそれが分かっていたかのように、アオイはすぐに外に突っ立ったままの愁にコートを返してくれた。

袖を通して白い手袋をはめ、腕を隠しきった彼に、シオンが鋭い刃の束を突き出した。慣れているはずなのに、左手で受け取ったそれらはやけに冷たく、ここにいてはいけないのだという思いが強まる。それに反発する感情が確かな輪郭を示す前に、素早くそれらを元の場所にしまつと、シオンが両手で持ったものをぐっと突きつけてきた。

「ついでに持ってってくれよ」

「おい、ついでつてなんだ、ついでつて」
差し出されるままに愁が受け取ると、猫はその腕から地面に飛び降りた。

「でも、なんで……」

「邪魔になるのなら諦めるが」

「そうだな、この猫うるさいし」

「シオン、余計な事を言うな」

笑うシオンと迷惑そうな顔をする志田を見て、

「そんなことないですよ」

愁は少し笑って答えた。しかしすぐにその雰囲気消し、真剣さを混めた瞳で、サラとその後ろで彼女の肩に手を置くアオイ、そしてその隣に立つシオンの三人に向き直ると、

「急ですけど、僕はもう行きます。今までありがとうございました」
礼を言つて頭を下げた。

これで、もうここには戻れない。すぐに去らなければならない。もし、もしも自分が無事で、もとの場所に戻れたとしても、二度と来ないほうがいいだろう。自分は本来政府側の人間であり、彼らとは敵対する存在なのだ。

だからこの台詞は言いたくなかった。言えば、二度と会えなくなってしまうのが分かっていたから。彼らのような優しさが、触れられない場所に存在しているのだと知っているだけなのは、きつと悲しい。でも、自分がいつまでもここにいれば、必ず彼らに悪影響を及ぼすことになる。それは予感などでなく、確信できる。だから、もう会わないほうがいいのだ。

そう思つて顔を上げると、きよんとした顔のサラと目が合った。
「愁、またいつちゃうの？」

「うん」

「クロちゃんも、志田さんも？」

名前を呼ばれてクロが鳴き、「ああ」と、もう一匹も返事をした。

「そっかー。じゃあサラ待ってるから、はやくかえってきてね」

「いや、僕はもう……」

言いくそくに困った顔をするのを見上げ、サラは笑う。

「だって、さつき、ぼくはすぐにもどってこるって言ってたよ」

「それは今の事じゃなくて……」

返答に窮する愁を見て、シオンが可笑しそうに笑い声を上げ、アオイも微笑み、何で笑っているのかわからないサラが二人を不思議そうに振り返る。助け舟を出すのかと思いきや、子どものような笑顔でシオンが口を開いた。

「そんなら、戻ってくるんだよな、愁は。なあ」

「それは……」

「なんだよー、おまえ、おれの妹に嘘ついたのか」

「ついてませんよ」

「なら、サラの言ってる事が正しいんだろ」

「……はい」

言いくるめられたようで釈然としないが、ありがたかった。不安だとかなんだとか、そういうものを一瞬だけ忘れて、笑えた。

「元気でね」

アオイが微笑んで言った。

「じゃあな」

「またね」

という似たような言葉をシオンとサラが笑顔で言った。彼らにもう一度頭を下げると、愁は夜闇へ駆けて行った。

この近辺の入り組み具合は、ここしばらくで覚えこんだ。大通りへ抜けるまでに一番距離のある道を選ぶが、時折太めの道を通るようにする。目撃はされやすいが、こちらにはつきりしたと注意を向けさせておけば、相手がわざわざシオンたちの方向へ行き着くことも無いだろう。実際、幾度か相手の目に留まったが、気にせず更に入り組んだ道へと紛れて撒く。

「危険だな、このやり方は」

「一応考えてるんですけどね」

闇の中、二匹の猫の姿は、ともすれば見失ってしまいそうだった。うつすらと暗闇に浮かび上がる首輪と瞳と、絶え間なく響く微かな足音で、なんとかその位置が判別できる。

大分離れたところまで来てペースを落としたが、まだ追いつかれないようで、何の物音も声もしない。路地を出た少し広いアスファルトの道を、塀に沿って歩くが、側に並ぶ民家の明かりも消えていて、耳の痛くなるような静寂が街を包んでいた。

「相手が政府の者だった場合、それは、その、犯罪対策部の人間になるんだな」

「そうですね。僕もちよつと前はやってたから」

「もしそうだった場合、きみはどうするんだ」

塀の上を歩く猫を、一度見上げた。決して大きすぎない声で答える。

「そりゃあ逃げますよ。捕まりたくないし」

「逃げられなかったらどうする」

「向こうがその気なら戦う」

「できるのか」

その意味を理解して、愁は困ったように笑った。自分だって戦いたくはないが、痛いのは嫌だし、捕まったらどうなるか分からない。

「それしかないんだったら、やるしかないじゃないですか」

「とはいっても、仲間だったんだろっ」

「しょうがないですよ」

正直、百パーセントの自信はない。しかし、こう断言しておかなければ、いざというときに迷って何も出来ずにやられてしまう気がした。せめてもの自己暗示。

その心中を察したのかどうなのか、志田は探るように続ける。

「もし、それがきみの兄だったら」

唐突な単語に、一瞬目を丸くしたが、

「……しょうがないですよ」

と同じ言葉を呟いた。

「きつと向こうも同じだろっし」

「でも、兄弟なんだろっ。いざとなったら戦うことなんて出来ないんじゃないか」

「出来ますよ。仕事だから。やれって言われたことはちゃんとやらないといけない」

「逆の立場でも、きみはそうするのか」

「仕事なら、きつと」

今度は、猫の方が目を見張って振り返った。

「仕事仕事って、そこまで大事なものでないだろっに」

「大事ですよ、僕らの唯一の居場所なんだから」

「ああ、僕は過去形だった」と、口元に片手を当て苦々しい顔で愁は呟いた。その動作を、蒼く澄んだ瞳が眺める。

「いくら居場所だからって言っても、いざとなったら出来なくなるものだろっ」

「だから、そうならないように頑張るんですよ。同情しないように、相手が痛いのを想像しないようにして」

「できるものなのか。特に、愁なんか」

「僕だってできますよ。ずっとやってたわけだし」

志田は更に目を見開いて愁を見下ろした。戦っている現場を見たことがないのでなんとも言えないが、この優しくて臆病な少年に、そ

んなことができるとは思えなかった。

「それなら、仕事だっていえれば何だって出来るのか、きみらは」

「だって、やらないといけないから。だから人を殺したことだってありますよ」

「ころし……おい、冗談だろう。いくらなんでもそんな……」

「本当ですよ。それも一回や二回じゃない」

数えたくないけど、と付け足して正確な数は言わなかった。

「相手は殺そうとしてくるんだから、危なくなれば同じ事をしないとこつちが死んじゃう。仕事だからってなんとか割り切ってますけど。まあ、その瞬間は必死で、そんなこと考えてられないんですけどね」

人殺しだなんて、愁には全く似あわない台詞だと志田は思った。こんなことをすらすら言っているのが不思議だった。

「割り切って、人を殺せるのか」

「……まあ、本当に割り切って忘れたりなんかできないけど、しょうがなかったんだって、仕事なんだからって思い込ませないとやっていけませんよ」

「それができなかつたら」

「心が殺せなかつたら、相手に本当に殺されるだけです。もしくは、戦闘能力が欠けていると判断されれば、切り捨てられる」

当たり前のように淡々と告げるのに、恐ろしさというよりも同情を煽られた。彼よりもずっと長く生きてきた筈なのに、自分には無縁だった世界の話。そこは決して、幸せだとは言えない。

「人を殺すのって、本当に嫌な感じですよ。どんなに悪い事をしててもね、大体の人は死ぬ直前に、ただの人間の眼に戻るんです。その瞬間にやっと気付く」

「何に、気付くんだ」

「僕はひどいことしてるんだなって。この人の今まで生きてきた歴史……っていうか、積み重ねっていうか。そういうものを全部壊そうとしてるんだって。それって、ひどいことですよね」

「……でも、向こうも今まで人を殺してきた殺人者なんだろう」
「それが、ただの人の眼に戻るんですよ。よっぽど覚悟してる奴じゃない限り、死にたくないっていう顔になって。それでも、僕はその人をナイフで突き刺すんです」
口調も、声音も変わっていないが、その瞳の奥に、氷のような冷たい光がこもっているのを見つけ、珍しいものを見るように志田はじつとそれを見つめた。それに気付き、愁は軽く頭を振って小さく笑い、いささか慌てながら、猫は前方へ視線を戻す。
「……それぐらいやるのだから、兄弟であつても戦えるというんだな」
「それに向こうは、僕のことを憎んでるって言ってたし」
「憎む、か……」
ふむ、と猫は針金のような細いひげを夜風に揺らし、
「きみは憎んでないのか」
と言いながら振り向いた。「へ？」と、とぼけた声を出した愁に、口を開く。
「きみだつて好きで憎まれるようなことをやったんじゃないだろう。それなのに、憎むまで嫌われるのは少し理不尽じゃないか」
「……そうかな」
「少なくとも、わしはそう思う」
「僕のせいで死んだ人達は、僕らにとってすごく大切な人達だったんですよ」
「そうであつてもだ」
困惑して片手で頭をかく。そんな考えはしたことがなかったので、すぐにはよく分からない。
「二度目のときなんかは、きみも手足を失くしたんだろう。それで幾らか許してもらえてもいいんじゃないか」
「いや……。そんなわけにはいかない。だって、最初の切り込み役は僕のはずだったんだし。それを勝手に破つたんだから、僕の責任だ」

「でも、強引に破つたのはきみじゃないんだろう」

「止めなかったのは自分のせいだし、それで勝手に怪我したんだし」
苦笑しながら塀の上の猫を見上げた。

「もうね、周りからすごい非難でしたよ。またやったのか馬鹿だお前はって。もう駄目だって自分でも思ったんですけど、なんとかもう一度戦うってことで、おさめてもらってたんですよ」

「……簡単にはいかないものなんだな」

「だから憎まれてもしょうがない。それに、昔から守ってもらってたんです。僕が憎む理由も資格もあるわけじゃないですか」

「そうか……」

どうも感覚が少し違うらしい、と、志田は軽く首を傾げた。影響されやすい子供ならまだしも、きっと自分には一生納得出来ないだろう。

何故か殺すとか憎むだとか、最初に話題を振ったのは自分だが、予想以上に物騒な話になってしまった。あまりよい傾向ではない。だから、少し方向を変えることにした。

「なら、もしもの話だ。もし、きみの兄が許してくれれば、きみはどうする」

「どうするって」

「例えば、そうだな。また軽口を言えるようになりたいとか」

「そういうこと」と呟いて、しばらく悩んだ後、にっと恥ずかしそうに笑った。

「また、名前呼んでくれるだけでいい」

「名前？」

「片岡愁っていう言葉じゃなくて、ちっちゃかったときみたいに、愁って兄弟として呼んでくれれば」

「そんなのでいいのか」

「僕はそれでじゅうぶ……」

突然、はっと足を止めて口を閉じた。塀の切れ目、曲がり角の手前で、そこから先に行こうとはせず、即座に塀に背をつける。

「なんだ、どうし……」

人差し指を立て、同じ様に立ち止まった猫に「静かに」と合図すると、角を左へ曲がった向こうを眼で示した。身をできる限り伏せて塀の上から猫がそっと覗くと、左へ折れて少し行った所に一つの人影が見えた。背を向けているので顔はよく分からないが、背格好からして男だ。顔がよく見えないほど離れているとはいえ、このまま知らんふりをして直進すれば必ず見つかる。

愁は人より視覚も聴覚も半分しかない分、空気を感じ取ることは長けている。だからなんとかこの気配に気付けたのだが、一体どう対処すればいいのか、分からなかった。

どうする、戻るか？相手がただの一般人である可能性もあるが、接近しないに越した事はない。どちらにしても、こんな夜の何も無い道で立ち止まっている人間自体普通ではなさそうだし、進めないのなら戻るしかない。

首を一度横に振ってその意を示すと、足音を忍ばせて一歩後ずさった。さいわい、後ろからの気配は無い。前を向いたまま一歩ずつ地面を踏みしめて後退する。落ち着け、と自分に言い聞かせた。まだ見つかつてはいない、大丈夫だ、と。

どのみちいつかは見つかるのだ。そう割り切れるほどに追い詰められてはおらず、なんとか相手の気配を探りながら、左手を壁に添えてその場から離れる。いっそも考えずに脚力と持久力に持ち越してしまえなどという向こう見ずな気持ちをしたしなめ、神経を張り詰める。

幾らかそこから離れ、ようやく後ろを確認するべく振り返った。

誰もいない暗い夜道が、街灯の中にぼんやりと浮かび上がっている。

一度だけ安堵の息をついた。と同時に、

「愁！走れ！」

志田が大声をあげ、先程まで微風程度にしか感じていなかった気配が、急速に膨れ上がり突如として迫ってきた。言われたとおりに走れるほど、距離は残っていなかった。

全力に近いだろうと思われる速度で現れた彼が、襟首を掴もうと伸ばした手を、なんとか体を左へ傾けて避けた。襟元とその指先が擦れて微かな音が生まれる。

左足に体重をかけたまま右足で蹴ろうとしたが、避けられた。そのまま一回転して再び同じほうを向きながら、相手の左拳を右手で受け止める。

左利きかなどと、どうでもいいことを一瞬考え、握力に任せて骨が折れない程度に相手の手を強く握り、反対の手でがら空きの鳩尾を狙ったが、やはり向こうの判断も早い。僅かに身をそらされ、その手は空を切った。前方に体重移動をして前のめりになった前頭部

を蹴られそうになり、ぱつと右手を離して地面へ飛び込んだ。相手の片足をくぐつて一度地面を転がり、振り向く。なんとか間合いを取ろうとするが、なかなか許してくれない。

左利きだからなんかじゃない。それにはすぐに気付いた。相手はこちらの右側へ常に回りこもうとしている。何故か。それは、愁が右方向からの攻撃に気付きにくいという事を知っているからだ。始めのときも、殴りかかってくればいいようなものを、掴んで捕まえようとした。どうして。それは人違いという可能性をゼロにするためだ。間違えようは無いだろうし、確信していたとしても、もしものことを考えておかなければならない。

フリークスなんかがそんな面倒な事をするとは思えない。総じて彼は政府側の人間だ。しかし今晩は曇っていて特に暗い。それには、相手が誰かなんて確認する余裕も無い。

ほんの少し広めに間が開いたとき、愁は駆け出した。もちろん足音も迫ってくる。

「撒くのか」

「ここから離れるだけです」

塀の上でついてくる猫が訊ねた。その前を、クロが疾走する。

相手は自分のことを知っているようだが、自分も向こうのことを少しは知っている。大抵、目標確認の後は、合図をして応援を呼ぶ複数で一人を追う場合、そのほうが遥かに確実だからだ。それ故に見つかってから同じ場所に停滞するわけにはいかない。上手く包囲されてからでは遅すぎるのだ。

流星にバテる様子は無いが、こう走り続けているわけにも行かない。一人が二人になったら面倒だ。不自然にならない程度に速度を緩め、迫る足音に集中して距離を測る。

今だ、と足を地面に押し付け逆方向に蹴りだしながら、止まりきれない相手を強く殴りつけた。

「つつ……」

苦しそうな声を漏らしながらも、受身を取って仰向けに倒れこんだ

相手が体勢を立て直す前に、次は昏倒させる為に握った左手を振り上げる。

しかしそのチャンスが過ぎていくに従って手の力は抜けていき、ほんの微かな月明かりと遠くの街灯が放つ光を頼りに、相手の顔を見下ろしながら愁は目を見開いた。が、その表情もすぐに崩れ、泣き出しそうな、悔しげな顔で、固く結んでいた口を僅かに開き、今にも潰れて消え入りそうな声を押し出す。

「しまさ……」

最後まで言い切らないうちに、胸の辺りを思い切り蹴り飛ばされた。油断しきっていた身体がアスファルトに倒れ、瞬時に両手を地に置いて顔を上げる。

相手が宙に放ったと思える砂塵が、視界を悪くしていた。

はっとしてその場から飛びのいた途端、彼はそれを吹き付けた。ごうと耳慣れない音を立てて空気が焼け、短い炎が砂を焼き尽くしながら紅蓮の尾を引く。

視界を鮮やかに染める炎が消えたとき、その先にはただ漆黒の夜道が続いているだけだった。

『できるわけねーだろが！』

無線機を通じてヘッドホンから聞こえる、威勢のいいその声に、高梨は少し安堵した。

『敵を見るときの目ってあるだろ。俺もまだそれならいけそうだったんだ。けどよ、いきなり泣きそうになって名前呼ぼうとすんだぜ。それで俺はどうしたと思う。蹴っ飛ばしたんだよ、そのうえ火までかけたんだ！あとちょっとタイミングがずれてたら、俺は、あいつを、殺し……』

「四万、もういいよ。取り合えず、落ち着け」

『……ああ、悪い』

トーンを落とした声が返ってきた。それに、冷静さを保った声で返す。

「とにかく、生きていることは分かったんだ。引き続き対象者と並行して捜索を行うことになってる。犯行予告によると、そいつがこの付近にいることは間違いない」

「ふざけやがって」と小声で四万が毒づくのを黙殺した。彼の意見は最もだが、今はそれを言っていてはきりがない。

「今、渡部^{わたべ}たちがそっちに向かつてる。合流するまでそこで待っててくれ」

彼が承諾するのを聞いて、通信を切った。

通信の中継点である五階建てのビルの屋上には、巨大な暗闇が横たわっている。今日は際立って闇が濃く、懐中電灯は主要な光源にはなっているが、とてもそれらを拭い去る事はできない。

四万がこつも怒るのも無理はない。対象者を追えばいいだけの話だし、愁が行方をくらましたのも、至極当然の事だ。それなのに、体裁というものはよつぽど崇高なもののように、こんな無意味な状況が出来上がってしまった。本当に馬鹿みたいな話だ。しかし、それが命令なのだから従うしかない。

自分はその場にいるわけではないが、四万の側、現場にいる方はよつぽど辛く危険だろう。それでもやらなければならぬのだ。ただひたすら、言われた事を。例えそれが間違っていると思っても、上の人間が正しいと判断すれば、暗黙の内にそれは真実だとみなされる。それに下の人間はくつついていくしかないのだ。どんな命令であっても、言われたとおりに自ら手を汚して、自分を殺して生きていくしかない。

ちよつと休憩などと言って、通りの自販機まで出て行った仲間を、高梨は屋上から眺めたが、見る限り、特に疲弊している様子はない。これから本番なのだし、今からバテられては困るのだが。

彼が、路地裏から飛び出した、多分猫であろう小動物に驚いて跳び退るのに苦笑して、コードの絡まる機械へと指を伸ばした。

どこかはよく思い出せないが、見覚えのある風景。その中にあるビルの裏手の壁に背中を預け、ようやく一人と二匹は一息ついた。

「流星にここまでくれば、すぐには追いつけないだろう」

そう足元で猫が言った。その側で、クロが激しく耳の裏を後足で掻きながら青いリボンを揺らしている。立ったまま大きく呼吸をする愁には、志田の言葉は殆ど耳に入ってこなかった。

仲間の、あんな目を見たのは始めてだった。いや、仕事中はほぼ全員があのような目をしている。空っぽで無感情だが、それでいて強い殺気を孕んでいる、敵を見るときの眼。きっと自分もしているはずの瞳。ただ、それを彼らから直接向けられたことは未だかつて無かった。今まで見られなかったものが、今になって突きつけられる、それが意味していることが、嫌でも重く染み込んできた。

だが、今更どうしようもない。これ以上、逃げること以外にどうしたらいいのかは分からない。

「どうする。少し休むか」

「……いえ、もっと離れたほうがいいですね。一定の距離を置いて潜んでいるはずだから、よっぽど遠くに行かないと安全だとはいえない」

「そうか。そうは言っても、だいぶ疲れているみたいだぞ」

「クロが」

「いや、きみのことだ。そういえば、前に怪我していたみたいだが、あれはどうなったんだ」

「瞬きよとんとしたが、すぐに少しだけ笑う。」

「ちゃんと治ったし、これだけで疲れるほど弱くないですよ」

「じゃあ、気のせいなのか」

「気のせい気のせい」

そういう表情をしていたのだろうか、身体自体はまだ平気だ。だが

ら笑ってその言葉を否定すると、細い道の先に目をやり、早足で進み始めた。

「戦え、なかつたな」

「次はちゃんとやります」

そう、向こうも本気なのだからこつちも全力でいかなければならぬ。できるできないの問題ではないのだ。冷気にあてられた様に、すつと心が冷えていく。

「志田さん」

呟くと、「なんだ」と猫が足元で返事をした。

「さつき、僕はどんな眼をしていましたか」

「眼？」

軽く首を傾げて、さつきというのが何時いつのことか考えていたが、やがて迷いながら見上げた。

「なんとというか、鋭い……けど空虚な、よく分からない感じだった。ただ、今とは違う」

猫の碧眼がじつと自分の瞳を覗き込んでいるのを振り返り、愁は足を止めた。

出会った時と変わらない、穏やかな瞳だったが、それでも志田は疑問に思う。いつも、愁はちょっと笑っているような優しい表情をしている。だが、敏感な猫の感覚では、それを見ていると何故だか少しだけ哀しくなってくる。どこか寂しげで、黒い瞳には更に濃い翳りが霞んでいる。無意識的なものだろうし、ただ黙ってじつと眺めていると感じるほどのものだから、周囲の人間は気付けないのかも知れないが。

「なら、よかつた」

よかつたという割に嬉しそうではないが、安堵したように愁はそう言った。

「実を言うと、きみもよく分からないがな」

「え？」

「今みたくないいつもの顔と、今日の昼に笑っていたときのものと、

先程のように戦うときの目と。あと、ただ空を眺めているときのきみと。いつもどこか違う。一体どれが本当の愁なんだ」

まるで別人のようになってしまっ、似て非なる瞳の変化を志田は問いかけた。一体いつ、片岡愁という人間として存在しているのかが、彼には分からない。

「ああ」と言葉にならない声を漏らして、納得したように愁は小さく頷いた。

「わしには分からん」

「安心してくださいよ」

そして、幼い子供じみた顔で笑う。

「僕にもよく分からないから」

「なんだそれは」

呆れた声を出し、猫は長い尾をゆるやかに振りながら、再びコート
の細い背中について歩き出した。

「本当のつて言っても、全部僕であることには間違いない」

「それはそうだが。……まあ、そうだな」

「でしょ」

「じゃあ言い方を変えよう」

猫の咳払いという珍しいものが聞こえ、足元を跳ねるようにしてク
ロがついてくる。両側をビルに挟まれた路地裏は長い。

「一番素直なときっていうのはどれだ」

「すなお？いつでも自分に正直に生きてますよ」

「おい、さつきと言ってることが矛盾してるぞ」

「嘘だから」

「嘘つくタイミングか、これは」

状況に似合わず可笑しそうに笑う愁を、真面目になれとでも言いたげに、志田は上目遣いに見上げた。やっと一息ついて笑うのを止めると、愁は黒猫を見下ろした。

「でも、普段は割と素直になってるつもりですけど」

「矛盾してないか」

「本心と矛盾してるのはだいたい仕事のとぎぐらい。でもねえ、戦いたくないって言っても、ずっとじってしても不安になってきたりするから、本心もあるのかもしれないし。嫌だなあ、こんな生き物」

軽い調子でふざけているようにも見える。ますます猫の目が疑わしげなものになっていくのに気づき、ようやく愁は真面目に答えることにした。

「嘘も多いですよ、ほんと。取りたくもない態度とったりするし。でも、普段はつかないようにしてるし、笑ってるのは嘘じゃないですよ。誰かと話すのは嫌いじゃない。これは嘘じゃない」

「なんかよく分からなくなってきた」と呟いて、黙って話を聞いている猫をもう一度見下ろした。

「まあ言ってみれば、本心だけの本当の僕なんていないのかもしれないし、これもひっくるめて全部僕だ。……これでいいじゃないですか」

納得したようなそうでないような微妙な表情で、猫は返事をした。結局答えにはなっていないが。

「こつこつ話好きですね」

「どつこつ話だ」

「心理的っていうか形がないっていうか。混乱するよつな」

「そつこつのは嫌いか」

「嫌いじゃないけど」

「……心配になるからだろうな、きみといると」

「どつこつ意味ですか」

気の抜けた、あまりにも普通すぎる声と表情で、愁は振り向いた。地面より少し上で揺れるコート裾に触れる位置関係で、青いリボンの小さな黒猫が同じ様に首を曲げる。

「きみがそんなだからだ」

「そんなくて、何かしましたか」

「こどもっぽい」

「そんな扱いたないでくださいよ。ていうか、それほどじゃないと思っ」

「クロくんとの間柄や……考え方がな」

「僕は昔から動物好きだし。考え方違っていても、普通じゃないですか」

「なんとなく。なんだ、きみの兄には名前を言って欲しいだったか」

「これ、そんなこともっばいかな」

「なあクロ」と、言葉にならない同意を求めると、ようやく名前を呼ばれて嬉しそうにクロは鳴いた。

「五割が見た目だがな」

「どうしようもないですよ、それ」

「身長は伸びないのか」

「……僕が知りたい」

直球ストレートの答えのない質問。猫から見ても、平均未満の低身長はばれていたらしい。

「まあ、総合して心配になるわけだ」

どこか寂しそうだから、という大もとの理由は言わなかった。ただの感覚であるだけなのに、必要以上に気に病ませる事を言うほど、彼は愚かではなかった。

「なんだかんだ言っても、かつては人の親だったしな」

「猫じゃなくて」

「おい」

続けた台詞のその先は知っているので、笑いながらかかんで軽くその額を右手で撫でた。感触は感じられなくとも、その毛皮が柔らかく温かなことはよく分かる。猫の眉間に寄せられた皺を軽く伸ばすと、手を離れた。

「怒ると、皺が増えますよ」

「構わん。元の体よりは半分少ない」

そう言いながら、がりがりした後足で耳の後ろを掻くのも、時が立つ

ごとに猫じみて上手くなつていつている。雲の切れ目から僅かに差し込む月光に照らされて、二匹の黒い毛は濡れているように微かに光っている。

すぐに前進を再開し、何気ない独り言のように、正面を向いたまま愁が呟いた。

「志田さんだつたらなあ」

「なにがだ」

退屈な猫はすぐに返事をした。

「いや、志田さんみたいな親だつたらつて思っただけ」

そう言つて、驚いたような顔と目を合わせた。両親がどんな人間なのかなんてまるで知らないが、きつと彼のような人間ではないだろう。逆に言えば、志田が我が子を捨てるような人間だつたとも思えない。青い目が数度瞬く。

「いきなり何を言うのかと思えば。……よく平気でそんなことが言えるな」

「不謹慎ですかね」

「そういう意味ではないが。よく恥らいなく面と向かつて言えるなつてことだ」

「恥ずかしい？なんで」

「なんでと言われても答えにくい……。何故だかこっちが照れてしまつ」

特に照れているようなそぶりはないが、自分で言うからにはそうなのだろう。気のせいか、少し喜んでいるようにも見える。

そういえば、この猫。いや、人が笑っているのはあまり見たことがないな、と愁は思った。どうしても人より表情が乏しくなつてしまふ為、気付いていないだけなのかもしれないが。

「猫が親だつたらきみも困るだろう。いや、わしは猫じゃないぞ」

「知つてるつて。この際、姿が猫でも犬でもいいですよ」

「いいわけあるか。やっぱり人間の方がいいだろう」

「志田さん人間じゃないんですか」

「人間だ。わしが言ってるのは外見の話で、中身は一人人としての人間だぞ」

「なら十分ですよ」

何が十分なんだと、いつになく勢い込んで喋るのを見下ろして愁は笑った。自分はただ思ったことを言っただけだし、それに真面目に取り合ってくれるのが嬉しかった。冷え切った心を裏返して笑った。

意外にも、想像していたよりは平気そうだ。かつての同僚と戦う羽目になって、余程落ち込んでいるだろうと思いきや、話し方に特にそんな気は見られない。黙っていると、どこか必要以上に遠くを見ているようだが、きっとそれは憔悴の兆しだろうと思う。仕方のないことだ。足下から様子を伺いながら、志田はそう結論付けた。それが正しいのか間違っているのか、知る術は今はまだない。

一人と二匹は、暗い住宅地を疾走する。耳を澄まさずとも、後ろから迫る複数の足音は響いてくる。反応を見る限り、政府の人間ではない。

逃げ切れるなんて思っていない。ただ、何もしないでいるのに耐えられないから、逃げているだけ。前を見据える愁の頬を、疲れからでも暑さからでもない汗が一滴伝った。

世の中に不満があるなんていえば格好はつくが、ただ適応しようという努力を怠ってどこにも向けようのない不満をぶちかましたがつている若者。いわゆる不良少年、ちんぴら。一人一人は別に大したことはないし、「フリークス」だといっても末端すぎて、対策部は相手にしていない。

だが、数が集まれば話は別だ。極端な例で言うと、一対百で一が勝てるか。昔の中国の武将にはそんなことが可能だった人もいた。みただが、これもまた別問題。無理だ。少なくとも愁には。

この辺りは、彼らの縄張りだったようで、角を曲がるうとするたび、それらしき人物の姿が視界に映り、仕方なく方向転換を繰り返している。正規の機関ほど統率力はないとしても、時間と比例して人数は増えていくだろう。

いつもどおり、まこうとしたが、遅すぎたようだ。曲がっても進んでも敵の姿は目に入る。

「四面楚歌」と足元で不吉な言葉を呟くのが聞こえたが、反応す

る余裕がない。ようやく誰もいない角を曲がり、足音をやり過ごして息をついた。

「行つたみたいだぞ」

向こうを覗きながら猫が言い、愁は辺りを見渡した。なんとか逃げる事しか考えていなかったのによくは分からなかったが、どこかで見たことのある風景。住宅地の景色なんてどこも似た様なものだが、それでも見覚えがある。側でクロが小さく鳴いた。

突然、遠くから自分を呼ぶ声が出て、愁とついでに志田もびくりと反応し、思わず硬直する。そして恐る恐る振り向くのも同時だった。

向こうの街灯の下にたたずんでいる影が、呼んだらしい。逆光で顔はよく見えないが、愁とあまり変わらない背格好をしている。その様子と、ついさつき耳にした声とを照らし合わせて、愁はたった一つだけ思いついた名前を呟いた。

「祐輔……」

そうだ、ここは水野家のご近所だ。彼の家とは少し離れていたから全く分からなかったが。敵ではなかったことを知り、安堵して少し力を抜いた。

「何してんだよ。……こんな夜中に」

問いかけると、

「愁こそ、こんなどこに何しに来たんだよ」

そう祐輔が返した、敵意のない声が、妙に懐かしい。

気を使つてか、口を開かずただ黙って愁を見上げる志田を見下ろし軽く頷くと、愁は祐輔の立つ方へゆっくり歩き出した。

「もう日付変わつてんだぜ。……いくら俺でも入れてやんねえからな」

彼にしては元気がないが、特に気に止めはしなかった。眠いからだろう、ぐらいにしか思わなかった。

「入れてくれなんて言つてないよ」

「なら、帰れよ」

俯き気味だった顔を僅かに上げ、祐輔は短く告げる。「本当に……」
と続けようとする彼に、歩きながら愁は不思議そうな顔をした。

「何で、こんなとこに来たんだよ……」

そう言った途端、愁の右方向に位置する民家の庭から、開いたままの門を突っ切って、人型の影が飛び出してきた。

頭と背を強く塀に打ちつけた衝撃で、一瞬息が止まった。足が、地面についていない。目の前にいるのは、知らない人間。

飛び出してきたままの勢いで、男は愁の首を右手で掴み、向かいの壁に叩きつけた。そのまま力任せに右手で気道と頸動脈を圧迫し続ける。男の指が、細い首に食い込み、締め付ける。

何が起きたのか分からず、反応が遅れてしまった。油断大敵の重要性なんて、よく知ってるはずなのに。自分の首を絞める手を引き剥がそうと、愁は必死で相手の腕を掴んだ。しかし、脳に酸素がまわらなくなり、思うように力が入ってくれない。生身の左手はおろか、それよりはるかに強いはずの右手でさえ、男の腕をかする程度にししか動いてくれない。

「が……あ……」

急速に周囲の音が遠ざかり、頭を強く締め付けられるような感覚。手足が痺れを訴え、動く事を拒否する。

なんとか視線だけを動かして、相手の肩越しにその姿をとらえた。側にいる見慣れない男が何か話しているが、彼の耳には入っていないようで、目もくれていない。

祐輔は、普段滅多に見せない怯えた表情のまま、目を見開いてこちらを凝視していた。そしてその顔が、彼らの間にあっただであろう取引の全てを教えてくれた。

そっか。恐いもんな。

納得した途端、薄れいく意識が限界を告げ、何も無い恐ろしく真っ暗な景色が全てを支配していく。だらりと、かろうじて相手の腕にかけていた右手が身体の横に垂れ下がった。抵抗する術を失った愁の黒い空っぽの瞳には、ただ自分を殺さんとする者だけが映った。

突然、シャアツと言う声と共に、黒い塊がその視界を横切り、それに噛み付かれた男が短く声をあげた。青い首輪と青い瞳の黒猫を右腕にぶら下げ、彼は思わず腕の力を抜く。同時に、殆ど残っていない力を総動員して、宙に浮いた両足を曲げると、愁は思い切り相手の腹を蹴りつけた。首もとの手が離れ、支えを失った身体はそのままコンクリートの地面に墜落し、すぐには動けない身体を抱えて地面に蹲った彼の側へ、不安そうに鳴きながら青いリボンをした小さな黒猫が寄り添った。

懸命に酸素を取り入れるが、なかなか思うように身体が動いてくれない。地面を見つめ、手をついたまま、背を大きく上下させてただ呼吸をする。鼓動の音が身体の奥底から響く。頭が割れるように痛い。

逃げろという意味に従い、なんとか首を曲げて視線を横に向けると、男に振り払われた志田が、猫らしく見事に着地するところだった。その向こうにいるまた別の誰かが構えている物を霞んだ思考で認識し、立ち上がる決心を固め、足に力を入れる。このままじゃ射殺は免れない。

よろけながらも立ち上がり、痺れた左足で地面を蹴ってふらつく右足を踏み出した。「止まれ！」という、いつか自分が彼らに言ったような言葉が聞こえた瞬間、右足首に衝撃が走り、前のめりに倒れかける。両手を伸ばして地面を掴むと、前方へ跳びながら前転の要領で転がった。倒れていたら横腹にめり込んでいたであろう銃弾が、腹と地面の間を駆けてその先の壁に激突する。

止まらずに数歩駆け、僅かについた勢いで飛び上がり、塀の上を手をつく。足元で鉛玉が爆ぜたときには、塀の上に身体を浮き上げさせ、彼は一瞬だけ振り返った。

畏怖と驚愕で大きく目を見開いた祐輔と目が合った瞬間、愁の姿は塀の向こうに消えた。

20-2 信じる果てに

見知らぬ家の庭を突っ切り、再び塀を乗り越えて通路に下りたとき、ようやく愁は息をついた。それでも足は止めずに、ひたすら前を見つめて早足で進み続ける。

「知り合いだったのか」

「ともだち、です。小学校からの……」

振り向かず愁は答え、その横顔を塀の上から志田は眺めた。後ろを、とことこクロがついてくる。

眼前に現れる人間全てが敵にまわる状況で、愁は彼に近づいた。その根底にあったのが信頼であるならば、それは先程見事に裏切られたのだ。だが、こんなとき、何と言葉をかけたらいいのか分からず、猫はただ黙って同じ速度で進む。

「……彼も、脅されていたのだろう」

ようやくそうフォローを入れ、そんな分りきったことしか言えない自分が情けなかった。「大丈夫か」なんてこと、聞けるわけがない。

しかし、愁は顔をあげ、その心の底を読み取ったかのように、

「僕なら、大丈夫ですよ」

そう言っ予想通りに笑った。

その目は笑っているがどこか空っぽで、とても大丈夫そうには見えないが、本人がそう言っているのだから否定するわけにもいかない。その表情が見たくないから、言わなかったのに。

そして僅か数分後には、再び複数の足音から逃げていた。最早逃げ切れないというのは暗黙の了解であったが、言葉にすれば確実に実現してしまいそうで、志田も愁もそんなことは言わない。

どうして逃げてるんだろう。

走りながら、愁は幾度目かの自問をした。答えはとっくに分かりきっている。自分に、止まって捕まる勇気がないからだ。ここで全

てを諦めれば、半端な自分を自分が許せなくなる。死んでも死に切れない。それが恐くて、逃げるしかないのだ。最果ては同じでも、逃げて逃げたその先の、仕方のない結果ならば、きつとそう思うこともない。例えそこで死ぬのだとしても。死にたいとは思わない。しかし、自分には生きる理由もない。僅かに死の恐怖の方が勝っているから、逃げていくだけだ。

こんなこと、志田やシオンに言えるわけがなかった。危険を承知で手を伸ばしてくれた彼らに、何故そんなことが言えるだろうか。

だから、人気のない通路で遠ざかる足音を聞きながら、愁は代わりに別のことを呟いた。

「どこに、逃げたらいいんだろう」

辺りの気配を感じ取っていた猫が振り向く。

「逃げる当てはないって言ったのは、きみだろう」

「……そうですね」

虚無をたたえた黒い左目は、その先に「逃げ場」でもあるかのよう
に、遠くを見つめていた。そして彼をその場に繋ぎ止めようとする
かのように、クロがその足に頭をこすり付ける。

「大丈夫だ、きつとどこかに抜け道がある」

勇気付けるように、しっかりと声で猫が告げ、その諦めない言葉
は、愁にありがたさと罪悪感を与える。

そして、見下ろすその微かな笑顔は、志田に少しの安堵をもたら
した。もしも本当に崩れてしまう直前ならば、もう笑うこともでき
ないだろうし、少年の過去の話を聞けば、そう簡単に折れることも
なさそうだ。まだ大丈夫だと、猫は判断した。

「なら、わしは向こうの様子を見てこよう」

猫が怪しまれる事はない。そう提案した志田に愁が頷くと、猫は身
を翻してあつという間に闇の中へ溶け込んでいった。ちらちらと揺
れる尾が、やがて見えなくなった。

21 失うこと

出せる限りの速さで、地面を蹴り、駆ける。これまでにない短距離から、荒々しい怒声と足で地を打つ音が聞こえる。ダメだと弱気になる部分を叱咤して、駆け続けた。身体の奥から、心臓の音がうるさいくらいに響いてくる。

突然、脇の路地から飛び出してきた男に体当たりをくらわされ、バランスを失い、愁は地面に転倒した。倒れながら取り出した刃を右手の指に挟み、倒れた直後に左手で地面を押して起き上がりながら、狙いを定めて小さく振りかぶる。

予想外の方向から闇を裂いた銃弾がその右手を弾き、まるで見当違いの場所に鋭い刃が突き刺さった。次を取り出す前に、固い拳で側頭部を殴られ、肩を蹴られた。低い視界に、自分の周囲にある幾本もの足が映ったと思うと、ぐんと普段よりも高い位置に視線が上がる。

「手間かけさせやがって、このガキ！」
愁の胸倉を掴んでいる若い男が、そう悪態をつきながら反対の手で頬を殴りつけた。強い衝撃が走り、鈍い痛みとともに口内にできた傷口から血が滲む。腹いせのように彼が殴る度、血が広がり、痛みが、疲弊しきってばやけた思考を貫く。

ようやく相手が手を緩め、力の抜けた身体が地面にくずおれた。俯き、荒く呼吸をしながら血を地面に垂らしている愁の側に、どこからか現れた小さな猫が駆け寄り、不安げにその顔を覗き込む。透き通った緑色の瞳に、赤い線の伝った苦しげな顔が映りこんだ。が、「おい、なんだこいつ」という声と共に、猫の視界を灰色のコンクリートと見知らぬ人間の足だけが占めた。後ろ足一本を掴まれ宙吊りになったクロが必死の抵抗を試みるが、効果は得られない。

「知るか。好きにしろよ」
はっと顔を上げた愁の耳朵を、いらいらのこもった言葉が打った。

「ねこ……」

「あ？」

「……その、猫……逃がし……」

最後まで待ってもらえず、先程自分を殴った男に頭を蹴られ、アスファルトに倒れた。男は愁の髪を乱暴に掴み引き上げ、虚ろな瞳に向かつて怒鳴る。

「てめえ、自分の立場つつもんが分かってんのか？先にぶっ殺してやろうか、ああ？」

「早まんなよ、ここで殺すわけにはいかねえだろが」

クロを掴んだ男がそう言い、彼は振り上げた拳をしゅしゅ下ろす。クロがばいと放り投げられ、道の先で着地した。

それを目にし、少しだけ安堵した途端、強い衝撃が腹にめり込んだ。一瞬後には、それは耐え難い痛みとなり、体内を駆ける。

「がはっ……あ……」

肺の酸素を吐き出し、片手で、蹴り上げられた部分を押さえ、目を見開いて蹲ったまま必死でその痛みに耐える。意識が消え入りそうになり、痺れが手足に行き渡る。

「こんぐらいじゃ死なねえだろ、なあ」

引きつった笑みを浮かべ、男がそれを見下ろす。哀れみとは異なる、満足感のようなものを秘めた、弱者を見下ろす者の目。だが今の愁には、それを見上げる事ができない。

突然右腕を掴まれ、先の手袋が引つ張られて外された。

「間違いねえ、おい」

明らかに生身のものとは異なる、金属でできた腕。それを掴んだまま、彼は周囲に合図をした。

「マジでやんのかよ」

「えげつねえなあ」

同年代ほどの若者たちがそんなことを言いながら集まってくるが、言葉とは裏腹にどこか楽しんでいる風がある。

いささかサイズが大きすぎるコートの袖が肩まで上げられたが、

愁は他人事のようにそれを眺めているだけで、抵抗はしなかった。そうしようとする気すら、すでに起こらない。

だが、緩慢に視線を上げ、それを眼前にとらえたとき、思わず力を入れそこから離れようと試みた。そんな反射も間に合わず、数人に抑えられたまま、数発分の銃声がとどろく。

口径の大きめな銃の動きが止まり、銃口から白煙が糸のように細く立ち上る。

腕の付け根の隙間に、いくつかの鉛玉がめり込んでいる。表面を破壊し、中のケーブルを引きちぎり、向こう側に抜けることはなく、腕の中に収まった銃弾。

浅い呼吸を繰り返しながら、愁は右腕を見下ろした。汗が一筋頬をつたって流れ落ちる。

撃たれた。もちろん痛みなどないが、そんなのは問題じゃない。

撃たれたのだ、自分の身体が。自分の腕が。あるはずのない痛みが、頭の中に響く。

自分にかかっている影が揺らめき、愁はゆっくり瞬きをして、銃を握っているのは別の、始めに自分を殴った人間を見上げた。と同時に、その彼が手を振り下ろした。

肩口にナイフの刃が深く突き刺さり、それを離そうと身をよじったが周囲の人間に抑えられ身動きが取れない。左手で刃を掴もうとするが、逆にねじ上げられ、痛みが電流のように走る。開いた口からうめき声を漏らし、どうすることもできず、愁は自分の腕がもぎ取られるのを見ていた。てこの原理で、それは目の前で身体から外れ、腕であることをやめた。ただの機械の塊が、アスファルトの上に転がった。

「あ……ああ……」

周囲の手が離れ、膝をついたまま左手を地面に押し当て、自分の腕だったものを見つめた。周りから、笑い声が聞こえる。

人を傷つける為の物だ、好きではない。だが、それは同時に間違いない自分の腕だったのだ。左と同じ、意思に従って動く、自分の

身体。四肢の一つ。それが今はもう、なんの役にも立たない塊に成り果てている。

かつてあったものが失われる、出来て当たり前のことが出来なくなる、喪失感。押しつぶされそうな不安と、一生それを引き摺らなければならぬことへの絶望感。手足を失って、初めて知った感覚。二度と触れなくなかったもの。それに、昔と同じ様に支配される。

転がったそれは、今までと同じ様に、僅かな光を鈍く反射していた。

本当に何も無い、コンクリートも打ちっぱなしの、天井の低い箱のような部屋。壁にある扉は固く閉ざされていて、下の方には長方形に切り取ったような穴があるが、そこには鉄格子がはまっついて、腕ぐらいならともかく、とてもじゃないが通り抜けられそうにはない。反対の壁の極めて天井に近い位置には、ガラスのはまっついていない窓があるが、外から聞こえる音の少なさや、その向こうには空しか見えないことから、ここが二階以上の高さにあることが分かる。一階であっても、元からどうする気も無いが。

気が付いたとき、外はすでに暗くなっていた。それからずっと視界を占めているのは、天井からぶら下がっている裸電球。それだけが、この光源。左腕を額に乗せ、仰向けになっただまま起き上がりもせずに、固い床に背を押し付けたままで愁はぼんやりとそれを眺めていた。

ゆっくり腕をもち上げて、その手を開いた。細めの頼りない左腕。よく見ると、そのあちこちに古い傷跡と真新しい青黒いあざがある。どれがいつのものなのか、最早分からない。どうするでもなく、再びそれを額に乗せた。

たくさん殴られて、たくさん蹴られた。本部等のことを欠片も話さなかつたら、もつと殴られた。何度目かに気絶した後、目が覚めたらここにいた。身体中が痛い。だが、相手に寝返るような真似をするくらいなら、死んだほうがましだ。もう政府の人間ではないのだから、裏切りではないのだろうが、理屈ではなく、そこにはまだ死んでほしくない人がたくさんいる。彼らが傷つく原因を作りたくない。

どうせ役に立たないのだから、もうすぐ殺される。それなら、目が覚めないうちにそうしてほしかったが、今身体が痛むという事は、まだ自分は生きているのだ。

苦しくはないし、悲しくもない。寂しくも、辛くもない。こうなつたことへの理不尽さを感じることも、悔しさもない。長い間自分をこの世界に結び付けていた、死の恐怖でさえも。どうせ、一度捨てられた、いらぬ命なのだから。一番愛してくれるはずの人でさえ、生きようが死のうが構わないと、自ら捨てた。どうなっても、関係ないと。

そんな命だから、この終わりが妥当なんじゃないかと思った。一人で、誰にも知られず、これ以上迷惑も掛けず。忘れられるのは少し悲しいが、全部終われるのなら。もう誰も傷つけず、傷つくこともないのなら、その方がいい。できるなら、殺される前に、死んでいたい。それだけを願って、瞼を閉じた。

その唯一の望みでさえ、簡単には叶えてくれないみたいだ。微かに床を打つ音が、頭をつけているコンクリートを通して響く。ドアの下の穴に嵌まった鉄格子の隙間を、するりと抜けて、黒い塊が中に飛び込んできた。愁は額に乗せた腕の下から、薄く目を開けてそれを眺めていたが、その黒い生き物が一目散に飛びかかってきて、頬に柔らかい毛皮を押し付けたとき、やっと声を出した。

「クロ……」

そうだよと答えるように甘えた声を出して、猫は小さな身体を摺り寄せる。いつものように触れようとしない愁の指先を、濡れた鼻でつつき、頬をざらついた温かい舌で舐めた。クロの後ろからゆっくり歩いてきた黒猫が、その隣に背を伸ばして姿勢よく座った。

「クロ君が、きみのあとを見失わないように追いかけていてな、この辺りまではすぐに来られた。後はまあ、猫の嗅覚も馬鹿にできないな」

横から、鼻をひくつかせてそう言う彼の名を、愁はようやくかすれた声で呟いた。一度頷くと、志田は碧眼を数度瞬かせ、

「愁、行こう。逃げるんだ」
力強く、そう宣言した。

しかし予想通りの言葉を聞きながら、愁は黙ったまま腕の下から狭い天井を見やって、目もあわせない。怪訝そうに猫が口を開こうとしたとき、

「どうして……」

と、小さな声が漏れた。

「どうしてって。どういう意味だ」

全く想定外の言葉に、志田は混乱する。ついさっきまで一緒に必死で逃げていたのに、どうしてしまったのだろう。

「ここまで、きて……どうして……」

「おい、しつかりしろ。何があつたんだ」

不安になり、その声をかけると、顔を隠していた腕をどけて床につき、彼は緩慢に起き上がった。その様子を眺め、志田は思わず絶句した。

身体の向こう側だったので今まで分からなかったが、少年の右腕は失くなっていて、本来なら腕を肘まで覆っているはずの黒い袖の中には何も無い。左右非対称のアンバランスな状態で座り込んでいる、見える限りの肌のあちこちは内出血のせいで青黒い。それとにも滲んだ血が皮膚に筋を作っていて、痛々しい事に顔も例外ではなかった。頭から流れた血が、額から臉をかけて頬を伝っている。

「大丈夫、か」

「……大丈夫つて、信じてくれますか」

痣だらけの顔を僅かに上げた、その眼を見て、更に言葉を失くした。何も無い、真つ黒なガラス玉の様な瞳。輝きとは無縁の、なにか本当に大事なものを失ってしまった、空っぽな眼。

「ひどすぎる……。どうして、愁が、こんなことに……」

ぼろぼろになった少年の目を見ていることが出来ず、彼は俯いた。再び見上げると、愁はいつものように、微かに笑ったような優しいな表情をしていた。それでも、いつもとは程遠い。こんな空虚な眼、見たことがない。

「……理不尽だ。こんな不条理、あつていいわけがない」

そう言つて、猫は小さく頭を振った。

一体どうして、彼はこんな目に合わされているんだろう。好んで犯罪者の立場に立ったわけじゃないのに。ただ生きる為に、自分の居場所を護る為に人と少し違う身体になっただけなのに。その居場所からも追われて、拳銃の果てに殺される寸前まで追い込まれてしまった。

周りから見れば、彼も大勢の中の一人にしか過ぎない。不都合な者を一人ぐらい消す事なんて、よくあるのかもしれない。

だが、志田は愁が死ぬのも、心を失うのも嫌だった。大勢の中の

一人であつても、同じ人間はこの世に一人だつていない。そう簡単に、消されていいはずがない。

「尚更、ここから逃げるんだ。こんなところにいたら、すぐに駄目になつてしまう。殺されるかもしれない」

説得するように、揺らぎもしない瞳を覗き込んだ。自分の青い瞳が映り込む。

「無理、ですよ……。腕も、とられて。かたっぽしかないのに」

「それぐらい、取り戻してきてやる」

「でも……」

「諦めるな！ここで死んでどうするんだ」

最早、愁に生きる気がないということは、うすうす感じていた。死の方向へ逃げようとしている。その目が、はっきりそう言っている。

「最初から諦めて、仕方がなかったといつて自分を正当化するつもりか。死ぬると思つたのか。きみは逃げてるんだぞ、生き残る努力を怠つて。死ねば、何もかもなかったことに出来ると思つてるのか。厳しいと自分でも思う。しかし、ここで彼に合意するのは、一番望まない答えだった。

「……そうだったら、ずっとよかつたんですけどね」

穏やかな顔のままの、抑揚のない声。

「死んで、なかったことに出来るなら。全部、許されれば。……でも、それじゃあ、吊り合わない。僕の命ぐらいじゃ、足りない。ただの逃げにしかない」

無感情なその声に、悲しみはない。なにもない。

「だから、生きようと思つて。死ぬ気で戦つて、殺して、生き延びて。でも結局、何もなかった……。堂々巡りして、一人の場所に、帰ってきた」

愁の左手に、クロが身を寄せたが、今となつてはそれを撫でる気も彼には起こらない。

ああ、それは悲しいな。と、志田は思った。この状況を、辛いと

か苦しいだとか、一度だつて言わなかった裏側が、やつとはつきりした。

少し前まで同じ場所にいた元同僚と戦つて、苦しくないはずがないのだ。信じていた友人に裏切られて、辛くないはずがない。全てが自分の敵になつて、悲しくないはずがない。だが、それら全てを押し殺して、彼は笑っていた。

自分は嘘つきだと、愁は言った。弱音を隠し続けていた彼が、ようやく示した救難信号。だから、あの笑顔が苦しみの裏返しだということとは、知っていた。それでも、認めたくなくて、認めてもどうする事もできないから、自分の無力さを知りたくないから、気付かないようにしていたのだ。その笑顔の意味を知っていたのに、ちゃっかり言われたとおりに安堵してほつておいた自分が情けない。それこそが、ひとりぼっちの彼の思惑だったのに。彼より三倍以上も生きているはずなのに、自分の無力さを直視できず、結局はこうなるまで助けてやれなかった。しかし、これ以上自分に何ができただろうかと考えても、何も思い浮かばない。

「愁……」

無力さを噛み締めながら、名前を呼んで見上げた。黒い、虚ろな瞳が僅かに動いて、猫のいる方向を見下ろす。しかし猫は、そこに映っている自分の姿が、彼には見えていないことを知った。かつて、自ら死ぬ気で助けたクロでさえ、その眼は見えていない。

悲しくなりながら、食いしばっていた顎を少し開け、猫は彼の左手の皮膚に噛み付いた。

愁は痛そうに顔をしかめ、針のような歯が食い込んだ手から、うつすらと血が滲み、流れる。驚いたようにクロが鳴いた。

「痛いか」

口を離し、猫はその瞳を覗き込んだ。愁は小さく頷く。

「……死ぬのは、もつと痛いんだぞ。比べられない程」

「一回なら、我慢できる」

「そんな思いをして死んで、何があると思う。……何もない。痛い

ことも苦しい事も。その逆も、もちろん二度とない」

声として届いても、言葉としては届いていないかもしれない。それでも、志田は諭すように語りかけた。

「痛みがあるという事は、まだきみはちゃんと生きてるんだ。そんな場所に逃げようとするな」

「……もう、それでもいい」

「よくない！自分で可能性を捨てることなんか、許さない」

「どうして、死ぬことぐらい、自分で決めちゃ駄目なんですか」

捨てられることも、大切な人を死なせてしまうことも、手足を失うことも、戦うことも、殺すことも、望んでやったことは一度だつてなかった。ただ、真つ暗な一本道を進むように、目を反らしながらも、ひたすら通り抜けてきた。歩くのを拒否する事は許されず、かといって道を選ぶ権利を与えられた事も、一度もない。それなのに、自分だけが持つているたった一つの命ですら、自分で終わりを決めることは許されないという。

「もういいんですよ。僕には、何も無い」

瞳は空っぽのまま。そして、もちろんそんなことはないのだが、志田には愁が泣いている様に見えた。

「何もないなんて、理屈じゃないんだ。今生きてるんだから、最後まで諦めたら駄目なんだ」

一度死を宣告された彼だからこそ、生きることの大切さは身をもつて知っている。もうすぐ死ぬといわれた後、それまでで最も愛おしく、名残惜しく思ったこの世界。いつか別れを告げなければならぬからこそ、精一杯生きる事は、命に与えられた義務なのだ。幸せも、苦しみも、生きているからこそ感じられる、かけがえのないもの。愁に、その気持ちを理解しろとは言わない。けれども、自分からわざわざ別れを言うことはないのだ。そんな悲しいこと、する必要は無い。

「ここから逃げて、また、誰かと戦わないといけない。殺すかも知れない。……嫌なんです、本当に。辛くて……辛くて、たまらな

い……。それなのに、何も、残らない」

「それでも、生きるんだ。死んでこそ、なにひとつないんだから」
自分の言う事は、彼にとつてひどく残酷なことだろう。しかし、そう言わなければならぬのだ。

「どつちも空っぽなら、もう、何も起こらないほうがいい」

苦しい事が多すぎた。そしてそれを、見えないところに隠しすぎた。堪えすぎて、今になっても涙が出ない。泣けたらどんなに楽だろう。だが、見えないはずの涙が、猫には見えた。

「……本当に、きみには何もないのか」

それを止めてやりたいが、触れられないからどうしようもない。志田はそう問いかけた。

「きみが死んだら、わしは悲しむ事になる。それ以上に悲しむ者も、いるんじゃないのか」

愁は目を伏せたまま、答えない。

「クロくんはどうなる。捨てるのか」

僅かにそのガラス玉の様な眼が揺らぎ、寂しげに身を寄せる小さな猫が、そこに映った。

「そんなこと……」

「その悲しさは、きみが一番よく知ってるだろう」
ぎゅっと、片方しかない手を握り締める。

答えられずに、いやいやをするみたいに愁は小さく首を左右に振った。微かに口の端が震えたが、言葉は出なかった。

クロは、そんな主人の冷えた身体にぴたりくっつき、少しでも自分の体温を分け与える。彼に伝えられる言葉はない。言葉はないから、ただ寄り添い、側にいる温かさだけを伝えた。どんな言葉よりも温かく確実な、生きているものだけが持つ温もり。

愁は瞼を閉じた。真つ暗な世界で、その温かさだけが感じられる。小さいが、ちよつとやそつとじゃ消えない灯り。唯一、確かにそこにあると断言できるもの。しばらくした後、ゆっくり目を開けた。

「僕は絶対、捨てたりなんかしません」

静かに、青い瞳にそう告げる。短いが、重すぎる意味を含んだ言葉が、空気に溶けていった。

「本当だな。今度は嘘じゃ、ないな」

志田はその意味を訊ねる事はせず、ただそれが確かなものなのか問う。それに対し、返事をせず、愁は笑った。今まで何度も見せたのと変わらない笑顔で。

再び愁が瞼を閉じたので、猫はその膝に頭を持たせかけた。伝えるべき事は伝えだし、ついさっき、自分の望むほうへ彼は応じてくれた。これで十分だ。

だが、本当にこれでよかったのだろうか。救う事ができたのだろうか。志田は黙ったままで自分に問いかける。彼の一生拭い去れない過去を持ち出し、その性格も承知した上で、否定するわけがないと確信していながら飼い猫の行く末を問い詰めた。卑怯で、脅迫してみていた。虚偽の溢れる残酷な世界に無理矢理引っ張り出して、はたしてこの子を救えたといえるのだろうか。現にその瞳に光はなく、空っぽのままだ。クロをつなぎ目に、無理矢理危なっかしく引き上げただけに過ぎない。

だが、だからといって死ぬことは許せない。なにがあっても、この心情は曲げられない。いや、曲げてはならない。

そんな使命感とも義務感ともつかないものを支えにしながら、志田も同じ様に視界を閉ざした。

腕の形をしている金属の塊を、愁はしばらくの間、どうするでもなく眺めていた。もう一度肩に繫げばこれが自分の四肢の一部に戻るのだとは、信じがたかったからだ。

志田が言うには、ここに来る途中に見かけたとおり、これはコートと一緒に隅へ追いやられていたから、クロと協力して比較的楽にとつてこられたらしい。しかし、いくら向こうにとって必要の無いものだといつても、気付かれるのは時間の問題だ。

床に置いたそれに刃の尖った先端を使って、めり込んだままの弾丸を取り除き、猫たちに支えてもらって肩に当てると、外れかけていたネジを止めた。

「部品とか、壊れていたりしていないか」

今更ながらに心配になったのか、不安そうに志田が言った。

「いろいろ潰れちゃってますね。ネジも足りないし」

「それで、繫がるのか」

「一応、落ちないようにはなったけど……」

なんとか腕は肩に繫がり、床に落ちたりはしなくなった。だが、使えるかどうかといえは、また別問題だ。

「体内の接続部分は壊れてないと思うし、腕のケーブルも切れてないのが残ってたから、落ちなくてうまくいけばきつと動きますよ。多分」

残念ながら、修理に関する専門的な知識は殆ど持ち合わせていない。メンテナンス程度ならまだしも、銃で撃たれて力任せに取られた後の修理方法なんて、知っているわけがない。

「しょうがない」

そう呟くと、愁は腕の途中や手首辺りにあるネジを外し、丁度いい大きさのものを肩口に当てて器用に片手で付け替えだす。

「おいおい、そんなことしたら別のところが外れるぞ」

「一本や二本、大丈夫ですよ。それに装甲のところなら、手首が落ちるなんてことにはならないし」

ズボンを引き上げ、足からもそれらしいのを一本だけ外した。これで、外側の装甲部分が外れる危険性が高まったが、足自体の骨組みはしっかりしているし、きっと大丈夫だろう。確信はまったくないが。

腕を固定し、なんとか形ばかりは元に戻すことができた。とはいっても、肩からぶら下がっているだけで、やはりぴくりとも動かない。しきりに指の辺りへ、クロが猫パンチを仕掛けてくるが、指は反応できない。

「どうしたらいいんだっけ」

「衝撃を与えてみるか。よし、次は肩に噛み付くぞ。いいか」

「いや、よくないです」

牙をむく猫を押しとどめ、愁は眉根を寄せて考えるが、あまりぐずぐずしてはいられない。戦う事になっても、動かない腕なんて、ただの重荷にしかない。

「要するに、神経と、そのケーブルを繋げればいいんだろう。しかし、中に指は入れられない。やっぱり刺激を与えるしか……」

「電気だ」

「でんき？」

顔を上げた愁の視線の先、低い天井からぶら下がる裸電球を、志田はともに見上げた。配線すらむき出しになって、細いコードが天井をはっている。

やがて、その真下に立った愁が掲げた左手、その上に乗っている黒猫の、更に上に乗ったクロが、志田に言われたとおり天井へ飛び出した。なんとなく、猫は人語が理解できるのが常識になってきていたが、やはりそんなわけではない。猫は猫としか話せない。

猫特有のしなやかさで天井近くまで飛び上がり、床と壁にその大きく伸びた影が踊る。電球近くのコードに飛びつき、クロはひっそりとしがみついた。大きくそれがしなり、今にもちぎれそうになる。

「軽すぎた……」

しかし、コードを引きちぎるには、小さなクロの体重は足りなかったらしい。予想外の事態に愁がそう呟き、彼の頭の上に移動した志田も、息を呑む。健気にも、クロは細い四本の足でしがみつき続けているが、いまにも落っこちそうだ。

「もういいよ、クロ」

落ちてきそうなクロの真下で、愁は左腕を伸ばして受けとめる姿勢をとった。上に向けて開いた左手。

「まだだ、いける！」

だが、そこに猫は落ちてこず、代わりに別の一匹が、愁の頭を蹴り飛ばし、伸ばした左手を四本足で叩き、天へ向けてダイブした。

下斜め方向から跳んできた黒猫が、クロに勢い込んでぶつかり、二匹共に放物線を描いて飛んだ。その衝撃でケーブルが天井から離れ、幾分劣化していたそれが、電球とのつなぎ目で音もなく千切れると、先にある電球が重力の赴くまま、床へ叩きつけられる。

高く派手な音が空気を震わせ、粉々になったガラスが飛び散り、一瞬あたりは暗闇に包まれる。唐突に静寂が訪れ、誰も言葉を発しない。僅かに差し込む月光が、床に飛び散ったガラス片に反射され、小さな粒があちこちで微かに光っている。

「……無事ですか」

反射的に腕で顔をかばった愁が、その腕をどけて始めにその静寂を破った。少しずつ眼が慣れてくると、暗闇の中に二匹の猫の姿が浮かび上がってくる。青い首輪の一匹と、青いリボンの一匹。ともに闇に溶けてしまいそうに真っ黒な毛皮をしている。

「平気だ。猫の身体は、着地にむいている」

志田がそう返事をし、「くう」というようなこもった小さな声をク口も出す。気丈にも、彼はまだ、天井から伸びた配線の先を啜っていた。

愁に寝められ、久しぶりに頭を撫でられると、クロは嬉しそうに鳴いてその左手に擦り寄った。もう一匹の方は、撫でられても複雑

そんな無然とした表情をしていたが。

「電圧が足りれば……」

床に座り込み、両脇を猫に挟まれたままで、その導線の先を腕と肩の僅かな隙間に差し込んだ。壁に穴のように開いた窓から差し込む月明かりで、狭い室内の様子がぼんやりと浮かび上がっている。まだ壁の付け根には暗闇が立ち込めているが、この作業を可能にしてくれるほどの光源にはなっていた。

探るように、導線を抜いては少し角度を変えて再び差し入れるのを繰り返した。その何度目かに、愁の右手の指がびくりと跳ねる。

「おお」と、祈るように見つめていた志田が、思わず声を漏らした。

「直った……かな」

「ちゃんと動くのか」

「一応。あまり派手な事はしないほうがいいけど」

答えながら手を開いて閉じ、肘を曲げ、そつと肩を回す。見た目とはかく、動きに異常はない。改めて、愁は安堵の溜め息をついた。

「よし。じゃあ、行こう」

元気よくそう言った志田を振り返る。

「僕じゃ、あそこは通れませんよ」

「だろうな。いくらなんでも」

ドアの下の隙間は、どんなに身体が平均未満だといっても、通り抜けるには不可能だ。まさか、あそこからと言われるのではないかと思っただが、流石にそれはないらしい。

「鍵は無理だった。やはりそれはちゃんと眼の届くところにあったからな」

「一番気になってたんですけど、逃げるってどこから」

言葉では答えず、猫は顔を壁の方に向けた。その視線の先には、ガラスのない窓がある。

「まさか」

「そのまさかだ。頑張れ、愁」

「……二番目に気になってたんですけど、ここって何階ですか」

「さあ。ちゃんとは数えてないからよく分からんが……六階か七階ぐらいだろう」

猫は、軽くそう言ったのけた。すぐには返事が出来ず、数度瞬きをして、愁はなにか不思議なものを見るかのように猫を見つめた。

「死にますね」

「いや、死なない」

「無理だ」

「いや、無理じゃない。最初から諦めるな」

そんな次元じゃないだろうと思ったが、かといって自分になにが思いつくわけでもないのです、愁は口を閉ざした。

「頑張れ。やればできる」

何故、彼はこうまで自信を持って言えるのだろうか。というより、どうしろと言うのか。いつそ清々しささえ感じながら、愁は再び月明かりの差し込む窓枠の形をした穴を見上げた。せめて様子ぐらい見ておこう。そう思い、立ち上がってコートに袖を通す。手袋は、両方ともどこかで失くしてしまった。

窓枠の高さまで、二メートルもない。反対側の壁へ数歩下がり、軽く助走を付けると、床を蹴り枠に手をかけた。そのまま軽く身体を引き上げ、そこにしゃがみ込んだ姿勢でバランスをとりながら外の様子を伺う。

工場か何かの跡地なのだろうか。遙か下の地面に、二階建てほどの箱型のような建物がいくつか林立している。人の姿は無い。

枠に手をかけて支えているのに、下へと吸い込まれ、落ちてしまいそんな錯覚に陥り、はっと顔を上げた。いつの間にか両側にクロと志田が登ってきていて、そこに座り込んでいる。

「あそこに、雨水用の水道管があるだろう」

そう言われて右方向に顔を向けると、彼の言うとおりに、更の上の屋上から伝う管が壁に張り付いていた。

「あれなら、下まで続いている」

「あれを伝えていくんですか……」

自殺行為だとしか思えない。そう上手く下まで降りられるわけがない。

愁はそう思うのだが、猫はそう思わないらしい。

「志田さんは、どうするんですか」

「さて、どうするか。きみのポケットに入っていようか」

「どうやら本気で言っているらしい。」

「じゃあ、僕が死んだら」

「わしらも死ぬな」

命をかけたこれ以上ない最大限のプレッシャー。まだ何もしていないのに、眩暈がした。

「他に何か、方法はないんですかね」

「ない」

きっぱりと断言する。彼の言うとおり、愁にも思いつかないし、第一、時間もない。しかし、一人一人と猫二匹を支えるには、あまりにもその管は儂げで、頼りない。

「あまり派手な事すると、腕が……」

「ほら、つべこべ言うな。大丈夫だ、ここで死んでもきみを恨まない」

尋常じゃない台詞だが、あくまでもその口調は軽い。

自分が落ちても、それは自分のせいなので仕方がないが、ポケットに入っている以上、間違いなくクロと志田も同じ運命を辿ることになる。愁はそれが嫌なのだが、分かっているながらこの猫はそんなことを言っている。

「本当ですか」

「これが、嘘をついている目か」

そう言っつて、純粹そのものの真っ直ぐな青い瞳で見上げた。動物に、嘘つきの眼ができるわけがない。そんな眼ができる生き物は、人間ぐらいだ。

ようやく、愁は諦めたように笑って、分かったと返事をした。

するりとコートの上側のポケットに猫が一匹ずつ収まり、愁は身を乗り出す形で立ち上がった。遙か下から吹き上げた風が、そのまま空へと昇っていった。杵をしつかり掴んだまま、右方向へ身体を向ける。

じつとその管を見つめる。目標まで、三メートルもない。行けないことはない。一度息を吸って吐く。

と、ぐっと息を止め、僅か二歩の助走で踏み切り、その身体は完全に足場を失った。

窓枠から飛び出し、なんとか指先が触れると同時に必死で腕でかかえてしがみつく。そのまま行き過ぎようとする勢いに引つ張られ、折角つけた腕が肩から外れそうになる。管と壁とを繋ぐ金具が視界の隅に入り、すぐるようにならぬ右手で掴んだ。

恐る恐る下を覗き込む。だらりと下へ向いて垂れ下がった自分のつま先が見え、その先ある暗い地面と、マッチ箱のような建物は気にしないようにして、金具から離れた手を管に回した。ゆっくりと慎重にそれをすべり降り、左足が次の金具についたとき、ようやく深いため息と同時にほんの僅かばかり力を抜いた。穏やかな風が吹き、コートの裾が絶え間なく揺れる。

「おお、止まったな」

「ちゃんと、つかまっててくださいよ」

ポケットから猫がひょっこりと首を出す。それがそのまま転げ落ちてしまいそうで、どきりとしたが、確かに今もちゃんとそこに入っている。

「後はそのまま降りていってくださいな」

「この管と部品が折れなきゃいいけど」

「折れん折れん。問題は君が自棄やけにならないかどうかだ」

何を根拠に折れないと言っているのやら。愁は位置を変える為に足を少し動かした。

「こう見えても大抵は冷静に……」

バキリと嫌な音が足元で響いた。

「え」と、愁と志田の聲がかぶる。劣化した金具は、一人一人と猫二匹を支える丈夫さは備えていなかった。

「って、やっぱこれだめじゃ……」

緩んだ両手がすべり、声だけを残して、金具を踏み抜いた身体は、暗い地上へと吸い込まれる。自由落下をする物体は、他の方向に自

ら力を働かせる事はできない。つまり、為すすべなく落ちるしかない。

身体全体でこれだけ長いこと風を切るのは始めてだ。跳び込みをする人はこんな感じなのだろうか。

最早、生き物というより物だ。屋上から落としたビー玉と変わらない。足から落ちたはずが、自然に身体の比重で頭が下になるよう半回転する。風が耳元で轟音をたてる。風が強い。いや、それだけの速度で、自分が空気を突っ切っているのだ。

風圧で、目が開けられない。ほんの薄目を、迫り来る草地に向けた。

ぐつと手足を縮める。それが一度回転し、思い切り両足で壁を蹴りつけた。

真っ直ぐ落下していたのが、斜めへ飛び出し、隣の建物へ精一杯腕を伸ばす。蹴り出すタイミングが少し計算違いだったらしく、屋上の手すりではなくふちを掴む羽目になった。金属の指が食い込み、コンクリートに五本の細い溝が出来る。

足で壁を蹴り、左手で手すりを掴み、ようやくそれを乗り越えて固いアスファルトに膝をついても、なかなか動悸は治まらなかった。

「二匹、とも。生きてます、か」

「生きてるが、猫じゃない、匹じゃないぞ」

二匹が顔を出し、見上げた。そして青い首輪の方は、かなりどうでもいいことを喋る。

「そんなの、今は……うわっ」

愁は反射的に身をすくめた。ついた手の側に円形に近い穴が開き、そこからうっすらと煙が立ち上っている。

遠くで怒鳴り声が聞こえ、猫たちは再び姿を隠し、愁は立ち上がり、同時に駆け出した。屋上の向こう側まで来ると、そのままの勢いで左足で踏み切り、手すりに右足をかけ、そのまま蹴る。隣の建築物の屋上まで飛び移り、そして立ち止まりも振り返りもせず走る。自分が駆けた床を貫く音が響くたびに、背筋が凍った。だが止

まれば、狙ってくれと言っているようなものだ。

足元が爆ぜ、バランスが崩れた。運悪く屋上の隅にいた為、背中から落下する羽目になる。

大きな音を立て、一階分ほど低い三角屋根の上に背を打ちつけたせいで、一瞬、意識と呼吸が止まる。まだ視界がぼやけたまま、必死で歯を食いしばって横たわった上体を起こし、ずりずりと下がっていくのを食い止めると、兎の跳ねるように飛び出した。

止まるな、止まるなと自身に言い聞かせ、隣へ飛び移る。

ようやく一番端の建物までくると、転げるように屋根の先から飛び降りた。二階ほどの高さぐらいなら、なんとか無事でいられる。

愁が柔らかい土へ足を着くと、ポケットから飛び出した二匹もその側に降り立った。

「行くぞ！」

強いその声につられるように返事をし、息をつく間もなく、跳ね回るその猫の姿を追った。

「よしよし、よくやった」

路地裏の影に蹲り肩で大きく呼吸をする愁の頭を、黒い尻尾が撫でた。

「それに、運も良かったな」

「……運がいいなんて、初めて言われたかもしれない」

「そうか」

「そうかもな」などと志田は納得している。

軽いことを言いながらも、愁は彼が安堵している事に気付いた。自分の自殺予防のためにポケットに入っていたのなら、生死をかけたのなら、彼はこれ以上ないほどのお人よしだ。いくら猫の身体になったといっても、死にたくなんてないはずなのに。

そのことを伝えたかったが、どう言えばいいのか分からないので、愁は疲れた表情のまま笑ってその頭を撫でた。予想通り、猫は前足でその手を押し返してきたが。

びくりと、側にいるクロのひげが揺れ、二人と一匹は息を殺す。すぐ目の前を、男が一人、右から左へ駆けて行った。

どこかのアパートの階段下にいるのだが、意外と見つからない。かといって、いつまでもここにいるわけにはいかないのだが。

「前から言おうと思っていたのだが」

突然の言葉に、顔の高さ程の段上に座っている志田を、愁とクロが見上げる。

「きみの他に、あと一人、その腕か足をしてる人間がいるんだって言ってたな。そいつを見つければいいんだろう」

「それはそうですね」

「それなら、探しに行……」

ぱっとその顔を手で塞ぎ、足音が十分遠ざかるのを待ってから、愁は手を離す。

「おい、なんでいつも鼻まで塞ぐんだ。窒息死するかと思つたぞ」

「すいません……。でも、そんな顔も名前も知らない人間を探すなんて、無茶ですよ」

「まあ、まず不可能だとは思うが。だが、全く目星がつかないわけじゃないんだろう」

「一応、フリークスの奴だつてことは分かってますけど」

「フリークスつてのは、あれか。ニュースなんかで言ってるあれだ。OC中心の犯罪者の事か」

小さく首を傾げ、言葉の意味を軽く否定する。

「犯罪者個人じゃなく、集団ですけどね」

「その中にいるんだろう。意外と近くにいたりするんじゃないか」「んー……。ない、とは言い切れませんが。愉快犯みたいだし、

なに考えてるか分からないから」

でも、それが分かれば苦労はしない。影のような集団だから手をこまねているのだ。

そついう理屈が分からないはずはないのに、

「なら、そいつを探そう。わしも手伝つてやる」

猫は胸を張ってそう言った。

数度瞬きをして見上げ、礼を言つと、愁はちよつと笑つてその顎を指先で撫でた。

23 対称

「じゃあ今度お茶でもしよ。またね、瑞穂」

休憩室で缶コーヒー片手に振り返る同僚へ、瑞穂は手を振った。彼女とは部署が違うので、会って話すのは久しぶりだった。いつでも会える友人はいいものだが、たまにしか顔を合わせられないというのも、会えた時の喜びがあつていい。

彼女は、特に女性職員が珍しい犯罪対策部に属していて、休み返上ばつかで勘弁して欲しいと小一時間ほど愚痴ついていた。くまを消す方法を教えるとその場で試していたが、上手く効いただろうか。

「そろそろ戻ろうかな」

そう呟き、瑞穂は立ち上がって背を伸ばす。何気なしに窓の外を眺めると、夕日にほんのりと赤く照らされた雲が、立ち並ぶ建物の向こうに連なっているのが見えた。街を柔らかく覆うように映えている。

愁がいなくなつてから、掠もこれまで以上に見かけなくなった。

いや、研究部にその余波は及んでいないが、彼らの部署全体が多忙さを増したから、それは思い過ぎだろう。その一帯の人間は、先程の友人を除けば、この前、四万と渡部わたべを見かけたきりだ。

何故そんな話になつたのか知らないが、東北の雪かきと沖縄の暑さ対策はどつちが大変かというようなことを二人で言い争っていた気がする。東北出身の四万が、沖縄の方が大変だと言っていたのは意外だったが、

「雪なんか、ちゃっちゃと焼いて溶かせばいいじゃねーか」というのが持論らしい。

「それはお前だけだ」

そう返した渡部との意見の食い違いが、どう進行したのかは知らない。ただの言い争いにしては共に意気込みすぎていたような気がするが、なんとなく微笑ましかつたのでそのままにしておいた。あれ

は、止めたほうがよかったのだろうか。結局どうなったのか、彼女に聞いておけばよかった。

ふと、自販機の方を振り返る。その度に、あれからいろいろと思い出すようになってしまった。

たった三年ほど前のこと。それも、全て足しても一時間に満たない間の事。それでも、瑞穂には忘れられない記憶の一つ。

その時も、瑞穂はここにいた。帰る前に、同じ部署の人の話を聞いていて、その人が帰った後もすぐに帰る気力が無く、暗い夜空を一人で眺めていた。

その只中に、彼は向こうから一人で歩いてきた。瑞穂が顔を向けても、それに気付いた様子はなく、名前を呼ぶとようやく少し俯けていた顔を上げて、自販機の側で立ち止まった。

「やっぱり。そのストリートは掠くんだと思った」

掠の黒髪は、昔から変わらず、真っ直ぐでさらさらだ。本人曰く、生まれついたものらしいが、男にはもつたいないと羨む友人もいる。

「あなたは大丈夫だったの。怪我とかなかった」

瑞穂が優しく微笑んで聞くと、僅かに首を横に振り、

「俺は、なんともなかった」

それだけ答えた。よかったと瑞穂が言っても、返事は無い。

そのわけは分かっているのに、彼女は聞かなければならなかった。義務でもないのだし、勝手な願望だとは知っているが、後押しする必要はある。最終的に彼が拒めば、強制する気も、責める気も無い。確認する程度に、口を開いた。

「愁くんのところ、行ったの」

少しの沈黙が立ちこめ、

「……いや」

と、掠は再び小さく首を振った。

「一回、様子見てあげられないかな」

できるだけ、柔らかく尋ねる。掠は口を引き結び、澄み切った揺るぎの無い瞳を伏せ、「分からない」と一言呟いた。

彼は、辛いとも苦しいとも人に言う事はない。自分の心を自分で潰し、躊躇いなく殺す。それでも、完全に息の根を止められていないのは、瑞穂にはよく分かっていた。絶え間ない葛藤が彼の心を容赦なく引き裂いている事も。あらゆることが、その決して大きくない、細い背に負うには、あまりにも大きくて冷たすぎるのだという事も。

濱瀬夢は間違いなく、彼にとって夕月に並ぶ大事な人だった。幼い頃からの自分を知る彼女に、その強く押さえつけている心の片隅を見せることを許していた。警戒を怠る事のできる相手だった。そんな二人は、両方とも死んだ。彼の弱さを知っている人は他にもいたが、大半がその時に死んだ。そして間接的に彼らを殺したのは、つい先日片手片足を失った、自分の弟だ。

まわりが言うように愁を憎みきることもできず、かといって許すこともできず、歯を食いしばり続けている。瑞穂には、椋がそんな風に見えた。それをただ何も出来ずに見続けるだけなのは、悲しかった。

「俺は、夕さんが死んだとき、あいつに憎んでるって言った」
幾分押し殺した声。ぱっと聞いただけじゃ気付かないほどに隠しているが、いつものように隠し切れてはいない。

「あの子も、そのこと覚えてるみたいだよ。この前言ってた」
言いたくはない。だが、彼らが言葉を交わさないのなら、代わりに伝えてやらなければならぬ。

「ごめんなさいって。……また死ねなくて、ごめんなさいって」
言いにくそうに瑞穂が告げると、椋は驚いたように顔を上げた。

「おれは……。俺は、そんな……」
「それでね、猫、拾ってきたんだって。傷も塞がってないときに、焼け跡で死にそうになってた、子猫」

椋も知っていることだったが、幼さの十分残る表情に、悔しさが混じる。微笑みを崩せぬまま、瑞穂はただそれを見ていた。

「あいつ、ばかなんだ。何にも知らないんだ、昔から。自分のこと

すら分かってない」

「みんなそう言つて怒つてた。猫なんか拾つてる場合じゃないつて。何も分かってないつて」

「でもね」と、瑞穂は続ける。

「私は、優しいあの子らしいなつて思う」

「でも他の人はそうは思わない。ただの要らない奴にしか見られない」

そうなつたら最後、どうなるのかは瑞穂も知っている。切り捨てられるだけだ。

やっぱり、棕は優しい子だと彼女は思った。それなのに、どうしてこんなことになつてしまったのだろう。瑞穂には、分からない。

その数日後、棕は病院に来た。彼がなにを思ったのかは、分からない。ただ、廊下の端で一本の棒にすがり、ようやく立っている包帯だらけの弟を見て、一層苦しさが増したのは確かだ。それを振り払おうとしたのか、そうではないのか。不安げな左目で見上げる愁が口を開く前に、棕はいきなりその胸倉を無理矢理左手で引っつかんで引き寄せた。そして、固く握り締めた右手を振り上げ、その頬を強く殴りつけた。

自分だけじゃ立つこともできない身体が、鈍い音をたてて廊下の壁に叩きつけられ、微かに呻きながら愁は床にくずおれた。白い包帯が赤みを帯び、それは床をも染めた。

偶然居合わせた渡部が慌てて棕の腕を掴んだが、彼は全く抵抗せず、ただその澄んだ瞳で、愁を見下ろしていた。瑞穂が、大丈夫かと尋ねたが返事もせず、愁も彼をじつと見上げていた。

24 - 1 言えた言葉と言えなかった言葉と

路地裏の片隅の、人が住むことは不可能だと思われる、凄まじく老朽化が進んでいるアパートの階段下で、二匹の猫と共に、愁はぐったりと壁にもたれて目を閉じていた。本部での待機時間等ではよく机の下に寝ていたので、長時間無理な姿勢でいることには慣れている。今は、完全に眠ることは出来ないが。

起き出したクロが、ぐーっと前足を突っ張り、伸びをした。その影が、二倍にも三倍にも長く伸びる。暗くなる時間も近い。

「ああ、よく寝た」

もう一匹が、その黒い毛皮を夕日に赤く染め、あくびをしながら言う。どうやらこの猫二匹は、完全に寝ていたらしい。

「おはようございました」

「何で過去形なんだ」

目を擦りながら言う愁に、起き抜けであるにも関わらず、志田が鋭く指摘した。その側では、クロが前足を舐めて顔を洗っている。

「意味は無いから。癖ですよ、癖」

「珍しい癖だな」

「何故か昔から言っちゃうんですよ。何ですかね」

「いや、わしに聞かれても」

輪をかけて意味の無いことを言っているうちに、夕日の温もりは暗闇に支配されていく。

犯罪対策部の活動は、半数以上が夜に行われている。市民に影響を及ぼさない事が前提だからだ。フリークスの方はどう考えているのかは知らないが、昼夜を逆転させることで、落ち着いた。それでも、できるだけ行動は起こさないようにする。わざわざ目立つようなことをする必要は無い。

いつまでこうしていたらいいのかと考えたら、いつそ見つかったほうがましだと思いついてしまう可能性も捨てきれない。だからと

にかく、今をどうにかする方法しか考えない事にした。

「何か、変な感じしませんか」

いつでも飛び出せるようにしゃがみ込んだ姿勢のまま、ふいに愁が呟いた。

「変なつていつても、どんなのだ」

「よくは分からないんですけど」

口元に左手をあて、じっと前を見据えている。猫の目でも、街灯がぼつりぼつりと点在しているだけの細く暗い夜道しか見えない。

「なんでしょね。でも、いつもとは違う」

言葉では上手く説明できない、動物的な第六感。時と場合によれば、直接的な視覚や触覚よりも頼りになる感覚が、普段とは異なる雰囲気を知覚する。直接ではないから、具体的にはよく分からないのだが。

「にやおう」と足元のクロが鳴いて、綺麗な緑色の目の奥に夜空を映しながら、愁を見上げる。分かっているよと言っているみたいで、愁はそつとその背を撫でた。

「ふむ。そう言われれば、そうかもしれない」

長いひげを微かに震わせ、青い首輪の猫は、目を細めた。どこまでも続いていそうな暗闇へ、目を凝らす。

と、それまで座って尻尾でも揺らしていたのが、ぱつと飛び上がる勢いで四肢を地に押し当て、身を低く屈めた。

頭のすぐ上で、ガキンと硬い音がすると同時に、転がるように愁は階段下を離れる。兆弾した玉は、見えない。

向こうの街灯の、更に向こう。そこはもう漆黒の闇だが、微かに周囲よりも濃い影が見える。ついさっきまでは無かったはずだ。つまり相手はこの短時間の間に、障害物に隠れている、見えるか見えないかぎりぎりの目標へ照準を合わせ、引き金を引いたことになる。それも、遠距離用のものなんかではなく、片手で構えられる拳銃で。そんなことが出来る人を、愁はとっさに一人しか思い出せなかった。そして、半ばそれを、確信していた。

コンクリートを一步步踏みしめ、その誰かは少しづつ距離を縮める。地面に膝をついたまま、愁は微かな月明かりの元で、自分の憶測が間違っていないかったことを知った。

24 - 2 言えた言葉と言えなかった言葉と

銃の引き金に指をかけたまま、棕はこの闇よりも深い黒を湛えた瞳で、愁を見据える。

「大人しく武器を捨てろ。抵抗すれば、撃つ」

冷たい声が静かに響き、その銃口は、真っ直ぐに獲物を捉えている。愁は黙って、前を向いたまま義手を探り、ナイフの柄を左手で握り締めた。慣れた動きなので、見下ろしもせず腕を元に戻す。よく見えるように、左手で握ったそれを軽く掲げた。

逆手に握り締めたナイフの刃に映りこむ、下限の月。

それが相手にも見えたのかは分からない。右手で地を押し足で強く蹴り、銃弾のように前へと飛び出した。

空気を破裂させる銃声が、幾度か大気を震わせる。その直前に、右へ左へと、愁は猟犬のように素早くアスファルトを蹴った。灰色の地に、褐色の弾丸が弾ける。

あっという間に距離を詰め、銃は不利だと構えた棕に、愁は殴りかかった。その手を寸でのところで受け止め、加速された勢いのまま、棕は流れるように後方へ投げ飛ばす。

安易に予想された動きなので、受身を取り、立ち上がりながら回し蹴りでその背を狙った。しかしそれ以上の判断力で、瞬時にその距離を数十センチほど加えて離れた棕が、愁の動きが止まる隙を突く。

脇腹への鈍い痛みを耐え、次の一撃が来る前に愁はそこから飛びのいた。左手にナイフを握ったまま。

たった数秒間だけ睨み合い、再び牙を剥き合った。互いに、相手は倒すべき敵でしかない。息をつく間も与えられない。本気でなければやられる。それなのに。

なんで、戦ってるんだらう。

ほんの一瞬、そんな思いが愁の頭の片隅をよぎった。余計な考え

は致命的な油断と傷を生む。その決まりに従って、低い位置からの蹴りが胸に食い込み、肺の酸素が無理矢理押し出された。意に反する、言葉にならない短い声が喉から絞り出され、よろける。

が、愁は必死に踏みとどまった。倒れなかったのは、棕の予想をも超えた。

ふいにやってきた、逆転の機会。いまなら、低い位置にいる彼の頭でも殴れば、倒すことができる。その一瞬を逃さず、半ば無意識的に愁は右手を握り締めた。

だが、振り上げたその手は、半端に上がったままだった。

自分でも、なぜ今殴らないのか、分からない。勝機の割合は棕の方が大きいはず。だから、今倒さなければならぬ。分かっている。分かっているのに、それ以上に言わなければならぬことがある気がした。こんな意味の無い戦いよりも、もっと大事な事が。

「僕は、ぼくは……」

突然、「がっ」と詰まる声を上げ、愁はがくりと地面に膝をついた。そのままゆっくりと地面に倒れ、手からナイフが滑り落ちる。

少しの間、立ち上がった棕はただそれを見下ろしていた。

やがて、地面に片膝をつき、愁の鳩尾を打ったばかりの右手でナイフを拾い、彼のベルトに挟みこんで落ちないようにする。結局そのナイフは、一度も使われなかった。

冷たい右腕を、コートの上から自分の右手で掴み、肩に回すようにして、気絶した愁を背負う。棕の左肩に頭をもたげ、右肩から腕をだらりと垂らしたその身体は、想像していたよりも軽かった。棕よりも頭一つ分近く背が低いので、足先は引きずられそうだが地につかない程度。

先に立ち込める闇を俯き加減で上目遣いに見ながら、ゆっくりと棕は歩き出した。静かに地面を踏みしめる。静寂が充満していて、物音は無い。右手で握り締めた右腕は、コートの上からでも、硬く、冷たい。

足元で小さな音がするのに気付き、棕は目線だけ動かしてそれを

見下ろした。青いリボンを首に巻いた小さな黒猫が、しきりに鳴きながらついてくる。その声はか細く不安そのもので、小さな足をせわしなく動かすその背に、揺れるコート裾が時折かかる。

主人を見上げる黒猫から目を反らし、棕は再び暗がりを見つめた。遠くの方に点々と電灯が灯っているだけの、吸い込まれそうな暗闇ふと、足元の黒が声を発した。

「その子を、離してやってくれないか」

足を止めて見下ろすと、そこに青い首輪をした、ついてきているのよりもいくらか大きめな猫がいて、青い瞳でこちらを見上げていた。「わけあって猫に憑依している身なのだが。きみはあまり驚かないな」

「……こいつは、猫に知り合いがいるのか」

「わしは猫じゃない。だが、愁には恩があるんだ」

志田は細いひげを揺らし、落ち着いた声で続ける。

「きみは、この子の兄だな」

棕は、一度反らしかけた目を猫に戻した。相変わらず、澄ました黒猫の顔がそこにある。志田は、彼の態度から肯定だと確信し、

「なんとなくな。どことなく似てる雰囲気がある。猫は人間よりもずっと敏感なんだぞ」

そう告げる姿は、こころなしか得意気だ。

だからなんだと言いたげな棕に、猫は口を開く。

「兄弟で殺しあうなんて、悲しすぎる。逃がしてやってくれないか」

「嫌だといったら」

「噛み付く。痛いぞ、猫の歯は」

闇夜にきらりと光る歯を見下ろし、棕は幾分呆れた様子で僅かに眉をひそめた。

「本気か」

「本気だ。……とはいっても、結果は明らかだから意味はなさそうだが」

ク口が「じゃあ」と声を上げ、喋る猫との問答を打ち切った棕は再

び歩き出した。足元にもう一匹増えた猫のせいで、静寂は一時的に破られたが、それもすぐによみがえり、辺りを包み込む。

志田は、繋げる言葉を考えながら彼の後をついて歩く。成程、愁の言ったとおりだ。本当に戦った。牙を剥いて彼に飛び掛るタイミングを計るが、実の弟に銃口を向けて発砲するような人間だ。いきなり現れた面識の無い喋る猫を黙らせる事ぐらい、その気になればあつという間に出来るだろう。総じて、猫の身にはどうする事もできない。

だが、諦めたくもない。つまり逃げたくは無い。志田は、棕の横顔を見上げた。澄んだ黒い瞳が兄弟でよく似ているが、伏せ気味のその黒は、彼の方が更に深い内奥に何かを潜めているように見える。「どこに連れて行くんだ。愁は、どうなってしまっただ」振り返りもせず、彼は答える。

「本部に引き渡す。後の事は知らされていない」
知らされていないし、決定されてもないのだと棕は思う。今まで捕えた対象者は、全員フリークスの者だった為、勝手に死んだ。生きている場合の処置は、今まで必要が無かったのだ。

もしかしたら、殺すのかもしれない。ぐだぐだともめるよりも、一人ぐらい秘密裏に消したほうが遥かに楽だからだ。好都合な事に、反発するような親や親戚などはいない。今の愁の立場は犯罪者なわけだし、捕える際に正当防衛で殺してしまったと誰かが言えば、十分にまかり通る。それで全て終わりだ。

俺は、何をしているんだろう。暗い道を睨みつけながら、棕は思った。

答えはわかっている。たった一人の家族を、死刑台に送っているのだ。今生きている命を、この手で消そうとしているのだ。

何がしたかったのか、どうしてやりたかったのか、どうするべきだったのか。分かっているはずなのに、分からない。ただ、こんなことは望んでいなかった。守ってやらないと、随分昔から、そう思っていたはずだったのに。愛されることには縁無し、痛みに耐え

る方法しか知らない愁を守ってやれるのは、そのとき自分しかいなかった。

だから、棕は必死で強くなった。できるだけ多くの苦しみを抱えられるように、認められるように、心を殺した。涙も忘れた。握っている愁の手を離さないでいられるように。

しかし、その手も、いつしか離してしまった。

仕事だから、言われた事なのだから、仕方ない。そうやって、唯一の居場所を保持する為、今まで数え切れないほど残酷な事をしてきた。それが出来ない自分など、存在してはいけない。

だが、その居場所とは、たった一人の弟を殺してでも、守るべきものなのだろうか。

久しぶりに背負った身体のせいで、背は温かい。愁はぐったりしていて、この状況に似合わず、まるでただ眠っているかのようにだった。昔と似たような事になっている。顔を上げれば、そこに無いはずの雨が見えそうで、棕は地面に視線を落とし続けた。

「きみは、本当に愁の事を憎んでいるのか」

ふと志田が訊ね、「関係ないだろ」と、目も合わせない彼を見上げる。

「きつと本気ではないな」

「何でそう言い切れる」

「さっき撃ったとき、殺す気はなかったんだらう。足元ばかり狙って」

「素人目など、信用ならないだらうが」と猫は付け加える。

「今だって、きみが思い立てば殺せる」

「こいつに死んでほしいのか」

「いや、逆だ。わしは愁に死んでほしくない。きみだって、そこま

で憎んではないんだらう」
殺すほどというのは極端すぎるが。そう思いながら棕を見上げると、彼は肯定も否定もせず、黙ったままでゆっくり歩き続けている。それが、志田にはひどく悲しく見えた。

「憎みきることも出来ない。哀れだな、きみは」

「あんたに何が分かる」

「何も分からないさ。だが、捨てられたときから、あるいはその前から。きみが守ってやってたんだろう」

ようやく、棕は猫の黒い背を見下ろした。すぐに、これは愁が喋ったのだと察する。

「だからきみは、彼を守るためにも、憎まざるをえなかったんじゃないのか」

「……どういう意味だ」

分かってはいるが、訊ねる。彼の考えに齟齬が無いかを確かめるため。そして自分の思っていることを確認するために。

「甘さと優しさは違う。きみは、愁のしたことを受け入れさせる為にも、憎むことが必要だったんじゃないのか。同じ事を繰り返させないようにならなければならなかった。下手に許して、もし同じ様な事が起きてしまったとき、傷つくのを見たくなかった。わしの勝手な考えだから、違っていれば笑い飛ばしてしまっても構わないが」

志田はそう言うが、棕はただ俯いたままそれを聞いていた。この猫の言っている事が正しいのか、自身に尋ねながら。

「どうだろう」

その言葉に、棕はただ、分からないと返した。

「その、夕月や濱瀬という人は、愁の大事な人だった。という事は、きみにとっても大事な人だったんだろう」

「そんなことまで、言ったのか」

驚いた風はなく、ひとりごとのように彼は呟いた。それに頷く代わりに、猫が台詞を繋ぐ。

「だから、憎まれても仕方ないと言っていた。きみの思い通りに、愁は素直にそう思っている」

これが、甘さではない優しさの結果だと疑う事は、愚かにもしない。棕の言ったことをそのまま受け止めてしまうから。

「それでいいんだ。初めにそうやって言ったのは俺だ」

憎んでいるといつてはねつけているのは自分だ。彼らを見殺しにしたのは愁なのだから。棕はそう自分に言い聞かせる。

「俺はこいつにひどいことを言い続けた。だから」

「いや、違う」

言葉の続きを察し、志田が遮る。

「愁は、きみを憎んでなどいない」

見下ろす黒い瞳に、青い瞳が映りこむ。同情も怒りも無いそれが、黒い水面を真っ直ぐ受け止める。

「そんな理由も資格もない。そう言っていた」

重い足取りが、無意識の内に更に重くなる。奥歯を噛んで、棕は灰色の地面を見下ろした。

愁が自分を憎んでいれば、まだまじだった。昔からお人よしだったが、ここまでだとは思わなかった。

足音の間隔は更に広がる。

俺はいつたいたいどうしたいんだ。

そう自問した途端、言われた事は確実に全うする優秀な彼が、足を止めた。意味も無く見上げた空には、雨など降っておらず、星が幾つも瞬いていた。

25 本当に正しいのは

立ち往生していた時間は、僅か数秒に過ぎない。思わず棕は身体を強張らせ、正面を睨みつけた。向こうに立ち込め沈静していた影が、こちらに歩み出てくる。

暗闇から現れた男の方に視線を向けたまま、棕は側の街灯にもたせかけるように愁を背から下ろした。そして、一步地面を踏みしめる。青いリボンをした黒猫が愁に寄り添い、青い首輪をした黒猫が棕の横に並んだ。

「流星だな。この距離で気付いたのか」

影がそう言って大気を振るわせた。それに対し、何も言わずに睨んだまま、上着に手を差し入れて銃把を右手で握り締める。弾は、まだ五発は残っているはずだ。

「君には才能があるみたいだな。そういう感覚は訓練じゃ賄えないところがある」

「お前はフリークスだな」

言葉を遮り、確信して言った。一秒あれば、相手に発砲することが可能だ。その一秒という間は、互いに命を奪われる隙に値する。それでも、更に強く握り締める。

肯定する代わりに、男が笑い声を上げた。乾いていながら本心から湧き上がるそれは、この闇に溶け込み、空气中に不気味ささえ漂わせる。それを、鋭い声が裂く。

「OC犯罪対策部だ。おとなしく手を上げる」

「そうしなければ、どうなる」

挑発するような調子で男が言った。

途端、右腕を引くと同時に棕は躊躇いなく指に力を入れた。聞きなれた音がこだまし、暗闇に白い煙が細くたなびく。両手で銃を構えたまま、微かな煙の向こうに影の姿を捕える。

「肩を狙ったのは、君のお情けかな」

血も流さずに立ったままの男へ照準を合わせたまま、棕は僅かに目を見開いた。相手がこちらへ向けた拳に注意を払っていると、彼はそれを開いた。

鉛玉がその手から滑り落ち、澄んだ音が、水面に広がる波紋のように空気を震わせる。特別な能力などを使ったのではない。血が流れなかったのは、至極当然のこと。

影が腕を曲げた。コートの袖の下にある腕は、銀色。

「お前が」

苦々しげに棕が呟く。灰色の目をした男が、にやりと笑った。

「おい、起きろ、起きろ！」

志田が肩までよじ登り、耳元で猫の身体が許す限りの声を上げ、鋭い爪をその頬にめり込ませると、愁はようやく瞼をピクリと振るわせた。

「大変だ！寝てる場合じゃないぞ、起きろって！」

「にゃうー」

「噛むぞ、さあ噛むぞ、いますぐ噛むぞ」

頬を噛み千切るといふ宣告が聞こえ、ゆっくり瞼を開けた。二匹の猫が視界の大半を埋めている。

「起きたか。大丈夫か」

「し、志田、さん……。だいじょう……。いった」

胸元にこもる痛みに気付き、前のめりになって手で押さえた。どうしてだろう、そんなに痛むような傷は無いのに。

思い出そうとした途端、波の様に記憶が戻ってきた。そうだ、鳩尾を突かれて、意識が遠くなって。それからどうなった。それからとにかく立ち上がりながら、空気を乱暴に裂く銃声に顔を上げた。数歩ぶん先で背を向けている棕と、彼の手が構えている銃、更に向こうにある人影。どこか見覚えのある人影。

銃弾がかすったのだらう、生地の切れ目から覗くその腕を見て、愁は、「ああ」と言葉にならない小さな声を漏らした。感嘆に似て

非なるため息。ずっと、ずっとこいつに踊らされていたのか。

「全部、思い通りだったんだ……」

諦めのような絶望のような、深い衝撃が、ただ一言に代わって溢れた。

「ここに君がいたのは偶然だったがな。似たもの同士だからか」

低い笑い声を聞きながら愁は右手を強く握り締め、その手が、何故かベルトに挟んであったナイフの柄にのびる。

「あいつの能力が分からない。下手に近づくな」

前を睨む愁の視界に、正面を向いたままの椋が、すつとのばした左腕が映り、制する。それを聞いて、なんとか手の力を緩めた。今の状況では、接近戦を主とする愁よりも、銃を使える椋の方がリスクは小さい。あくまで冷静に、椋が訊ねる。

「お前の目的は、何だ」

「目的か。それを知ってどうする、何が変わる」

「答える」

迷いなど無い、雹ひょうの様に真っ直ぐな声。

「そんなもの無いさ。平和ボケしている市民に、束の間の緊張とそれによる娯楽性を与えている。結果的にはそうなるがな」

目的など無い。彼の引き起こした事態にはあまりに似つかわしくない言葉に、愁は呆然とその言葉を頭の中で反芻した。胸中で呟いた様に、「娯楽性」という、緊張と矛盾しているに近い言葉を、志田が口に出し、男がそれに対して答えた。

「どこで誰がどれだけ死のうが、自分の側でなければ、一キ口離れていようが地球の裏側であろうが関係が無い。直接的な関係が無ければ、その非現実さに人は羨望さえ抱く」

死ぬほど平凡な日々、どこか見知らぬ場所で起きた事件などは、一種の刺激になりえる。そういう人間は、はつきりと拳手しないだけで決して少なからず存在している。悲しいが、認めざるをえない真実だ。

「それが、お前達の目的か」

「言っただろう、そんなものは無い。ただの結果だ」
フリークスの起こした事件に、その娯楽性という結果が結びつく。
上手く流れているようで、意味など全く無い。

「意味の無い事なんてたくさんあるだろう」そんな言葉を、愁は
唐突に思い出した。

「だけど、それじゃ駄目だ。その意味の無い事で傷ついた人は、命
を失った人たちは、一体どうなる。意味は無いで済ませられるわけ
がない。」

「それだけで……。それだけで、人を……」

死んだ人、それだけでなく、傷つき残された人たちは、どうした
らいい。なにものにも代え難い苦しみや寂しさを、どう補えばいい。
その人が死んだ事に、世界と同等、もしくはそれ以上の意味があつ
たとしても、二度と帰ってこないことにかわりはない、大きく開い
た穴は、そう簡単に塞がれはしない。

「誰だつていつかは死ぬ。たった一人が死んで、その死に方がどの
ようなものであつても、他の多数に関係は無い」

「それは、お前達のやっていることを無理矢理正当化してるだけだ
！」

「正当化、か。それは本来正しくないものを正しいものに捻じ曲げ
るといふ事だな」

愁が声を荒げ、男の瞳に愉快さが混じる。

「といふことは、君は自分達の方が人道的だと、正解だと信じてい
るんだな」

何が言いたいのかわからない。愁は眉根を寄せた。

「それなら何故、君は見捨てられた。体裁をつくろう為だけに仲間
を切り捨てるやつは、正しいのか」

「思わず、言葉を失った。頭の奥が麻痺し、まるで鋭い針に刺し貫
かれたようだった。何とか言わなければと思い、「それは……」と
呟いたが、続けられない。言葉が思いつかない。」

「我々も敵の内に落ちた仲間を切り捨てるし、それはそつちも同じ」

だろう。だが、それ以前の同胞をそんな理由で捨てたりはしない」
どちらが人として正しいのか、言わずとも分かっている。悔しい
ほど、彼の言う事は真実だ。

「正しくないものが説く正義ほど当てにならないものは無い」

正しくない、間違っている。全てが真実で出来ているなんて子供
じみた事は思っていないが、それでも、より正しい事だと信じてや
ってきた。フリークスは犯罪者なのだと、間違っているのだと、そ
う言い聞かせ、やりすぎだと思うことでもこれは誤差なのだとして
自分が切り捨てられたのも、体裁を繕う為の誤差なんだと、仕方が
無いのだと信じた。他に誰かが傷つかないためなのだ。

自らの言い分を正当化しているのはフリークスだけではない。本
部も、自分も。そして心の奥底では分かっているのに、気付かない
ふりをする。

誰が正しいのか、誰が間違っているのか。

こうなったのは、正しい事のために仕方が無いのだと逃げてきた
のに。本部も間違っていたのだろうか。そうだとしたら、今ここに
いる自分は、どうなんだ。間違いが生んだ間違いは、相殺して正し
いのか。それとも、より大きな……。

足場を失ったような感覚と共に、眩暈がする。かろうじてそれを
表に出さないよう、地面の固さを確認し、右手を握り締めた。

「お前は、間違っている」

支えるように芯のこもった言葉を、棕がはつきりと口にした。その
瞳は、真っ直ぐに相手を見据えている。

「正しいのがフリークスであつても本部であつても、どちらでもな
かったとしても、おまえ自身は、間違っている」

横道へ足を向けながら、男は自分を捕える銃口を横目で眺めた。

「そっちからすれば、そうだがな」

「今はこれで十分だ」

闇に溶け込む笑みは、棕には微塵も伝染しない。敵を追おうと数歩
踏み出すが、すぐに振り向いた。

「おまえはここにいろ。いいな」

短くそう言い、彼は返事も待たずに夜闇に消えていった。

すぐにその足音も聞こえなくなり、それでもしばらく眺めていたが、やがて愁は扉にもたれかかった。ぐじぐじしている場合ではないのに、なんの戦力にもならない自分が情けない。何気なく、ナイフを強く握りなおす。

「彼は、本当に強いな」

まだ闇を見つめながら、愁の隣に座る志田が感心したように呟く。それに同意しながら、愁はその黒い背を見下ろした。

「僕なんかより、ずっと」

「安心しろ、きみも強い」

励ます言葉に小さく笑って、その側にしゃがみ込んだ。左手で、口の暖かい毛皮を優しくなでる。

「でも、僕よりずっと努力したんですよ。言われた事は絶対遂行して、そして強くなれるように」

正しいと信じていたのは、掠も同じだ。だから、間違っていたなんていうのは、彼にとっても辛いはずなのに。

「きつと自分を信じられるんですよ。自分勝手とかじゃなくて、正しいって思ったことには迷わない」

本部の意向が余すところ無く真実だなんて、そんな馬鹿なことは思っていないはずだ。しかし、それが居場所なんだと、正しいことなんだと、言い聞かせて信じてきた。自分も同じだから、愁にはよく分かる。

「偽らない、ということか」

「苦しいとか辛いとかそういうのは隠しても、僕みたいに逆に笑うなんて嘘はしない。あとはずっと真っ直ぐだ」

「それは違う」と志田は言いそうになった。彼が愁に対して一つだけつき通している、はつきりとはしていないが、ほぼ確信できる嘘がある。だが、見上げたその瞳があまりにも澄んでいて、言い出せなかった。

「自分を信じられる人は、なによりも強いから」
愁は諦めた声音で、羨望を口にした。仲間殺しの自分が、一生得られないもの。欲しくても、手が届かなくて、飛び上がることも出来ずにいると、しだいに遠ざかるもの。

「そんな人間は、なかなかいないんだ」そう、出来る限り気の利いた言葉を猫は口にした。

遠くから足音が聞こえ、愁は立ち上がった。姿は見えないが、その間隔は短く、警戒しているようには思えない。

それなら掠か。まだ分からないが。ナイフを握り締め、街灯の元を離れてゆっくり暗闇へ踏み出した。灯りから離れるにしたがって、自分の前に出来た影が、長く長く伸びて先導する。

伸び続ける影が、向こうに横たわる巨大な暗闇へ吞まれ、大きな影に小さな影が取り込まれた。

違和感を感じ、冬の寒さに突き落とされたように一瞬身体が震える。つま先まで全身を寒気が襲う。しまったと思ったときには、すでに遅すぎた。身体が重い。上手く動かない。

手に、足に、黒い影が張り付く。その部分が重みを増し、力が加わる。

愁は、影の海に膝をついた。この能力への対処法に従い、少しでもそこを離れようとするが、持ち上げようとする足が地面に押し付けられる。動けない。倒れないのが精一杯だ。

「出て行け……。今すぐ、出て行け」
そう喉から声を絞り出すと、頭の中で男の声が返事をする。

「言っただろう。目障りなものは排除すると」
いつか聞いたのと酷似した台詞。地面についた両腕に黒が巻きつき、握りつぶすように圧迫する。左腕が軋み、普段よりもろくなっている右腕から、小さな部品が転げ落ちた。引き剥がしたくても、影だからどうしようもない。

「おい、どうした」

昔よく聞いた声と、近づく足音が聞こえ、必死で顔を上げた。

「か……か、げ……」

胸に黒がまとわりつき、まともに声がでない。駄目だ、そうも言いたい、もはや呼吸すら苦しい。

彼にしては異常なほど油断しきっていた椋が、走り寄って来る。油断は致命傷。きつと普段の彼なら察知する事もできただろうに、出来なかった。

黒い、金属を含んだ物が視界の隅に音を立てて落下した。劇鉄があがったままの、黒い拳銃。その横、愁の前方に、椋は膝をついた。首を両手で押さえ、その喉から苦しげな呻き声が小さく漏れる。

椋は首に巻きついた黒をなんとか剥ぎ取ろうとするが、影を拭う事は不可能だ。「丁度いい」と、恐ろしい声が愁の中で響いた。

意に反して、右手が、地面に押し付けているナイフの柄を握り締める。相変わらず、刃の先端は人を殺せるほど鋭い。愁の背に付いた黒が離れ、その代わりにそれは両腕に移行し、最早手の元の色は見えない。強く、強くそれを握り締めたまま、膝立ちになって椋を見下ろした。

嫌だと声に出せずに叫びながら、逆手にナイフを握り締め、愁は影の意向通りに、ゆっくりとそれを持ち上げる。途中で、その刃に自分の黒く空っぽな瞳が映るのが見えた。人殺しの瞳が、見えた。殺したくない、嫌だ、もう誰も殺したくない。嫌だ嫌だ嫌だ、傷つけたくない、どうして、こんなこと。心の悲鳴が、身体に届かない。手すらナイフから離れない。とつくに、愁は泣いていた。もう嫌だと幼い子供のように泣いていた。椋を、殺したくなかった。たった一人の兄弟に死んでほしくなかった。それなのに、最早、涙などは出ない。泣いても誰も、許してくれなかった。

抗う力がない。だけど、今は駄目だ。これ以上大事な人を殺して生きていくのには、もう一瞬だって耐えられない。殺したくない。

だが、思うことと現実が違う。抗えない力が押さえつける。殺さなければならぬ。どれだけ頑張っても、ナイフから手を離す、抵抗する力がない。

もう、仕方無いんだ。

何を思っても、自分で自分の身体を動かそうとしても、それすら出来ない。動かないんだから、仕方が無い。このまま時間に任せて

侵蝕が進めば、考える事すらできなくなる。もう、何が間違っているとか、何が正しいとか、どうでもいい。なんとか、左手が持ち上がってくれた。それを、ゆっくり右手に添えて両手で柄を握る。やはり、ナイフは離れてくれなかった。

覚悟を決めた愁の瞳が、掠を見下ろした。首に黒を纏った苦しげな顔が見上げ、その眼が大きく見開かれる。

「さよなら」

短くそう告げ、愁は両手で握ったナイフを勢いよく振り下ろした。

ナイフの刃先が、身体にめり込む。刃と皮膚の境目から、赤い血が滴り地面に溜まっていく。

「ぐ、う……う……」

空気が震えた。

手から離れそうになるナイフを握り続け、愁は力を入れる。少しずつ、少しずつだが確実に、鋭い刃が更に奥を目指す。更に強く柄を握り締める。

力を入れるごとに、その顔が苦痛に歪んだ。奥歯を噛み締め、耐え切れない痛みにも耐え続ける。歯の間から零れた、堪えきれない呻きが地を這う。

黒の抜け始めた手は、代わりに刃を伝ってきた赤色に染まっていた。幾本もの赤い筋ができる。

それを、棕はただ呆然と眺めていた。

愁が全力で軌道をそらしたナイフの刃は、持ち手自身の腹に突き立っている。そして進行形で、その身を傷つけている。

すると黒が抜け出し、棕の後ろに元の人型が音もなく姿を現したが、愁とほぼ同じ場所から血を流すその姿を、棕は見なかった。それと同時に、ナイフの動きが止まった。

「伏せる！」

怒鳴り声が聞こえ、向こうから走ってきた誰かが膝をついている二人を飛び越し、空気中に多量の砂塵を巻く。

ごうと音を立て、棕の背後で空気が焼けた。それすらも彼は、見なかった。

助けもせず、声もかけず、すぐに四万が戻ってきて、棕はじっとしていた。

「おい、こいつ、愁だよな。……何があったんだよ、どういふこと

だよ、これは」

血だらけの手で自分の身体にナイフを突き刺している愁と、呆然としてじっとその側にいるだけの椋。四万には、全く経緯いきさつが分からない。

「だが。誰が刺したんだ、さっきの奴か。それとも、まさか……」
柄を握り締めたままのその肩を支え、側に片膝をついた四万は早口でそう言つと、座り込んでいる椋を見下ろした。見上げ返しもせず、彼は短く答える。

「自分で。自分で刺した」

そんな馬鹿な。そう思いながら、四万は椋が続きを話すものだと確信していたが、彼はそれだけしか言わない。

「なんなんだよ、わけわかんねえ。早く説明しろよ！」

ようやく、短い言葉で椋がそれに答え、なんとか流れを知った四万は、無線機を握り立ち上がる。

「影渡り、だ」

代わりにその身体を支えながら、椋が呟いた。「だろうな。どう見ても」そう四万が返す。

前へ倒れてこれ以上傷が広がらないようにと、支えているその肩は、あまりにも細い。そこに腕を繋ぐ金属が収まっているなんて信じられないほど、細くもろい。

がっくりとうな垂れ、僅かに開いた瞼の奥の瞳は、何も見ていない。小さく開いた口の端から、血が糸を引き首まで伝っていた。それでも、微かな呼吸の音が聞こえる。ナイフの柄を握ったまま、彼は命を繋いでいる。

頬に痣が残り、髪にも血がこびりついている。コートの袖の下には、似たような傷がまだあるだろう。どこでそうなったかは知らないが、いわれの無い傷には違いない。

愕然とそれを見ていた椋が、「どうして」と、聞き取りにくい掠れた声で呟いた。唐突なその言葉に、通信中の四万が振り返る。

「どうして……こんな。ここまで……」

「お前はそういうとこだけ馬鹿なんだよ！」

荒げたその声に、棕は顔を上げた。

「なんでわかんねえんだ。こいつはな、お前に死んでほしくなかったんだよ！」

「でも、おれは……」

「関係ねえんだよ、お前が憎んでるだとかなんだとかは。たった二人の兄弟だろが！」

そう言い切り、四万は機械の向こうの相手との会話を再開する。もう一度、棕は愁を見下ろした。

「愁は、きみを憎んでなどいない」志田の言った言葉を思い出し、さつきさよならを言った愁を見ると、不意に、どうしようもなく悲しくなった。本当に死のうとしたのだ。あのさよならは、そういう意味だったのだ。

どうして、こうなったんだろな。

声に出さず、棕は愁に問いかけた。何故自分達は、傷つき続けなければならぬのか。愁がこんな目に合わなければならぬのか。普通の人と違う道を選ばなければならぬのか。

俺らは、いつから間違っていたんだろ。病院で殴ったときか。濱瀬夢が死んだときか。憎んでいると言い切ったときか。夕月直哉が死んだときか。そのもつと前かもしれない。捨てられたとき、あるいは……。

しかし、全てが間違いであっても、手を離すべきではなかった。犯罪対策部活動班に在籍するには絶望的なハンデを抱えて再び笑った彼を、よくやったと褒めてやる立場のはずなのに。それなのに、憎むことを選んだのは、間違いだったのか。

それなら、どうしたらよかったんだ。どうするべきだったんだ。未だに、答えが見つからない。見つかったもどうしようもないが、見つけれない。

それでも、一つだけ正しい事が分かった。愁は、憎んでいなかった。

ああ、と誰にも聞き取れない声で掠は眩く。ああ、そうだったのか。自分が憎んでいたものの正体が、ようやく分かった。握った肩は、冷たくて、暖かい。

懐かしい。とても、懐かしい声がする。誰の声だったっけ。なんて言ってるんだろ。遠すぎてよく分からない。でも、もういいや。誰の声でも、なんて言っても。だって、もう……。

その言葉に、自分の名前が入っていた。それだけで暖かい。呼ばれたんだ、それなら返事しなきゃ。

ぼやけた視界に、誰かの姿が映る。さっきの声の主かは分からないが、愁は地面に手をつけてゆっくりと立ち上がった。

途端、激痛が脳を貫き、痛みからかどうかも分からない衝撃に声を出した。痛すぎて、痛いと思えない。

「ちよつと何やってんの。寝てなつて」

目の前にいた人が気付き、袖を引きながら驚いた声でそう言った。言われた通りにはせず、固いアスファルトに膝をついて座ると、側に座っていたその人を見上げる。

「あすか、さん」

懐かしい人が、自分の顔を覗き込んでいた。彼女がいるということ、は、つまり。

「ぼく、死んで、なかった……」

「何を言うかと思えば」

努めて明るい声で明日香が笑い、その側には黒猫が二匹並んでいる。「でも死んでもおかしくなかったんだからね。もつと深く刺してて出血がひどかったら、とっくに死んでたのよ。今も十分危ないんだから、じつとしとけ」

そつと服の上から腹の傷に触れると、応急処置の後である、幾重にも巻いた布があるのが分かる。乾いた血がこびりついた生地は、そこだけ変色していた。

「安心しな。今、四万と椋が影渡りを追ってる」

椋は殺さないで済んだという意味が、その言葉に含まれている。よ

かったと言葉に出さず、愁は小さく安堵のため息をついた。

「まったく。ほんつとに馬鹿だな、あんたは。なんで自殺みたいな真似しようとしたの」

呆れた声に、「だって」と子供のよ様な言葉を返した。

「他に、どうしようもなかったから」

「それを考えなさいって言ってんの。何事も応用力なんだから、応用力」

無茶な事を言う。しかし、明日香も無茶だと分かって言っているのは承知の上なので、愁は反論しなかった。

しんとした沈黙が降りる。ここはビルかなにかの裏側なのだろうか、細い路地の向こうの方にある道路を車が横切っていくのが、行き交う光でなんとか分かる。だが、空気の流れる微かな音を含んだ静寂がそこには満ちている。

不意に、「捕まっちゃいましたね」と、笑みを貼り付けて愁が呟いた。明日香はそれに答えない。いや、答える言葉が無い。そして黙ったままの彼女を、空っぽの瞳は見上げない。

柔らかい静寂を、か細い猫の鳴き声が遮り、その声の主であるク口が、愁の膝に頭を摺り寄せた。青いリボンが薄闇の中で、本来以上に存在を表現して揺れる。「これ、ずっと同じものなんですよ」その青とともに、黒い背を撫でながら、まるでひとりごとのように愁が言った。明日香は勿論、それに見覚えがあった。野良に混じらないよう、愁に渡す前にそれを子猫の首に巻いたのは、彼女自身なのだから。

「なんでこんなものずっとおいとくんた。首輪にでもしろって言ったでしょ」

明日香も同じ様にク口を見下ろし、愁はゆっくり首を横に振った。その青いリボンは、彼女の優しさそのものに思えて、無機質な首輪などに代えたくなかった。言ってもきつと否定されるだろうから、言った事はないけれど。

「明日香さん、わざわざ来てくれたんですね」

「当たり前よ。連絡あつたしね」

言葉の向こうにある意味を汲み取れず、いつものように笑った顔をする愁を、彼女は見下ろす。そうじゃなくて、と、彼は再び首を振った。

「他の誰かだったら、きつと僕はもう、ここにはいなかったから」

「なに。何が言いたいのか」

「僕にだって分かりますよ」

ひどく、弱々しい笑顔。

「殺してもいい人間だつてぐらい」

「……なに言ってるのか」

明日香の顔が傍からは分からないほどに引きつり、それに対する空っぽの眼は、やはり何も見ていない。

「そんな指示、どっからもおいてない。本部が、フリークスみたいなただの人殺し集団と一緒に言いたいわけ」

僅かに声が震える。緊張でもないのに、こんなこと、彼女にとっては何も数えるほどにも無いはずなのに。

「それに最後の一人が捕まれば、あんたは元の場所に戻れるって知ってるでしょ。何で殺す必要があるのか」

「障害は、無い方がいい。それぐらい知ってますよ」

何を言っても、あの影渡りが捕まるまでは、邪魔者にしかなり得ないのだ。邪魔者、つまり、本部にとっての障害。出来る限り排除するべきもの。

「僕はあのままだったら、確実に死んでた。他の誰かが来ても、ほつとかれるはずだった」

勝手に自分を刺したのだから、誰のせいでもないし、愁一人が消えただって命に支障の出る者はいない。ただ、助けに来たという表向きで、何もせずにいれただけだった。が、明日香はそれをしない。他の誰よりも先に、駆けつけてくれたのだ。愁にはそれが泣きたいほど嬉しくて悲しい。

「もしかして、死にたいのか」

息の詰まる思いで明日香が問いかけたが、俯いたままの彼からの返事は無い。

だが、ひとり続ける明日香の声は穏やかだった。

「そう。生きるも死ぬも、あんたの自由だ」

青い首輪の黒猫が、澄んだ瞳で明日香を見上げる。そして口を開きかけたが、声を出さずにそのまま閉じた。

「なら、殺すか生かすかも私の自由」

その言葉に、愁は顔を上げる。その表情が、今にも泣きそうな頼りなく幼い子供のようになり、一度ぎゅっと口を引き結ぶと、悔しさを混ぜて目を伏せた。

「分かるでしょ、明日香さんなら。僕の言いたいこと」

「はつきり言いな。分かんないから」

「他の人と違うことしてるんですよ。それも、批判される側の」

彼女は分かっているのに分からないふりをしている、それが悔しいのか、それとも焦っているのか。自分でも分からないまま、訴える。「分かってるなら、そうしてくださいよ。僕はもう、そっちの人間じゃないんだから、何も言わないから。このままの方が、その方が僕はよっぽど嫌だ。明日香さんにとっても、いいはずないんだから、だからもう」

殺してくれなんて直接には言えないが、自分を助けた事は、明日香の行く先へ確実に悪影響をもたらす。それが何に変えても、嫌だった。

「一度助けたものを、何でまた壊さなきゃいけないの」

そう言う声が、優しすぎる。とても優しく、残酷だ。

声を上げすぎて、忘れようとしていた傷口が存在を主張しだし、俯いて抑えた。見下ろした手元にナイフはない。

「あんたのお得意の刃物ね、一本出したら三回殴るから」

冷酷な言葉に、コートの裏の刃を出す事はできなくなった。全力すら出せない今、素手で明日香に適うとはとても思えないし、きつと一回で気絶する。

軽い口調とは裏腹に、長谷川明日香は胸中で愕然としていた。自分がそんなことの出来る人間ではないと十分知っているはずなのに、その上で頼んでくるなんて、自分で自分を殺そうとするまで追い込まれているなんて、思っていなかったから。長い付き合いだから、彼のことはよく知っていると思っていたのに、過去に植えつけられた振り払えない自虐性を、ここまですつと押し込めていたのにも気付かなかつた、愁の事は何も知らなかつたのだ。

「バカだなあ、あんたは」声が震えそうになるのを、なんとか抑える。

「そう簡単に死ななくていいんだ。愁だつて、みんなと同じ様に、生きてるんだから」

「……そうですね。でも僕、馬鹿だから、そう思えないんです」
今にも消えてしまいそうな声が、うな垂れたその口から空気中へ拡散する。「そう思わなくていいってことも、分かってるんです」黙つたまま、明日香はその言葉を受け入れる。

「でもどうしても後ろめたくて、そんな自分が嫌で。そういう自分だから、息をするのも辛くて、そう思うのも嫌になつて」

そんな悪循環が出来上がってしまったているのを、愁は知っている。知っていて何も出来ないから、余計に辛い。

明日香は言葉を失つた。言いたいこと、言うべきことはたくさんあるのに、本当に救つてやれそうな台詞は、何一つ見つからない。

「愁は、本当に、死にたいの。本当はどうなの」
ゆっくり、確かめるように訊ねた。

空白の時間が流れる。返事を見つけているのではなく、返事をする勇気を捜し求めているのを知っているの、明日香は何も言わな

い。
「……死にたくない」
消えてしまいそうな、本当に細く小さな声で、愁は確かにそう呟いた。

掠に刃を向けたとき、本当に死のうと思つた。死にたくないが、

死にたかった。発作的なものではなく、蓄積された痛みが気付いて、それが怖くなって押しつぶされそうで、生きられないと思っただことも何度もあった。死にたくはないし、ひたすらに恐ろしいが、ただ、それしか道が見えない。ごまかすためにそれを裏返して笑って、痛みは増える。それを知っていても、循環を止める術を未だに知らない。それでも。

「僕なんか、本当にどうしようもないけど、邪魔になるけど、いない方がいいんだろうけど……。息をすることだけ、許してほしいんです。誰も見なくていいから、隅っこの方でもいいから、何も無くても、生きていたいんです」

掠れ、震える声でそう言った愁の両肩に腕を回して、「大丈夫」とだけ明日香は呟いた。今まで何度も愁が使った、周りを騙して自分を隠すための言葉を、無根拠で無責任で表面上の安心感だけを与えるその言葉を、本当の意味で。単純な本来の意味だけを込めて、呟いた。

腕の中の命が、彼女の名前を呼ぶ。

「明日香さん……。助けて、ください……」

今まで人に言えなかった言葉。助けが必要な弱い自分を認め、相手にそれをはつきりと示すことに作用する言葉。呆れられ、見捨てられるのではないかと、それがただただ怖くて恐ろしくて、必要なときでも使えなかった。心を潰してしまう痛みなど、閉じ込めてしまえば問題ない、いつか昇華されるだろう。そう思えば思うほど、誰かに助けを求める事などできない。昇華なんてされない、蓄積するだけだと、随分前に気付いていたが、最早自分にすら、まだ大丈夫だと嘘をつくようになってしまった。

積みもり積もった痛みの先にあるのは、耐え難い孤独と悲しみ。そして更にその先にあるのは……。本当は望んでいない事。しかしこのままでは、避けきれない場所。だから、助けて欲しい。どうか。どうか、見捨てないで欲しい。

そんな、蝋燭の炎のような微かな希望と、全てを多い尽くす暗闇

を目の前にして、明日香は答える代わりにぎゅっと腕に力を入れた。座ったまま抱きしめても、愁は俯いたままで、ただ生きる為だけの呼吸をしていた。手の下に感じる背の温もりから、ただ命のあることだけが伝わってくる。まるで眠っているかのように、静かに、穏やかに。

「愁は、私の部下だ。居場所なら、ちゃんとある」

こみ上げる悲しさを、その温もりで支えながら、明日香はそう告げた。

「辛かったな」

訊ねるのではない、深いひとりごとの後、「ごめん。気付いてやれなくて」そう繋げると、愁は僅かに首を横に振った。泣いてはいなかった。涙は出なかった。言葉も出なかった。

だけど、それをずっと見守っていた猫は知っている。目を覚ます前、眠っているとき、閉じたままの愁の左目から一筋の涙が流れ、頬を伝った事を。それを明日香がそっと拭ってやった事を。

長谷川明日香は、死んでしまうから止めると言った。全くだ。傷がこんな短時間に塞がるわけがないし、現に死ぬほど痛い。

だけど、これが最後であっても戦わなければならない。犯罪対策部だとかフリークスだとか、正しいとか正しくないとかそういうことではなく、生きる為に必要なだから。自分の意志なのだから。その為には死んだ方がいい。間違っても死にたいのではない、死ぬ気で、生きる場所を取り戻すだけ。

明日香は呆れていたが、やがて納得してくれたようで、そう決めたんならしょうがないと、愁を見下ろした。愁はいつものようにどこか笑っているような顔で、いつものように「大丈夫」を繋ぐ。その言葉が本来の意味なのか、いつもと同じ意味なのかは分からない。ただ、約束をした。生き残るとだけ約束させて、明日香はナイフを返した。

夜は明けない。長い長い夜は、まだ終わりを告げない。深い闇を越えて、自らを刺した場所一帯に戻る道すがら、遠くの喧騒を耳にする。今夜が山みたいだから、あちこちで衝突が起きているのだろう。あまり出くわしたくない。

「走れるのか」

訊ねてから、何を言ってるんだと頭の中で志田は自分に突っ込んだ。今現在、進行形で走ってるじゃないか。

返事をするべく塀の上へ顔を上げた愁は、不意に後ろから聞こえた音に、その場を飛びのく。暗闇の内にいる相手を狙った弾が、二メートル弱ほど手前で、コンクリートに跳ね返された。

見つかった。見れば分かる事を脳がばやく前に、側の角を曲がり、駆ける。OCでもない不良少年などに、構っている暇は無い。

しかし、正直、走るのはきつい。決して軽くない傷を無視し、た

だ出来るだけ早く前へ進むことだけに集中するが、ごまかしきれない汗がこめかみを伝った。暑くなんてないから、冷や汗だろうか。暗いので、志田には気付かれていないようだが。

こんなところで捕まってどうする。自分で自分を叱りつけ、どこか見覚えのある住宅地をひたすら駆け抜けた。

嫌でも、後ろで響く大声と、幾つもの足音が聞こえる。

いきなり、横から伸びた手に袖を掴まれ、ぐいと引つ張られた。かなり驚いたが、暗闇に居る相手はそのままどこかの住宅の庭へ引つ張り込み、塀の脇を小走りに進む。わけが分からないが、追ってくる音が一枚の塀の向こうを通り抜けていくので、そのままついて行った。

ようやくその誰かが止まり、同じ様に愁も立ち止まった。息切れして、ペースもなにも滅茶苦茶になった呼吸を必死で落ち着けながら耳を澄ました。喧騒は大分遠ざかっていつている。

「なあ、あいつら敵だったんだよな、これでよかつたんだよな」
どこか不安げに訊ねる声に、すぐには声が出せず、こくこくと頷き、やっと愁は顔をまともに上げた。しかし相手の顔を見た途端、信じられないと目を見開き、数度瞬きを繰り返す。「ゆうすけ……？」
と、自信なさげに訊ねた。

一度頷いた彼に、

「え、でも、なんで」

などと声を出し、足元に現れた気配を見下ろした。見覚えのあるコーギー犬が、激しく尻尾を振って、ワンと一声哭く。「こら、イブ」と祐輔が軽く叱り、犬に怯えたクロクが、志田の乗っている塀の上へ駆け上がった。しかしイブに、怒られたという自覚は全くないらしく、嬉しそうに尾を振りながら、後足で立ち上がって歓迎してくれる。

「おまえ、ちゃんと、生きてたんだな」

飼い犬を見下ろして少し俯いたまま、祐輔が呟いた。それに対し、うんと頷くと愁は友人の方を振り向く。

「全然大丈夫」

「嘘つけ」

「へ、嘘って」

想定外の言葉に予想外の声を出した。

「顔とか、血ついてるじゃねえか。それに、腹が」

「ああ、腹ね。大丈夫だよ、生きてるから」

生きているが全然大丈夫じゃない傷口をそっと抑え、愁は笑った。表についているのは乾いている血なので、手にはつかない。それが少しでも説得力になればいいが。

ようやく上目遣いに視線を上げ、痣と血の痕のついた顔と目を合わせる、祐輔は、ぱっと頭を下げた。

「な、何やってんだよ」

「ごめん！」

戸惑う愁に、地面を向いたままぎゅっと強く目を閉じ、苦しそうに続ける。

「おれ、そんなつもりなかったんだ、裏切りたくなかったんだ。でも、家族を殺すって言われて。こんなの言い訳にしかならねえけど

……」

家族を捨てるか友人を捨てるか、祐輔にはその二者択一しかなかった。

「おれのせいで……。もし、もし愁が死んじまったらどうしようって……殺されてたらって思って、滅茶苦茶恐くなって」

握った拳を更に強く握り締める。

「ごめん。本当に、ごめん」

不安の中、ずっと心で思っていたことをやっと言葉にしても、祐輔は頭を下げっぱなしだった。もし逆の立場だったらと思うと、上げられるわけがなかった。

頭部に軽い衝撃が走り、「いて」と思わず声に出して祐輔は視線を上げた。彼の頭を左手ではたいした愁が、わざとらしいため息をつく。

「がっかりだ」

と、じとつと彼の方に視線を向け、呆れたように呟いた。祐輔には弁解も何も出来ない。

「こんぐらいで謝る人間だとは思わなかった」

驚いてこちらを向く祐輔とは反対に、今度は愁が下を向いて芝生を軽く片足で蹴る。乾いた音が響く。

「自分が八割ぐらい悪くても謝らない人だろ」

「そんなことねえよ」いつもより元気のない声に、「じゃあ冗談つてことにしとく」と愁は返して顔を上げた。疲れてはいるが、笑っていた。

「間違つてなかったんだよ。あれでもし祐輔が家族を死なせてたら、その方が腹が立つ。十回は本気で殴ってた」

「愁が本気で？十回も」

「やったことないくせに」と言つて、似合わない台詞に祐輔は笑つた。喧嘩も殆どしない彼が、そんなに人を殴るのなんて見たことがない。想像できないから、可笑しかった。それが半分、安堵が半分の笑顔のまま、予期せぬ来客にハイテンションになり飼い主の腰に前足をかけて二本足で立っているイブの頭を、祐輔は軽くたたいた。

「タイミングが悪くて申し訳ないが、もう誰もいなくなったみたいだぞ」

咳払いと共に低い男の声がこだまし、塀の上を見上げて、愁がそれに対応した。

「なんか言つたか」空耳にしては異常にはつきりした声を聞いて、祐輔は愁に尋ねるが、彼の声ではないのは明らかだ。

「いや」

そう言つて首が振られると同時に、再び咳払いが聞こえる。

「これこれ、この猫。青い首輪の方」

「これつて言うな。間違つても中身は人間だぞ」

愁が示す、青い眼と首輪の猫が訂正した。どこにでもいそうな、ど

うみてもただの黒猫が、肉球のついた手で猫パンチの仕草をしている。猫パンチなのに、喋っている。

「ねね。ね、ねこ、ねこが」

「猫が」

自分を指差す祐輔を、急かすように、志田が塀からぐつと身を乗り出す。大きな海色の瞳が見開かれ、少年を映す。

「ねこが、ねこがしゃべったああーっ！」

イブに負けない声量で祐輔が絶叫し、

「このぐらいは驚いてもらいたいものだな」
うんうんと、どこか満足げに黒猫が頷いた。

『もう一度、コード1040A、ランクS、影渡りについて確認しておく。生態の影、もしくはそれと重なった影に入り込み、その対象を乗っ取る。早いものでは三秒以内に開始する事が可能。初期には筋肉の動きを捉え、時間経過と共に神経、思考まで到達する。特徴として、主に対象者の表面が影のように黒ずむ。対処法としては、影の出来ない光の下へ移動し、建物等の広い影には出来る限り入らないようにすること。取り合えず、光だ。自分の影を伸ばさないように気をつけろ……』

無線機から流れる、通信班の高梨が全員に向けている忠告を聞きながら、発砲した。前方に固まっている奴等の隙間をすり抜け、その向こうにあったドラム缶に弾が当たる。

広い影に入るなどというのは、現時点で無理だ。後方以外の三方向を高い建物に囲まれたこの場所には、当然真っ黒な影が敷き詰められている。しかしそんな焦燥など表には全く出さず、勇敢にも後ろから殴りかかってきた誰かの拳を、僅かに身体を反らして避け、頭の横から伸びた腕を掴むと、掠はそいつを前へと投げ飛ばした。自分よりも大柄だが、相手が自らつけた勢いを利用すれば、これぐらい出来る。

投げ飛ばされた誰かは、前にいた仲間らにぶち当たり、似たような声を上げながら三人ほどがもんどりうって倒れた。

別に誘導されていたわけではないと思う。ただ、自分の注意力不足と、ここ一帯の土地勘不足が原因だろう。しかし、地図はちゃんと覚えこんだはずだし、一度集中して覚えれば、迷ったりするなんていう支障は起こらない。現に、今までそうだった。今も迷ったわけではない、行き先をよく考えられなかったのだ。影渡りのことを考慮すれば、わざわざこんなところまで来るなんて真似はするべき

ではなかったのに。

何を、どうして焦っているんだ。冷静に自問しながら、残りの装填数を計算する。何だか分からないが、焦っても無駄だ、集中しなければ死ぬ。死ぬ気にならなければ死ぬ。

周囲に何人いるのか、気配はあるが正確な数は分からない。やはり素人らしく気配を殆ど殺せていないが、多勢に無勢。決して有利ではない。

だが。棕は、闇よりも深い瞳で、周囲を見据えた。大丈夫だ、これぐらい。無理だと思っから無理になる、出来ない諦めるから出来なくなる。それほど現実が単純でない事は知っているが、間違ではない。そんな不毛なことをしても、意味がない。

前から一人、後ろから二人。避けた所で右から野球のバット。それが地面を叩いた音で、金属製だと知る。

左から襟首を掴んだ相手の腕を逆に握り、ひねる。向こうの身体が空中で一回転して背中から地面に叩きつけられた。

「くそつ、ガキのくせに」

誰かが毒づくのを聞きながら、足払いをかける。これでガキなら、自分達も似たようなものだろうに。

緊張の合間に、すつと素早く息を吸い、足を引く。と、誰かが落としたものか、それともただの石ころか。何かを踏みつけてバランスが変わった。

隙を与えない腕をよけるのは難しかった。それも性質たぶの悪いことに、その手は扱い慣れないナイフを握っていた。

鋭い痛みが走り、切り裂かれた棕の左頬から零れた赤い血が、宙を彩った。そちらに意識が向いた瞬間、左肩に衝撃が走る。殴られたのか、蹴られたのか。それも分からず、地面に両手をついたまま、棕は誰かを蹴り上げた。立ち上がりながら、もう一度。距離をとりながら、威嚇の為に一度発砲。乾いた音。線のような傷口から、赤い血が流れる。

こんな傷。構うようなものじゃない。

もつとひどい怪我を、負って負わせてこの目で見てきた。これくらい、どうってことはない。

足元で、何かが爆ぜた。暗くて目には見えなかったが、音だけで十分、それが何かは分かる。

どこだ。周囲の闇を見渡す。どうやらプロではなさそうだ。手馴れた専門家なら、初めのチャンスで確実にしとめる。それがいないのが、唯一の救いだ。接近戦は一時中断らしい。仲間に撃たれたいもの好きはいないようだ。

もう一度、今度は左数メートル先で銃弾が跳ねる。そして今度は、更に近くで。

あれだ。銃弾の直線状には、必ずその相手がいる。建物に引っ付いている錆びた階段、その下の影に僅かに蠢く影。迷わず照準を合わせ、相手の頭上に向けて、引き金を引く。澄んだ音が響き、兆弾した可能性が生まれたが、そこまで気にしてはやれない。

後ろから、棕の顔のすぐ脇を鉛玉が通過する。

しまった。銃を持っているのは、一人とは限らない。

咄嗟に振り向いた。

しかし、すぐには見つからない。パンと破裂する音が響く。

大きく目標をそれた銃弾が空気を焼き、ドサリと音がして、それを飛ばした誰かがくずおれた。何故かは知らないが、その狙撃手は、戦闘不可能な状態に陥っただけらしい。

聞きなれた音に振り向き、一度では懲りなかった階段下の相手へ向けて、再び引き金を引く。腕をかすった程度なのに、そいつは大きな声を上げた。

棕の背後から、跳ぶように誰かが駆けて来て、あっという間に距離をつめた。勢いあまって、ドンと彼の背中に自分の背を打ち付ける。敵ではなさそうなので、棕は顔だけ向けてその影を見下ろした。

愁だった。流石に苦しいのか、息切れしながら左手で腹の傷口を押さえている。先程棕を狙った者を昏倒させたその右手に、ナイフを握っている。それに血はついておらず、まだ誰かを斬りつけては

いないようだった。

「何で、わざわざ戦いに来たんだ」

弾切れになった銃の弾倉を素早く入れ替えながら、椋が訊ねる。

「あいつを捕まえないと、僕はもう、生きられないから」

微かに肩を上下させ、苦しげだがはつきりと愁はそう返した。自分の駆けてきた暗闇を見つめて。

「ここは俺だけで十分だ」

「十分じゃない」

頬を流れる血が、遊底をスライドさせる手にポタリと落ちる。椋は僅かに顔をしかめた。

「お前、死ぬぞ」

一呼吸、間を空けて答えが返る。

「死なない。死ぬ為じゃなくて生きる為に来たんだから」

「理屈になつてない」

「ここで逃げるくらいなら、死んだほうがいい」

何の根拠もない理由。だが、今更何を言っても無駄だという事は、椋にはよく分かった。

前に、粗暴そうな若者の影が幾つも見え、隠そうともしないその空気は、分かり安すぎるほど殺気立っていた。しかもう、後ろに注意を計る必要はない。

「俺、やっと分かったんだ」

愁がぴくりと反応したのが、背中越しに伝わる。

「俺が憎んでいたのは、お前のしたこと、お前じゃなかったこと」

前を見据えたまま、椋はそう呟いた。確かに自分は、愁が夕月たちを見殺しにしたと、彼らがそのせいで死んだのだと、思っている。今もそれは変わらない。

そのことをずっと責め続けていた。だが、ようやく分かったのだ。その過去を憎んでいても、愁自身を憎んでいるわけではない。

愁は返事が出来なかった。なんとさえいいのだろうか。よかつ

たなのか、それとも、ありがとうか。単純に、ただただ嬉しいが、手放しに喜べる状況でない事はよく分かっている。だから、声も出せずに頷いた。暖かい生きた背中が伝えてくれるのを願って、二度、三度と頷いた。

「怪我、大丈夫？」

始めに聞くべきだろうと思ったが、気になっていたので、改めて愁は問いかける。ワントンポ遅れて、「ばか」と椋が返事をし、振り向く気配に、首を曲げて振り返った。

「お前より先に、やられるわけないだろ」

椋も、背を向けたまま振り返り、愁を見下ろしてそう言った。暗く見えにくかったが、その顔が、昔見た懐かしい笑顔によく似ているようで、愁も笑った。苦しさなど、もはやどこにもなかった。

30 - 1 過ちを知らない者は、いつだって側にいた

強かった。地を埋める黒い影を蹴りつける二つの影は、他のどれよりも強かった。

その間、闇を自由に駆け回る二匹の黒猫が無数の影に飛び掛り、鋭い爪が闇に閃く。その内の一匹は、常に飼い主の半径三メートル以内に納まっていたが。

「ね、猫が喋った!」

「猫が喋って何がおかしい、何が不満だ、おい、言ってみろ」

齧り付いた相手に頭突きをくらわせ、その反動で後ろへ回転すると、志田は見事に着地した。

「猫が喋るのはおかしいですよ」

「おかしくない。実際喋ってるじゃないか」

「志田さんは喋るけど」

「志田という名の猫は喋るんだ」

「あれ、猫じゃないんですよね」

「猫になってるが、わしはわしだ」

なんかよく分からないし、咬み合ってない。そんな掠の思いをよそに、愁が地面に投げ倒した相手の足に、黒猫がかっぷりと噛み付く。なるほど、確かに猫の歯は痛そうだ。

それにしてもきりがない。こいつらは、この諦めの悪さをもっと別のことに向けられなかったのだろうか。

屈みながら相手の腕をかくぐり、左手でその胸を突きながら、掠は右手で銃を構えた。引き金にかけた指に力を込めると同時に、

「愁!」

と叫ぶ。

「わかった!」
返しながら壁の方へ駆け寄って地面を蹴り、もう一度壁を蹴って飛び上がった。

壁に張り付いている錆びた簡易な階段の継ぎ目を、幾発かの銃弾が直撃し、愁が飛び降りた衝撃で、めきりと音を立てた。的確に部品が破壊され、それはコンクリートから剥がれていく。

うそだろおいまじかよと、慌ててその下にいた者たちが逃げ出し、愁は落ちていく階段の上を駆け、その向こうへ飛び出した。状況を理解しきれしていない者を上から殴り倒し、着地して蹴り飛ばした。彼らの持っていた銃が音を立てて地面に落ち、愁の頭の上にクロが飛びつく。

「わたべえ！待てやこらあ！」

「うるっせえ、今何時やと思っとなだてめーは！」

この騒動を一瞬かき消す騒ぎが、通りの向こうから急速に近づき、掠たちがいる巨大な影の塊の前で停止した。ということは、二人ともただ理性を失っているわけではないらしい。

「おいガキ共、今すぐ手え上げて降伏せえ！」

渡部わたべの言葉に、もちろん誰も従わない。

「嫌だつて言うんならな、この吹き溜まりこいつが焼き滅ぼすぞ！」

「お前は結局人任せか、んの前にできるかそんなもん！」

「やれつてんだよ！」

「できねえっつの！」

「やればできるやろが、ドッキリ火種野郎が！」

「人をばけもんみたいに言うんじゃねーよ、お前焼き殺すぞこら！」

必要以上に苛立っている二人に、仲間割れかと全ての人間が振り返りその成り行きを眺めた。が、当然の如く、その挑発的な台詞にすぐ反応が起こり、なんだこらやる気かてめーらといった悪態が周囲の建物にぶつかって反響する。

「これは何かの作戦なのだろうか」

「いや、素のままだと思いますけど」

作戦だとしたら、これがどうプラスに発展していくのだろう。しかし興味深そうに目を光らせる志田の台詞は、さりげなく否定された。好奇心で光る志田の目とは対照的な瞳で、掠も片手に銃をぶら下げ

て突っ立ったまま、彼らをただ見ている。ホールドオープンしているその銃倉を入れ替えようともしない。

四万たちの方へ向き直った愁は、あつと声を上げた。流石にそれより早く後ろの影に気付いた二人が、ぱつと振り返り、渡部が銃を構える。

「それ、そいつが影渡りです！」

愁の指が、真っ直ぐその男に向いているのを見て、銃の引き金に指がかかった。政府機関として、最後の言葉がかけられる。

「OC犯罪対策部だ。手を上げて降伏を認めろ」

最高ランクの相手へ対する反射的な緊張を、はつきりした言葉で押し隠しながら渡部が告げる。

「今更渋るなよ。お前はもう包囲されてんだ」

「みたいだな」

そう言う背後に、銃を構える者が幾人が並んでいる。どう見ても逃げ場はないのに、この余裕には反対に焦燥を募らされる。

「なかなか感心したよ」

「は？」

「全国の違法者をこの速さで取り締まれるとは予想外だった。思っていたほどの無能さではなかったようだ」

この状況であからさまな挑発に乗るほど、子どもではないし、そんな精神じゃ今まで生き残っていない。

「退屈な国民のちよつとした非現実くらいにはなっただろう。もしかしたら更に深いものを望んでいる者もいるかもしれないが、安心してくれ、我々はその要求に率先して答えよう」

「いい加減にしろ。祭りは終わったんだ」

四万の低い声。結局、彼らの遊びにつき合わされたのだということ。は誰もが知っている。「フリークス」は、子どもと同じだ。ただ壊したいから壊し、殺してみたいから殺す。しかしそれは、誰でも持っている破壊衝動、心の奥の暗い部分、そのくせ殆どの人が非常識だといって隠している場所。彼らはそれを隠さないから非常識だと

いわれる。ある意味、「フリークス」と「一般市民」の差は紙一重なのかもしれない。だが、自分の持つ非常識を代弁された気がして、常識に浸っている市民は興味本意でその非現実を安全な場所から眺め、恐ろしいと言いながらもスリルのようなものを感じる。いわばジェットコースターのような、安全性が保障された上での恐怖。本当に恐ろしさを感じるのは、その保障が切れたときだけ。

だから、それを取り締まる事が、時々酷くうすっぺらく感じられる。命を張るような価値が本当にあるのか、傷つく意味があるのか。もしかしたら、間違っているのは、自分たちなのかもしれない、対策部のだれもが一度はそんな錯覚に陥り、抜け出せなかった者は、辞めてしまつか、精神が耐えられなくなってしまうか。

失い続けるこのいたちごっこに、意味などあるのだろうか。終わりには、来るのだろうか。

だが、誰かが食い止めなければならぬ。一部の人間であっても、無関係に傷つけられていいはずはない。動機は、ありきたりな正義感でも、ただ時間を埋める為でも、なんでもいいのだ。許されることではないから、辛い思いをする人がいるから、そして自分の居場所を守る為に、対立する。彼らに諦める気がないのなら、真正面から向かってやる。

銃口の先で、男がごく自然に足を踏み出し、それに合わせて渡部も向きを変える。歩みはいたってスローで、この状況でなければ、なんら不審な点はない。

闇を照らす街灯の元、ゆっくりと影が動いた。ゆるく伸びた渡部の影が、街灯のそれと重なり、それを男の片足が踏みしめた。途端、「離れる！」

四万が片手で思いきり渡部を突き飛ばし、その影が大きくぶれる。急激な寒気に襲われ、強張った渡部の手から滑り落ちる銃を受け止め、発砲した。一発、二発。五発目で弾切れ。その半数ほどは本来なら傷を与えているはずだったが、あり得ないはずの金属の四肢に遮られた。

弾切れを知らせる無慈悲な音が響き、四方が焦りを顔に出す。ロード。とてもじゃないが間に合わない。向こうにいる仲間は狙いをつけにくいだろうが、すぐ発砲するだろう。だが、その弾が届くだけの時間があれば、十分こいつは。

絶望的な一瞬の思考の元、次の行動に移ることを脳が決定する直前、たどり着いた銃弾が男の肩口を掠めた。

あのバカ、これじゃ狙ってくれと言ってるのと同じじゃないか。

あんな一面の影の中じゃ、どこにも逃げ場はないのに。そんな考えが全ての思考を遮断する。

分かっているはずなのに、棕は立て続けに五発を弾き出し、残りの一発を、愁が向かっている先の建物の窓へ向け、それを割った。鋭い音が響き、破片がきらきらと僅かな光をはねかえして宙に舞う。

彼の誘い通り、男は最後の鬼ごっこにのった。

30-1 過ちを知らない者は、いつだって側にいた（後書き）

ホールドオープンとは、銃が弾切れした状態の事です。スライドが停止して、弾切れを知らせるそうです。

30-2 過ちを知らない者は、いつだって側にいた

やっぱり機転が利く子だと、彼の後を追いつながら志田は改めて感心する。挑発通り、標的を変更した相手を、三方向を囲む建物の屋上に、ついさつき据えられた強力なライトの光が照らし、その影を持ち主自身の足元にとどめている。戦闘の合間に行っていた僅か数秒間の通信で、状況説明をしていたのだろう。右手で銃を、左手で無線機を握り、同時に使う人間なんて今まで見たことがなかった。やはり長生きするものだな。

影を通して憑依されるのならば、明るい方に向かうのが常識だろうに、わざわざ閉鎖された建物内へ向かうなんて。きっと作戦なんだろうが、危険すぎる。なんだかんだいって無鉄砲だ。まるで愁みたいたと、志田は状況に似合わず、おかしくなった。

愁が窓枠へ飛び込み、直ぐ後ろのクロが続いた。薄暗い内部の壁に影が映り、いっそう濃い黒が浮かぶ。

「突っ切れ！」

志田と共にガラスを踏みしめた椋が、指示しながら後ろの影渡りへ銃弾を打ち込む。淡い光だけが差し込むここでは、全てが相手の攻撃範囲だ。自分のものと他とを遮断する光はない、攻撃を遮る唯一の方法は、憑依するまでの僅かな隙を与えない事だけ。そしてそれが出来ると思ったから、椋は指示を与えた。

一、二、三……。銃声を十数えたところで愁は振り返り、「六回！」と叫んだ。

模糊とした闇を、鋭い刃が裁断する。隙間のない一定のタイミングでそれが六本飛来し終えたと同時に、弾倉を入れ替えた銃で、再び椋が相手を狙う。もし止まってしまうえば、能力を使うことに集中されれば、勝ち目はない。

弾の数も、刃の数も限られている。切れた時点で、負けだし、一

度でも外せばやられる。無機質な廊下を駆け、ドアを蹴り開け、交互に攻撃を仕掛け続けた。

どこかの事務所なのだろうか、並列した机の合間を疾走していると、愁の少し先にあるペン立てが僅かに振動した。顔を目掛けて跳んできたボールペン類を右手で弾くと同時に再び十を数える。五本投げると言葉で示しながら振り返る。

どこだ。ペンの先に気をとられ、一瞬だけ集中が途切れてしまった。「左だ！」と、叫ぶ夜行性の猫の声。言われたとおりに投げつける。

ドアを蹴りとばし、最後の廊下の先にある窓を全力で目指す。既に、傷の痛みも心の悲鳴も、聞こえなくなっていた。透明な心は、ただ真つ直ぐ、その先へ向かう。他には何も無い。

飛び散ったガラスの破片は、星の最後のように、一度、強く輝いて消えていった。その前まではガラスという物として存在し、後には飛び散ったガラス片として汚れてゆくそれらが、きらきらと光を反射し、ひとつひとつが存在を強く証明して散っていく。

かなりの銃弾を消費した掠のすぐ後に、影を渡る男が窓を飛び越え、地面に着地する。

しかしその足元にある影は、他のどれとも繋がっていないかった。ただ背後の壁に、一部が張り付いているだけ。

「朝か」

淡い光の中に、嘆息とも、かといって安堵ともとれない、ただ事実を告げるだけの声が溶け込んでいく。

朝が来ていた。建物に囲まれていたときには、誰にも気付かれなかった朝日が姿を現し、低い住宅地を柔らかく包み始めている。寸分の狂いなく、過ちを知らず、全てを照らしてきた太陽が、そこにある。

太陽を真正面に捉え、自分の影を出来るだけ、背にした壁にだけ映るようにし、愁は左手で握ったナイフを横の男に向けていた。彼を挟んだ向こうで、同じ様に掠が一発だけ弾の残った銃を右手で構

えている。そして彼の足元には青い首輪をした黒猫が、自分の足元には青いリボンをした黒猫がいる。

前髪の間から差し込む朝日に、愁は僅かに目を細め、視線を向けた。一度の間違いもしたことのない存在が、その先でいつものように、終わりと始まりを告げていた。

エピソード

ほどよく、というには少し温まりすぎているベンチで、黒猫は大きな欠伸あくびをした。この身体は人間よりも地面に近いぶん、暑さを感じやすい。本格的な夏に向けて日かげ探しを身につけなければならぬ、などと初夏の空気の中で思った。

しかし、ここも影のはずなのに。まだ七月初旬なのに、それなのに、暑い。

「あつい」

だから、ダイレクトに言葉にする。返事がないので、更に訴える。

「あついあついあつい」

「僕も暑いんですから、我慢してくださいよ」

「じゃあ、それを脱げばいいじゃないか。下は半袖なんだろう」

志田にコートを引つ搔かれ、自分の暑さを八割増しにしているものを見た。だが、それができれば苦労はない。

「あー、あついあつい」

「おい」

「夏なんだからしょうがないですよ。温暖化も激しいって言ってたし」

木陰をつくってくれている木をぐたりと見上げながら、愁は右手で持った団扇うちわで、隣にいるクロと志田を軽く仰いだ。外で使っても殆ど効果はないが、一瞬、ほんの一瞬だけ涼しい風が生まれる。

どこかの動物愛護団体っぽい方々が、三年ほど前に街中で配っていたと彼が語ったそれは、端が破れているが、まだ使用可能の域だった。志田が薄目で見たその面には、綺麗な目を潤ませた、可愛らしい子犬の写真がプリントされている。

暑い我慢しろもう駄目そうだよっぱり無理と、初夏の中ほやし続けている彼らの前を、麦藁帽子をかぶった小さな子どもと、その手を引く母親という親子連れが通りかかった。

「あつ、ねこ。ねこだよねこだよ」

子どもに指を指されたからというより、その言葉にびくりと反応して、志田が顔を上げた。彼の体温の急上昇は暑さのためだけではない。

「ねこほしいよ、ねえ、ねこかってもいい？」

「うちにはタロがいるでしょ」

「でもタロはいぬだもん。ねこじゃないもん」

「タロは猫が苦手なのよ。それに首輪してるから、うちの猫にはできないの」

そう諭され、子どもは猫をじつと見ると「ほんとだ」と声を上げた。その子がばいばいと手を振り、母親が困ったように笑いかけるが、当の猫が反応しようとしないので、その尻尾を持って愁が振ってやった。クロはその側でのんきに寝息を立てている。

「首輪さままだな。これがあればすぐに拉致されないし、保健所からも目を付けられない」

「逃げればいいじゃないですか」

「簡単に言うなって。どれだけあの網を持った連中が怖いのかきみには分からないのか」

猫は、本腰入れて訴える。

「保健所ね……」

「だいたい何故犬猫を捕まえる必要があるんだ。捕まえたら殺すんだぞ。いたいけで、無力で、純粋な動物を。まったく人というのはほんとに、動物をものとして扱うなんてそこから間違ってる。まあ動く物と書いて動物だが、かといってそんな無慈悲な扱い……」

いたいけで無力で純粋な動物。それはつまり、誰の事を指しているのか。話の流れから想像に難くないが、敢えて聞くべきだろうか。つらつらと喋り続けている志田を見ながら考える。だがすぐにコートのポケットに手を突っ込み、彼はそれを中断した。

通信が入ったのか、愁が慌てたように小型の機械と会話を始めたので、志田も口を閉ざしたが、その話はすぐに終わった。

「誰からだ」

「さっきのですか。えっと、四万さん分かりますか」

「あの、やかましい男か」

「多分その人です」

間違いないと思う。

「早く来いって」

「これからか」

「今すぐ。苗字で呼んでたから怒ってるかもなあ」

そう言いながらも嫌なそぶりはなく、彼はベンチから立ち上がった。それに気付いたクロが身を起こし、ぐーっと伸びをする。

「これ使ってていいですよ」

「この手で使えるか」

向けられた団扇に肉球のついた手を突き出すと、愁はおかしそうに笑った。嫌味なところなどなく、嫌な気も起きないので、クロと共に志田もベンチから飛び降りる。

一人と二匹が見上げた空には、雲ひとつない。晴れ晴れとした青空が、どこまでも見渡す限りに広がっていた。

エピローグ（後書き）

予想以上に長くなってしまいました。

これを出して半年間、歯科口腔外科と整形外科の門を叩く事になり、レントゲン撮られまくったり右膝に注射や電気流される羽目になったり。いろいろ長かったけど、やっと終わりです。

完全なる自己満足小説です。反省点しか見当たりません。今読み返すとあまりの滅茶苦茶さに恥ずかしくて悶え死にそうになります。

一度でも見てくれた方、ありがとうございます。他の小説さんと間違えてクリックしてしまった方、ご愁傷様です。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8231c/>

ツギハギ

2010年10月8日14時08分発行